
Rebirth

鹿の子

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e b i r t h

【Nコード】

N 4 2 8 8 P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

離婚して一人暮らしを始めた佐倉岬は、同じマンションに住むカメ嫌いの須藤朗と知り合います。果たして二人は恋に落ちる事ができるでしょうか。物語は、岬と朗の視点で交互に進んでいきます。

（プロローグと一話は岬）

完結・プロローグ＋全26話

自サイトでも公開中。

ブローグ

新しい事を始めるなら春がいい。

そうして二人で生活を始めたはずだった。

「ゴーコン？」

「そう。ゴーコン」

蝉の鳴き声がマンションの部屋中に響いている。

今年の夏は、梅雨が明けた途端に容赦なく始まった。

大きな窓から見える七月の午後の空には、たっぷりとした白くて大きな雲が悠々として浮かんでいた。

緑が生い茂る庭に立つ大きな木には先刻からのBGMの主が何匹か留まって鳴いている。

一階でこれくらいうるさいのだから、二階はもっとうるさいだろうと想像できた。

その、まるで部屋の中にいるかの様な大きな鳴き声に紛れて、有加の言葉が上手く聞き取れない。

「えっ？ ゴーコンって言った？ ゴーコンって、あの『合コン』？」

「そう。ゴーコンって、あの『合コン』」

ダンボール箱からガムテープを剥がす手が、思わず止まってしまった。

その間もBGMは止まることなく流れている。

開けっ放しの窓からは、庭の木影で涼しくなった夏風が優しく入ってきた。

髪を後ろで一纏めに使っていた私のうなじにその風が気持よく当たってくる。

産毛をさわさわと撫でていく。

有加の言葉が信じられなかった。
私が合コンに？

有加は、私のそんな反応を気にもせず次々と開けたダンボール箱から出したタオルを洗面所の収納棚にしまっっていく。

みるみるうちに、箱の中身が減っていくのがわかる。

「岬ちゃん、手が止まってるよ」

見ていないようで見ている有加からチェックが入る。

「えっ、ああ。はい」

有加の言葉に促されるように、止まっていた手を再び動かした。剥がしてもなお、べとべとしているガムテープをくるくる巻いてゴミ箱に入れる。

その間も、ちらちらと有加の様子を伺ってしまった。

有加は二つ年下の私の従姉妹だ。

「実はさ、今日の合コン。私が幹事なんだけどね。急遽一人来れなくなったコがいてさあ」

空になったダンボールを、有加は手際よくペタンコにして積んでいく。

「でね、やっぱり。『合コン的』には、女の子が少ないのって良くなくてさ。だから岬ちゃんが来てくれると、私がすごく助かるんだけどな」

そーっと有加を見ると、有加もじーっとこっちを見ている。

あはは、と作り笑いで誤魔化そうとした私に追い討ちをかけるように有加が言う。

「今日のお昼のさあ、差し入れのお弁当。今朝、早く起きて作ったんだよね。ワタシ」

……。

確かに、今日の有加の差し入れのお弁当は力が入っていた。
おにぎりの具だけでも、六種類はあった。

お昼まで手伝ってくれていた、弟の港もばくと食べていた。

「岬ちゃんはさ、夕飯を食べるつもりで来てくれればいいから。ただ、いてくれるだけでいいから」

いたずらそうな瞳を輝かせながら有加は申し訳程度に両手を合わす。

「お願いしますよ！ 岬大先生！」

「あのねえ」

その時、しゅんしゅんとお湯が沸く音が聞えた。

「あつ、岬ちゃんは 座ってて」

機敏な動きで、有加はダンボールの合間を縫ってキッチンへと向った。

そろそろ三時になるので、お茶にしようとお湯を沸かしていたところだった。

そういえば、有加はおやつも持参していた。

キッチンで有加が紅茶を入れる音が聞える。

キッチン用品は真っ先に梱包を解いていた。

朝から一緒にいるのに、こんな今更かわりの人が頼めないような時間に話を持ちだすところに、有加の作戦を感じる。

でもまあ、有加がそんなことが出来るのも、私にだからって事もわかってる。

何だかんだ言っても、私たちはお互いを信頼していたのだ。

しかし、いいんだろうか？

いくら面子合わせといえど、私なんかで。

まあ、私に頼む位なのだから相当困っている状態なのだろうけど。

「何時？」

がらんとした部屋は、思いのほか声が響いた。

有加の網にまんまと引っかった私の声が。

キッチンからひよいと有加が顔を出してきた。

「来てくれるの？」

有加のくるとカールした睫の向こうで、大きな目がくると動いた。

昔から、有加には甘い私だった。

「あのね、七時半から『f』ってお店なんだ。場所はさ、駅のガード下を越えてそのまま少し行ったところにあるイタリアンなんだ。ここからだ歩いていけるし。だから、岬ちゃんも行きやすいかなあ、なんてさ」

『f』。

ああ、不動産やさんが教えてくれた『行列が出来るお店』ね、と思った。

住宅街にある人気のお店として雑誌に載ったと、説明された気がする。

そんな人気のお店を選ぶあたり、有加の『合コン』への力の入れ込みようがわかる。

お目当ての力でもいるのだろう。

「わかった、行くわ」

今は、三時を過ぎたところなので今からもう少し荷物をほどいてシャワーを浴びて。行けないことはない。

「だから岬ちゃんって好きなのよ。あつ、合コン代は私が出すから。岬ちゃんは体ひとつで来ればいいからね」

欲しかったおもちゃを手に入れた様な素直な喜びかたを有加はする。

私に有加みたいな無邪気さがあれば。

あるいはもう少しあの生活が続いていたのかもしれない。

そつと左手の薬指をさする。

いつも指輪をしている方ではなかったので、そんなに跡も付いていなかった訳だけど。

有加と視線があった。

有加の瞳が悲しそうに揺れる。

「合コンに来てくれなくても 私は岬ちゃんのこと大好きだからね」

有加は、恥ずかしげも無くそんな言葉を言ってくれる。

有加なりに、私のことを慰めようとしてくれているのだ。

「お弁当の差し入れをしてくれなくても、私は有加のことが好きだからね」

少しちゃかして言葉を返す。

「ぶー！ お弁当だけじゃないモンね。シフォンケーキも焼いてきたんだモンね」

紅茶とケーキを載せたトレイを持って、有加が笑って立っている。

新しいことを始めるのは春がいい。

そう言って二人の生活を始めた私たちがその生活をおしまいにするのを選んだ季節は、夏だった。

佐倉 岬と山村 仁は二人が二十五歳の春に結婚して、二十九歳になった今年の夏に別れを決めた。

1話・ドナルドな彼

パツと照明がつき室内が明るくなった途端、壁側にまとめておいた段ボール箱が煌々と映し出された。

「大丈夫なようですね。すみませんね、時間が遅くなって。どうも毎年この時期はクーラ関係の仕事がたてこんでしうがなくてね」
そう言いながら、年老いた電気屋さんが照明の入ってたビニール袋を纏めだす。

私の両手には、電気屋さんから貰った白いタオルが三本のつていた。

約束の時間に大幅に遅れたお詫びだそうだ。

ビニール袋越しに、タオルに印刷された電気屋さんの名まえが見える。

『大和でんき』

電気屋さんの首に巻いてあるタオルにも、同じように名まえが入ってた。

「あつ、そのままで結構ですよ。捨てときますから」

時計は既に七時を過ぎていた。有加との約束の時間が気になった。

「そうですか。じゃあ、すみませんが」

リビングの照明を付けに来てくれた電気屋さんのろのろと帰り仕度を始めた。

マンションのリビングには、照明が付いていなかった。

不動産を見て回った時に、照明の付いて無いマンションがいくつもあつたのには驚いた。

私は、そんな事も知らなかった。

いろんな事を何も知らないで、ちゃっかり結婚生活を送っていた。

仁に頼りっぱなしだったんだ。

近所の電気屋さんには、このマンションを決めた足で向った。
と、言つかたまたま不動産屋さんの隣に、この電気さんがあつたというか。

私も電気屋さんと一緒に家を出る事にした。

『代官山とかのお店じゃないし、住宅街の気軽なイタリアンのお店なんだから。岬ちゃんも洋服とかラフでいいんだからね』
その有加のお言葉に甘えて、私はダンボールの一番上にあつた服を着た。

今日は、洋服を全て箆筒に入れるところまではいかなかった。
とりあえず、皺になったら困るスーツやコート類を括りつけの箆筒に掛けた。

だから明日もまた、収納作業が待っている。

私は、本当になんて事ないシャツになんて事ないパンツを穿いた。

それでもって、小さなストローバックにお財布とハンカチとティッシュを入れた。

そして玄関に出してあつたスニーカーを素足のままで履いた。
つまり、全く気合のない格好だった。

夕方にシャワーを浴びたので、もうきっちりとした洋服を着たい気分ではなかったのだ。

それでも、とお化粧だけは申し訳程度にした。
流石に男の人のいる席で、すっぴんでいられる程に若くはなかったし。

玄関の扉を開けると、夜風がさーっと部屋の中を吹き抜けていった。

すっと降ろした髪が、肩の上で揺れた。

顔にかかってきた数本の髪を、手櫛でそつと直す。

髪の毛はまだほんの少し湿っていた。

風が吹くと頭がすーっとして気持ちがよかった。

私はそこで、大きく深呼吸をした。

夏の草、夏の花、夏の木。

勢いよく草木が伸びていく息づかいを夜風が運んできていた。

夏の夜の独特な匂いがした。

盆踊りの音、夜店、近所での花火大会。

夏の夜はわくわくするものがある。

楽しい思い出が一杯ある。

そんな気持は大人になっても変わらない。

私は夏の夜が大好きだった。

『おまえを許さない』

仁の声が蘇る。

私は急いで頭を振った。

「では、また何かありましたら」

電気屋さんの皺枯れた声に、はっとする。

「あつ。はい」

声だけで笑うような、作った笑顔で私は応対した。

エントランスホールを出たところに、電気屋さん名まえの入った軽トラックがとめてあった。

電気屋さんは丸い背中のまま、ぺこりと頭を下げて運転席に乗り込んだ。

「お世話様でした。お気をつけて」

運転席に座る電気屋さんに、窓越しに声を掛けた。

さあて、急がなきゃ、と思う。

私は、駅に向って勢いよく歩き出した。

「ああー！ 電気屋さん！」

突然背後で、男の人の大きな声が聞えた。

驚いて振り向くと、運転席に乗っていたはずの電気屋さんが再びエントランスホールに入っていく姿が見えた。

どうやら、マンションの住人に呼び止められたようだ。

ホントに、この時期の電気屋さんは忙しい。

マンションから歩いて十五分もかからないところに合コン開場の『f』はあった。

腕時計を見ると、七時半ジャストだった。ほっと胸をなでおろす。

大きな木製の重い扉を開けた瞬間、ニンニクや香草の良い香りが鼻腔をくすぐってきた。

カチャカチャと食器やグラスの触れ合う音もした。

食事中のお客さんは、家族連れからカップルまでと幅が広い。

小さな子ども用の椅子も用意されていた。

各テーブルの上には、円筒形の背の低い蝋燭が水を浮かべたガラスの容器の中でほのかな灯りを揺らしていた。店内の照明も、暗すぎもなく明るすぎもない絶妙の効果を出していた。

寒すぎない位に、軽くクーラーも効いていた。

お店の人の注文を受ける、はきはきとした元気な声も聞える。

かすかに聞えるジャズのBGMにも好感が持てた。

いいお店だった。

かなり計算されて出来たお店だという事がわかる。

住宅街にあつてうるさくない、むしろ住んでいる人が自慢したくなる佇まいのお店だった。

係りの人に案内された奥のテーブルには既に有加が座っていて、私を見つけると嬉しそうに手を振ってきた。

六人。私を入れて七人になる。席はあと二つ残っていた。女の子たちは『代官山のお店』でなくても、お洒落にしっかりと力が入っていた。

まあ、当然かな。

「岬ちゃん、どっちがいい？」

私の前にやってきた有加が、にゅっと両手を出してきた。

有加は、薄いブルーとベージュのチェックのノースリーブのワンピースを着ていた。

薄手の生地が、細い体にとっても似合っていて可愛かった。

彼女の白くて小さな手の平には、可愛い花柄の紙が二つ小さく四角に折りたたまれてのっていた。

「くじびきで席を決めてるんだ」

テーブルに目を移すと、着席している人たちのにこにことした顔とばっちり目が合ってしまった。

「こ、こんばんは。有加の従姉妹の佐倉 岬です」

いきなり、取って付けたような自己紹介をしてしまった。なんだから、間抜けな展開だった気がする。

空いている席は二つ。

それも並んであった。

はつきり言つて、私はどっちの席でもいいのになあと思った。

私の場合は、ただご飯を食べるだけなんだし。

「じゃあ、はい」

右側の紙を選んで有加に渡した。

有加の細い指が、畳まれた紙をするすると広げていった。爪もつやつやとしたベージュ系のマニキュアだった。

「えっと、『B』だから」

空いている席の一方を有加は指差す。

「じゃあ、岬ちゃんはここね」

私は、有加に指定された席に大人しく座った。

右隣は空席になるのかな？

私の左隣は、背の高そうな（着席の状態なので何とも言えないんだけど）すつきりとした男の人だった。

「こんばんは」

優しい笑顔の人だった。

「こんばんは」

自然とこちらまでほほ笑んでしまった。

その人を挟んで向こう側に有加がいた。

有加の色白の頬はピンクに染まっている。

そっか、と、ピーンときた。

この優しい人が、有加のお目当てのカレなのね、と。

そう思うと遠慮なくこのカレの横顔を見てしまう。

「坂田！ あと誰を呼んだんだっけ？」

私の目の前に座る、細めの眼鏡をかけた男の子がこのカレに声を掛けた。

『坂田』君、か。

「あとは、朗だよ。朗」

坂田君の返事に、今度はもう一人の男の子が笑い出した。

「じゃー、やつぱ。朗の言う通りじゃん」

女の子たちが、えっ？ なに、なに？ と、ざわめきだした。

「いや、朗っていうこれから遅れてくるヤロウが言うにはさ。『待ち合わせをした時ってその場所に一番近いヤツが、絶対に一番遅く来るんだよな』って。それ、昔っからのあいつの持論でさ」

みんな一斉に「なるほどー」と頷きだす。

私もその持論は、なかなかいい発想だなあって思った。

「今回、朗の家がここから一番近いモンな」

ちなみに、びりから二番目の私もおそらくこのメンバーの中では、

お店に一番近いところに住むヤツだろう。

電気屋さんが来るのが遅かったとはいえ、その持論とやらにドンピシャと当てはまってしまう。

「わっりー！」

その時、バタバタと店内に入ってくる足音と共に、私の隣にどっかと人が座った。

びっくりして、そーっと顔だけその人に向ける。

目線の先にオトコノコがいる。

「あ、コンバンハ。スドウ ロウです」

乾いた声の人だった。

「コ。コンバンハ。サクラ ミサキです」

なんだか勢いあまって、こっちまで自己紹介をしてしまった。

おまけに、つられるように私まで、パサパサとした声になってしまった。

『スドウ ロウ』君か。

グレイの半そでのＴシャツから、そんなに日に焼けていない腕がよっきり出ている。

テーブルに置かれた彼の左手首には、見た事もないような時計がはめてあった。

そしてその液晶の画面には文字盤が浮かんでいて、デジタルな長針・短針・秒針が時を告げていた。

じっと時計だけを見てしまう。変わった時計だった。

遅れてきた『スドウ ロウ』君に周りの男の子たちから「おっせーよ！」との野次が飛ぶ。

「珍しいね、朗が時間に遅れるなんてさ」

坂田君がひよいと顔を出して『スドウ ロウ』君に声をかける。

『スドウ ロウ』君の顔がくるっとこっちを向いた。

「ごめんな。ちょっと出掛けに、ごたごたしちゃってさ」

すまなそうな顔をして、『ロウ』君は坂田君に謝る。

どうも、彼の声の質のせいか彼の名前が漢字変換できない。

『ロウ』だなんて、一体どんな字を書くんだろう。

「では、全員揃ったことなので、早速始めたいと思います」

坂田君の声でみんなの瞳が柔らぐ。

この人はアタリかもね有加、と心の中で思う。

「今日の幹事は、坂田と隣に座る石田 有加さんです。まあ、食事会って事なんで、どんどん食べてどんどん飲みましょう」

その言葉を合図に、お店の人がワインやビール、そして前菜を運び出した。

ざわざわとした心地よい店内でこうして『合コン』は、和やかに始まった。

話しをしていくうちにどうやら、今日の集まりは、お互いの学生時代の仲間というメンバーだということが分った。

有加は、大学の時の友達を呼んで坂田君は高校の時の友達を呼んだそうだ。

そしてこの二人の知り合ったきっかけは、以前開いた別の『合コン』らしい。

『合コン』といっても大学の時の『合コン』とは違い、（私の合コンの知識はそこで止まっていたし）『イッキ』もなければ『王様ゲーム』もない。

坂田君の言う通り、ホントに『食事会』だった。

でも、一番驚いたのは徐に始まった『名刺交換』だ。

男の子はともかく、女の子まで名刺を出している。

女の子の名刺は、薄くピンクだったり紫だったり。メールアドレスや、携帯の番号が書いてあった。みんなそれぞれの工夫を施している、お洒落な名刺だった。

気がつくと、有加まで名刺を出している。

へえ。凄いのねえ。

そんな物を持って来ていない私は（そもそも、私は会社からの『白い名刺』しか持ってないし）男の子から名刺を貰うばかりであげるものは一切無かった。

「佐倉さん、電話番号教えてよ」そんな、言葉にも「ごめんなさい。引越したばかりで、まだ」と答えた。

「携帯は？」「ごめんなさい。持っていないの」会社から仕事での時に持たされるのがあったので、それで十分だった。

なんだか手持ち無沙汰でみんなのやり取りをぼっーと見ている。

その間、しっかりと食べたり飲んだりはしてたんだけど。

ふと、右隣を見ると隣の席の『ロウ』君も名刺交換には参加せず、なにやら心ここに有らずと言った感じでしきりに時計に視線を落としていた。

ふいに前に座る眼鏡の飯島君に話し掛けられて飯島君が好きだという、サッカーや野球の話になった。弟がいる私にとっては、こういった話題はお得意分野だった。

相槌をうちながら、時折質問してみたり。

有加の手前、ほどほどに感じ良くしないと、と思う。

そしてそうしながら、こういった気のつかい方って何かに似ている、と思った。

『THE 接待』。

今日のこれは、『合コン』と言うより、私にとっては『接待』といった感じだった。

周りの人に向けて作った偽者の笑顔がぴったりと顔に張り付いたまま、顔の筋肉が固定されていく。

『合コン』は、これで最後にしよう。

まあ、誘われる事もないだろうけどね。

それにしても私はともかく、もう少し盛り上がりを見せてもいいだろうとお年頃の隣の男『ロウ』君も、なんだか冴えない感じだった。

時折一人何か考え込んで違う世界にトリップしながらも、所々で会話に参加して、そして料理を食べていた。

食べ方も、機械的に食べ物を口に運んでいると言った感じだった。

もしかしたら、この人も誰かさんのかわりの人なのかもしれない。

そんな風に思えた。

デザートにコーヒー。

最後まで、おいしいお料理だった。

今度は、有加と二人でゆっくり来ようと思った。

おいしいんだけど、今ひとつお料理に集中できなかった。

全く初めての人たちと、楽しく食事するのは結構難しい。

コーヒーを飲みながら、『二次会』の話になった。

困ったな、帰りたいなあと思った。

明日会社だしなあ。

「オネエサン、帰りたいんですよ」

『ロウ』君がいきなり私の肩をつついた。

『ロウ』君と話すのは、「コンバンハ」以来だった。驚いて、返事の声すら出ない。

コノヒト、私に話し掛けているの？

『ロウ』君の顔を見つめてしまう。

改めて見る『ストウ ロウ』君の顔はオモシロイ顔だった。

ハンサムなのか、そうでないのか、わかりにくい顔だった。

くつきりとした二重は『多分』ハンサムな要素だけど、ぱきつ、にぱつとした口はDonald Duckにも似ていた。

でも、私はこういう口が嫌いではなかった。

表情や角度によってコノヒトの顔はかなり違って見えるんだろうな、と思った。

その『ストウ ロウ』君のドナルドな口の口角が可笑しそうにきゅっと上がる。

やっぱり、間違いなく隣の『ストウ ロウ』君は、私を見て私に向かつて話しかける。

しかし、そのでかい口から出る声は小さかった。周りに聞えないほどの声だ。

わざとそうしているようだった。

「俺も家に帰りたいんだけど、これって『合コン』だろ。一人で抜けるって訳にもいなくてさ。だからさ、俺と一緒に抜けてくれると助かるんだけど」

いきなりの申し出で、私の脳みそはフリーズしてしまった。

ハンサムな二重が私を見つめる。

ドナルドな口がにっと笑う。

二段攻撃か。

『ストウ ロウ』君は、要注意人物だと感じた。

けれど『ストウ ロウ』君のその案は、私にとっても良策と思えた。

有加には悪いけど、二次会まで接待はごめんだった。帰って、明日の服だつて選びたかった。

「うん、いいわよ」

私も小さな声で『ストウ ロウ』君に返事をした。

まだみんなが着席の状態だった。

二次会は、『カラオケ』にするか『バー』にするかで話をしてるところだった。

隣の男『ストウ ロウ』君が立ち上がる。

坂田 浩二君以下、席にいた全員の注目が集まった。

「あつ、俺さ。佐倉 岬さんをお持ち帰りするから。で、二次会パスね」

そういうと『ロウ』君は、みんなに向ってひらひらと手を振ると

私に左手を差し出してきた。

ちよつと。

オモチカエリって言葉は、どうよ？

思いつきり動揺しながらも、そうとは悟られぬような余裕の微笑で私も『ロウ』君の手をとった。

ひんやりとした、さらつとした手の平だった。

汗なんかかきそうに無い、手の人だと思った。

そしてまるで、学芸会の王子とお姫様の様な安っぽい仕草で、私たちは啞然とするみんなの前からお店の外へと歩いて行った。

恥ずかしい。

思いつきり恥ずかしい。

でも、もう二度と会う事の無い人たちだ。

まあ、有加には後日説明すればいいわけだし。それでいいよね、と思った。

店から出るなり、『ストウ ロウ』君は私の手を離した。

別に、全くいんだけど。

何だかこう、そうあからさまに離さなくてもいいんじゃないかって少しだけ思った。

「電車？」

『ストウ ロウ』君は私に聞いてきた。

「歩きです」

私も短く答えた。

「へー。そうなんだ。俺の家もこの側だから住所が近かったら送ってあげようか」

『ストウ ロウ』君が黒いジーンズのポケットに手をつ突っ込んでじやらじやらとカギを探す音がした。

「飲酒運転の車には乗りたくない」

つい、きつい声で私が言った言葉に『ストウ ロウ』君はポカン

とした顔になった。

「酒？　今日は飲んでないけどって、ああ、これか？」

というと、車にはやけに小さなカギがポケットから出てきた。

そして『f』の前にとめてある、シルバーの自転車を指さした。

「立ち乗りできる？」

「えっ？」

「ほら、これ荷台ないしさ。　あなたスカートじゃないし、大丈夫だよね」

そう言つと『スドウ　ロウ』君は、さつさと自転車にまたがった。

そんな『スドウ　ロウ』君のじつと私を見つめる目は、なんだかとても意地悪に思えた。

『スドウ　ロウ』君に、挑戦されている様な気分になる。私は、ムキになって自転車の後ろにまたがった。

こういう自転車の乗り方は、よく港がしていた。

思い出したくないのに、ひょんなことから急に私は過去に引き寄せられる。

そして、頭の中に映像が映し出される。

『みつさきちゃん』

高校からの帰り道、後ろから声がした。

『岬』

静かにそう言つて、隣を歩く山村君が私の前に右腕を出してそのまま自分の後ろに私を導いた。

そんな私たちの横を、中学生の港が友達と自転車に立ち乗りしながら通り過ぎていった。

私にバイバイと手を振っていた。

突然の事で驚きながらも笑ってしまった。

あんな乗り方は危ないって事はわかってはいるけど、それとは別のところで弟が楽しそうにしているのは、お姉さんとしては嬉しかったりするからだ。

『馬鹿なヤツ』

言い捨てるような、山村君の言葉に驚いた。

バカナ ヤツ。

確かに、バカかもしれないけど。

『岬の弟だろ。もう少し、しっかりさせるよな』

『……うん』

でもねえ、という言葉が出なかった。

港を見て嬉しかった気持がずっと冷めてしまった。

両手を『スドウ ロウ』君の肩に乗せた。

Tシャツ越しに『ロウ』君の体温を感じた。

『ロウ』君も、港みたいに立ち乗りをしていたくちなのだろう。

なんだか、そんな『ロウ』君に私はほっとした。

「よっしゃー」そう言つて『スドウ ロウ』君は自転車を漕ぎ出した。

自転車が進みだした瞬間思わず『スドウ ロウ』君の肩を掴む手が強くなる。

足にも力が入る。

私、大丈夫なんだろうか？

乗ってられるかしら？

そんな私の気持などお構いなしで、自転車はぐんぐん進んでいく。

段々と体も慣れてくる。

コツも掴んできた。

そうすると、周りの景色も見る余裕が出てきた。

歩くのとは少し違う速さで、街が移っていく。面白い。

自転車に乗ることじたい、もしかしたら小学生以来かもしれない。

「気が強いね、佐倉 岬さんは」

おかしそうに『スドウ ロウ』君は話しかけてきた。

「……」

さっきまでの『接待顔』の仮面が剥がれた、と思った。

まあ、いいやあと思う。

この人は、有加の想い人でもないようだし、この先も全く関係の無い人だと思うし。

そんなことを計算しちゃうところが、二十九歳の悲しさでありましようか？

そう思っただけで開き直りながら、はたと思う。

「ねえ、私の家の方角はこれでいいんだけど。私、住所を言ったっけ？」

確かに私の家にどんどんと近くなっているのは間違いない。

けれど、合コンの最中もその後も具体的な家の場所までは言わなかった筈だと思った。

「気の強い佐倉 岬さん。飲酒運転の車を断るところまでは上々だけれどさ、女の方がポストや玄関のプレートにフルネームを出すのはよした方がいいと思うよ。これ、常識」

玄関、ポスト。ねーむづれいとお？

「な、何で。何でそんなこと言うの？ えっ？」

『スドウ ロウ』君の言う通り、私は集合ポストに、フルネームを貼っていた。まだ、紙で書いてテープで止めただけの『仮』のものだ。それも貼ったのは、引っ越して来た今日のこと。

「佐倉 岬さんさ、マンション付いたら『205』のどこ見てみなよ。『スドウ』ってあるからさ」

「同じマンションってこと？」

「そういう事になりますかね」

「知ってたの？」

「んー。知っていたと言うより、段々とわかったというか」
自転車は近くの公園を横に見て進んでいった。

ここまで来れば、マンシヨンはすぐだ。

「電気屋さん、呼んだでしょ。佐倉さん」

「ええ、リビングの照明を」

あれ？『ああ！！ 電気屋さん！！』の声の人って。

「もしかして、電気屋さんを呼び止めた人って、スドウ君？」

「大正解。うちのクーラの調子が悪くてさ」

全く、なんて狭い世界なんだろう。

呆然として言葉にならない。

少し前までは、もう2度と会わない人だと思っていたのに。

同じマンシヨンの住人？

うわぁ面倒くさい、と思った。

そうこうするうちに、私たちを乗せた自転車はするりと、マンシヨンの前に到着した。

『スドウ ロウ』君は自転車を止めた。私は用心深くそれから降りた。

緊張していたせいか、足にまだ突っ張った感じが残っている。

「何もそんな、恐々降りなくってもさ」

「だって、初めてだったんだもん、こんな乗り方」

つい、ぽろつと本音を言ってしまった。

ビックリする『スドウ ロウ』君と目が合う。

しまったぁ、と思う。

ちよつと、しくじったかも。

「初めて？ 佐倉 岬さんは、賭博師に向いているね」
賭博師？

「なによ、それ」

「はったりと度胸」

……。

すごいと突いてくる。

それだけに、余計面倒くさい人だ。

あんまり、知り合いたくないのだ。

男の人というだけで、できたら友達さえ欲しくない。

男の人は、面倒くさい。

「これ、駐輪場に置いて来る」

『スドウ ロウ』君はそう言うと、さっさと自転車を押してどこかへ行ってしまった。

困った。

自分だけ先に部屋に戻るのも、なんだか……ねえ。

しかたが無いので、集合ポストの前で待つことにした。

『ありがとう。おやすみさない』くらいは、言っのが礼儀だろう。

ふと、先刻言われたことを思い出してテープで止めた名前を剥がした。

『スドウ ロウ』君の言う通りだと思った。

郵便物が転送されて届くか心配で、つついフルネームを出したのだけど。

多分、そんなことをしなくてもきちんと郵便物は届くのだろう。

郵便の心配よりも、自分の身の安全を図らなくてはいけないのに。

男の人と暮らすことに慣れていて『自分の身を守る』ことに鈍感になっていたんだろう。

危機管理が、曖昧になっていたのだろうと思う。

まだまだ、仁との生活が、自分にいろいろな甘さを出しているんだろうなと思う。

「あれっ。待っていてくれたんだ」

エントランスホールに『スドウ ロウ』君の言葉が響く。

「一人で先に戻るのも悪いかなくて」

明らかに、待っているとは思っていなかったその声にまたもや、しくじったと思う。

「危ないなあ、佐倉 岬さんは」

「危ない？」

言われた意味が理解できない。

「その1。よく知らない男に簡単に送ってもらわない。その2。よく知らない男を『悪いかな』と思っても待たない。どうするのさ、いきなり俺が佐倉さんの部屋に押し入ったら」

今、自分の甘さを『反省』していたところなのに、またもや『甘さ』を指摘されてしまった。

情けなくなる。

『スドウ ロウ』君の言うことは、どれももつともだった。

だから素直に受け止めるしかない。

「ありがとう」

「はあ？」

「あなたの言うことは、もつともだわ」

「素直じゃん」

「女も二十九にもなれば、少しくらい素直じゃないとね」

二十九にもなって、こんなにも世間知らずな私が恥ずかしかった。

「二十九？ 佐倉さん二十九なんだ」

「そうなの。いい年なのよ」

「二十五歳くらいだと思っていた」

ははは、と笑ってしまう。

だよねと。

こんなしょーもない二十九歳はNGだよね。

それにしても、二十五歳とは。その年は、仁と結婚した年だった。

「いやだな。二十五歳は」

「あれっ？ 普通、若く見られたいじゃないの、女の人って」

「私すでに『普通』じゃないんで」

「『普通じゃない』か。確かそういう題名の映画がなかったっけ？」

「『普通じゃない』って？」

「うん」

あつたかなあ？

もしあるなら、それは私が見るのに丁度いい映画かもしれない。

「俺、二十七なんだ」

まあ、予想通りと申しましょうか。

「別にスドウ君に年は聞いてないよ」

なんて意地悪なことを、私からも言ってみる。

「まあ、一応。挨拶みたいなもんで」

「挨拶か。同じマンションだもんね」

同じマンションかあ。

「で。同じマンションのよしみということで。佐倉さん、ちょっと俺の部屋に来てくれないかなあ」

『スドウ ロウ』君の言葉に、耳を疑う。

「はあ？ あなた今 私に『甘い』って。知らない男には気をつけろって」

「ほら、だから今 自己紹介したじゃない。もう俺たちオトモダチでしょ？」

「オトモダチ」

「そう、お友達。という事で、お願いしますよ、佐倉様！」

確か、こうして昼間も誰かに何かを頼まれなかったっけ？

でも、悲しいかな。

お姉さん気質の私は、頼まれるとNOとはなかなか言えないのだった。

しかも、なんとなく『スドウ ロウ』君には借りがあるような気

持ちにさせられたし。

『205号室』は、私の真上の部屋だった。

部屋に近づくにつれて、『ストウ ロウ』君はなにやら緊張した顔付きになってきた。

そういえば、しきりに時計を気にしていたし。

なんだろう。まさか、何か犯罪に関係するとか。

冗談じゃない。

いくら人の良い岬さんでも、犯罪だけは勘弁して欲しい。

205号室。

『須藤 朗』という表札があった。

初めて彼の名前が、漢字になった。

「あ、開けます」

須藤 朗君の言葉が震える。

「ちょっと待って」

おかしいじゃない？

何で自分の部屋のカギを開けるのに、そんなに神経を使うのよ？

須藤 朗君のカギを回す手を上から握る。

「なんか様子が変わるんだけど。犯罪に関係することじゃないでしょうね」

一瞬惚けた顔で、須藤 朗君が私の顔を見る。

「犯罪か。確かに、他の人にとっては何てことない事だろうけど俺にとっては犯罪に等しいことだよな」

ぶつくさ言いながら、私の手を上に乗せたまま須藤 朗君は力ギを開けてドアのぶを回す。

私もなんだか手を離せなくて、そのまま一緒にドアを開けた。

玄関の中の灯はセンサーで自動的に点くようになっていた。ぽつと点いた灯に照らされて、一つの小さな水槽が見えた。そして、水槽の中には。

「うわー！」

須藤 朗君は大きな悲鳴を上げながら玄関の扉を閉めた。
まだ、廊下にいた私たちは再び玄関前に立つことになった。

「あつー！ やっぱ遅かったか！ やっぱ途中で帰るんだつた」

須藤 朗君がキャラクターに似合わない弱気な様子でしゃがみこむ。

あの玄関に、そんなにこの人が怖がるようなものがあつただろうか。

「ねえ」

と言つて私も隣りにしゃがんだ。

「なにが、どうしたの？」

「……怖いんだ」

怖い。

「なにが？」

「……」

ここまできて、須藤 朗君は何か言うのを躊躇しているようだった。

「か」

「か？」

「亀」

「かめ？」

「うわー！ 口にしたくもない、その名前」

そう言つと、須藤 朗君は頭を抱えて蹲る。

「つまり、須藤君は水槽の中にいた、その……それが怖くて、私について来てつて言つたわけ？」

「そーです」

私は大きいため息をついて、おもむろに玄関の扉を開けた。

すると、先刻と同じように灯がついて、その下には先刻と同じように小さな水槽の中に小さな亀が、石の上にちょこんとのつていた。

「かわいいのにな」

水槽をつつきながら私は亀くんに向かって話しかける。
再び廊下に出る。

須藤 朗君は相変わらずしゃがみこんでいる。

仕方がないなあ。

「私が預かってあげようか？」

その言葉に、須藤 朗君は顔を上げた。

二重のオメメがうるうるしている。

初めて須藤 朗君よりも、優位に立った気がした。

ちよっぴり気分がいい。

「もしかして。最初っから、そのつもりだったんじゃないの？」

からかうような口調で私はそう聞いた。

「……預かって貰えるの？」

須藤 朗君の顔が輝く。

「預かるだけよ。持ち主がいるんでしょ。その人が取りに来るまでの間だからね」

へなへたと、須藤 朗君は廊下の床に崩れていった。

「助かる。ありがとう。その、持ってきた奴は解っているから。今からでも連絡をとって、なるべく早く取りに来るように言うから」

須藤 朗君の白くなった顔は段々と生氣を取り戻したよう赤味が戻ってきた。余程、怖かったのだろう。

でも、そんなに怖いもんかなあ。亀。

相変わらず廊下にぺたつと座ったままの状態で、ほっとした顔になって須藤 朗君は廊下の天井を仰いだ。

「助かったあ。ああ。今日、『合コン』に行ってホントよかったなあ」

Donaldな口がそうつぶやいた。

「あのさ。その人が持って来る事がわかっていたのなら須藤君は『合コン』には来ないで、その人を玄関払いにすればよかったんじゃない

ないの？」

素直な感想を須藤 朗君にぶつけてみた。

天井を仰いでいた顔がゆつくりと私の方に向いた。

そんなこと全く考えもつかなかった、という表情で。

「佐倉 岬さんは、頭がいいねえ」

その言葉と共に、須藤 朗君の頭はがつくりとうな垂れた。

須藤 朗君は再び落ち込んでしまった。

全くもって、どういった運命のめぐり合わせか。

一人暮らしが始まった初日に私は『亀』という同居人（亀）と、隣の男『スドウ ロウ』君改め二階の男『須藤 朗』君とお知り合いになってしまったのだった。

2話・地味な女

昨夜の電話での約束通り、林^{はやし} 利奈^{りな}は会社近くのコーヒーショップで俺を待っていた。

林は、入り口近くのテーブルに席を陣取って俺の姿を目にとめるとひらりと手を振ってきた。

そんな林の姿を確認して、ああ、これで話しが出来るとほっとした反面、ああこれから話さなきゃいけないんだあと、思うとどっと疲れが出た。

月曜という、一週間がこれから始まる朝だというのに、気分はもうどっぴりと金曜の朝だった。

目で林に合図をしながら、俺はカウンターにコーヒーを買いに行った。

程よく効いたクーラーが心地いい。
ズボンのポケットから小銭入れを出して、アイスコーヒーのショートを頼んだ。

流れるような口調のお店の女の子の声はマニュアル通りで、それはまるで店に流れるBGMの様だと思った。

コーヒーのいい香りに、リラックスする。

ふうとため息が漏れる。

そういえば、家のコーヒーは切らしていたかもしれない。

夕べ、空になったビンをゴミ箱に捨てた記憶が頭を過ぎる。

帰りにスーパーに寄って帰ったほうがいいかなあと思った。

駅前の店は九時まで開いているので、残業が長引かなければ、なんとか寄れそうだなと思った。

考え事すると無意識に右手がネクタイの結び目をにいつてしま

う。
絹のひんやりとした感触が手に伝わった。

ああ、苦しいなあ。

暑かったし。

おっと。

これから、仕事だというのにネクタイを緩めるわけにはいかない。社会人になってネクタイをする様になってもう五年は経つというのに、これだけはどうも慣れなかった。他のヤツに聞いても、別段ネクタイがどうのって言うヤツは俺以外はいなかった。

『アノ生物』といい、ネクタイといい。

俺の意見は少数派だった。

まあ、ネクタイの事で言わせて貰えば、こんなのしたくない位、今日は朝から暑かったんだけど。

いよいよ夏が本格的にやって来るのを実感した。

調子の悪いエアコンの修理には、明日の夜に来てもらうことになった。

まあ、一番暑い日中に家にいないわけだからそんなに不便って事でもないんだけど。

夜だって平気で窓を開けて寝ちゃう俺だし。

でもそうになると、やっぱり今日は明日の分まで多めに残業したほうがいいのか？

コーヒー

クーラー

残業

「おまたせしました！ アイスコーヒーのショートのお客様」

「ああ。ハイハイ」

あわててカウンターに向き直る。

そんな俺を見て、バイトの女の子がくすつと笑った。

マニュアル通りでない、素の笑顔だった。

アイスコーヒーを片手に持ったまま林のいる席まで歩く。

歩きながら、頭の中を切りかえる。

ぼやぼやしている場合じゃないぞ。

ふっと壁に掛けてある時計が目に入る。

八時十五分。

いつもより、三十分は早い。

三十分だ。

そしてこの三十分で、俺はなんとか話しをつけないといけない。

佐倉 岬の部屋に『居候しているアノ生物』の今後の身の振り方について。

「おはようございます」林の弾んだ声が耳に響く。

「……おはよう」

アイスコーヒーをテーブルに置いた。

つい、不機嫌な顔になってしまう。

俺がこんな気分にいるというのに、爆弾落としての張本人のこの浮かれた様に腹が立つ。

林は、そんな俺を気にもせず自分が注文した飲み物（ホイップクリームがたっぷりとのった冷たいコーヒー、または何だかわけのわからない飲み物）をおいしそうに飲み始めた。

俺にとつての林も、まさにこの『何だかわけのわからない飲み物』と言ったところだった。

「林さんさ、よく月曜の朝っぱらからそんな凄いもん飲めるね」

俺は呆れながら、ストローでアイスコーヒーをずっと飲んだ。

何も入れていないアイスコーヒーは、ほろ苦かった。

「えっ？ 飲み物を選ぶのに月曜の朝も火曜の朝も関係ないんじゃないですか？」

マスカラでくつきりした茶色の睫が、びしびしと動く。

睫を動かしながらも、林は尚も得体の知れないドリンクを飲み続ける。

「まあ、いいや。で、いつ持って帰ってくれるのさ。例のヤツ」と、

本題に入った。

水槽の中に生息していたアノ生物を『固有名詞』で呼ぶことさえ、俺は恐ろしかったのだ。

「例のヤツ？ 何でしたっけ？」

予想通り、林は涼しい顔でしらばつくれやがった。

「須藤さん、行っただんでしょ。『合コン』」

「行っただけど」

「楽しかったですか？」

「キミの事ばかり考えて、楽しくなかったです」

まあ正確に言くと、林が持つて来ると言った『アノ生物』の事ばかりだけど。

「だったら、行かなければよかったのに」

「あっちが先約だったの」

大体、坂田が『みかちゃん』だか『ゆかちゃん』と幹事で合コンをするんで（坂田は「食事会」だつて言っただけど、アレは『合コン』以外の何物でもない俺は思う）、『人数調整』（なんだよこの事務的な響きは）の為に来いって、しつこく言うモンでOKした事だった。

そうしたら、俺が『合コン』に行くと知った林が「須藤さんが合コンに行くなら、部屋に亀を持って行きます」なんて訳のわからない脅しを掛けてきやがって。

俺の『アノ生物』嫌いは社内では有名な話で（人の揚げ足をとる様な事ばかり、会社では広まるのだ）本気でヤツを恐がる俺の事を見ると、たいていの人はそのとおいておいてくれたものだ。

だから、いくらなんでもそこまではしないだろうと半分冗談で聞いていた話だったのに。

たかを括って聞いていた話だったのに。

やりやがったんだ、林は。

本当に実行したのだった。

その、犯罪とも言える行為を。

「可愛い女の子はいました？」

林が探るような声で俺に聞いてきた。

可愛い女の子。

「いたかなあ」

ぱつと、佐倉 岬の顔が浮かんだ。

『佐倉 岬』

可愛い顔だったか？

じーつと林が俺の顔を覗き込む。

しみじみ『美人顔』だなあ、と思う。林って。

顔の中のパーツが非常に良く出来ている。

再び佐倉 岬の顔を思い出す。

地味。

佐倉 岬の顔は、地味だった気がする。

「地味な女ならいたなあ」

「はあ？」

「いや、だからさ。聞いただろ。可愛い女がいたかって。で、地味な女ならいたって答えたわけ」

「へえ」

ふふつと林は笑うと、妙に嬉しそうに得体の知れない飲み物を飲みだした。

ストローにはピンク色の口紅がついていた。

ってことは口紅だって食っているってことだろうし。

あの味って女は気にしないのかなあって思う。

俺は気にする。

外国の口紅は嫌な味がする。

できたら、何にもない唇がいいと思う。

でもそうすると、やっぱり顔色が悪く見えるのか？

林のストローを持つ指先にある形のいい爪は、口紅と同じ色だった。

女だなあ、と思う。

女は毎日大変だあーねえー、と。

女といえ、昨日の佐倉 岬はおかしかった。

そーいや、佐倉 岬は化粧をしていたか？

たくさん食っていた様だったから、落ちたのかもしれないな。

それにしても、佐倉 岬の『あの顔』。

恐る恐る自転車を降りた時の『あの顔』。

あれは傑作だった。

かなり俺の中ではウケていた事だけど、まさかあの場で大声で笑うわけにもいかず笑いをこらえるのに苦労した。

それでもって、見ない振りをしてたけど降りた後も佐倉 岬の足はガクガクといていたのだ。

あんなに、自転車に乗ることを何でもない事のように言っておきながらのあの様だもんな。

で、とつと自分の部屋に戻ったんだろうなと思っていたら、どーいう訳かポストのところに立っていて俺にお礼まで言っちゃったりして。

ヘンな女だったな、佐倉 岬。

待つか？ アノ状態で、初対面のオトコを。

俺は、都会で生活しているのにああいっただ善人ぶった無防備な事をする様な女は好かなかった。

自分の身を自分で守ろうとしないヤツはオトコでもオンナでも好ましいとは思えなかった。

だから、意地悪の一つでも言っただけやりたいと思った。ちょこつと突付けば、すぐにぼろが出ると思った。

やった事もない事を、やったかの様に言うそんなはったり女だから当然、俺の言ったことに反撃してくるだろうと思った。

けれど違った。

佐倉 岬はこっちが拍子抜けするほど素直だった。

そうなつてくると、何だかこつちがイイヒト相手に八つ当たりしている子どもみたいな気がしてきた。

まあ、佐倉 岬よりも俺は年は下だから。子どもと言えばコトモなんだけど。

待て。

あんな世間知らずの女よりも年下だつて？

それは、全く面白くない。

「で。いつ持つて帰ってくれるのさ」

改めて林に聞きなおす。

佐倉 岬のことを考える為に貴重な三十分間を使っている場合じゃない。

一体何を考えているんだ、俺は。

「んー。どーしよつかなあー」

オイオイ、林。

どうにかしてくれよ。

まさか。どうにか『しない』気じゃないんだろつなあ。

俺は、今の言葉は聞かなかった事にして話しを続けた。

「あとさ、俺の部屋の鍵も返してよ」

「くれたんじゃないんですか？」

「貸・し・た・の」

「おつかしいなあー」

おかしいのは、おまえの頭じゃ。

林が首を少ししかしげて考えるような仕草をする。

策略家の瞳が面白そうに俺を見つめる。

その顔は確かに魅力的だ。

美人っていうのは、自分が美人だつて事を知っているんだろつか？

鏡を見てどんな気持でいるんだろつ。

聞いてみたいもんだ。

おまけに林は顔だけじゃなくて、仕事だって出来る女だった。

だから、嫌いじゃない。
だけど、好きでもない。

「わかりました。鍵も返しますし、例のヤツも持って帰りますから」
奇跡の様な言葉が、林の口から出て来た。

林が『爆弾処理班の女隊長』に見えた。

偉いぞ、林。

なんだ、三十分も必要なかったじゃないか。
ほっとして、顔だつてにやけてしまう。

すると林は、俺の顔を見ながら残りの飲み物を一気に飲み干した。
ごぼごぼと音を立てて飲み物だけがなくなった。

あのホイップクリームだけが、残った氷の上にのっかっていた。

まるで飲みものの残骸って感じ。

なんだかイヤーな雲行きを感じた。

こうなったら、林の気の変わらないうちに。

「じゃあ、林さんさ。早速」と、話し出した俺の言葉は、突然ぱし
つとした声で遮られた。

「だから、結婚して下さい」

「ああ？」

馬鹿みたいに口を開けたまま、俺は固まってしまった。

今なんて言った？

「け、けっこん？」

「そうです。須藤さん、私と結婚して下さい」

呆然とする俺に満足気なほほ笑みを浮かべながら、林はすつくと
立ち上がった。

俺は林に見下ろされる形になった。

「須藤さん、考えておいてくださいね。私は、私が納得できる答え

が貰えるまでは、例のヤツは取りに行きませんから」

強い眼差しを俺に向けて、林ははつきりところ言い放った。

一体、何が何でどうなっているんだよ。

そして林は、再び俺にっこりと極上の笑顔を向けたかと思うと
颯爽とした足取りで店から出て行った。

結婚？

誰が？

俺がかあ？

ウソダロ！

『厄年』って、やっぱりあるんだろうか？

「えっ？ 厄年？ 女のならわかるけど」

秘書室のベテラン、莊野さんが答える。

しゃべりながらも、肉付きのいい指はぺらぺらと書類を捲っていた。

総務の、俺が担当する書類の提出期限が今日なのだった。

「あつ。ねえ、ここには、何を書くんだっけ」

捲る指が止まり、書類の空欄を指す。

「ああ。ここはですね」

書き漏らされては、手間が余計かかると言うもの。ただでさえ秘書は、席にいるんだかいけないんだか解らない職種だ。（秘書って言うのは、ひとたび役員につかまると、会社にいても「いない」存在になってしまう事があるから。）

俺の指示通りに、莊野さんが綺麗な字で空欄を埋めていく。

「で、厄年って男と女で違うんですか？」

秘書室は、俺のいる総務の隣にあった。

ついでに言うと、その秘書室の向こうにはこの会社の役員さんた

ちのいる部屋がある。

そして総務と、秘書室と役員室はとても密接にやりとりがあった。

「ああ。厄年ねえ。須藤君って仕事は出来るけど、意外とそういったこと知らないのね」

俺に渡す書類を揃えながら、莊野さんは笑っている。

秘書室には莊野さんの他に三人の秘書が在室していた。

「莊野さんだつてご存知ないんでしょ」

少しむつとして言い返す。年下の男子社員が拗ねて言う言葉くらいは、莊野さんは軽く流せる人なのだ。

「私？ だつて気にしないもの。 そんなの気にしてたら、女を四十年もやってられませんかよ」

ゆつたりとした体を揺らしながら、クスクスと莊野さんが笑う。

莊野さんのそれって、答えになっていない。

気にしないから、知らなくていいってことか？ だったら、俺と同じで知らないって事じゃないか。

「あら、でもうちの夫が何か厄がどうのって言っていたわね」と、莊野さんは考え顔になった。

「ただ今戻りました」

はきはきとした声が居室に響く。

「相澤さん、ご苦労様」

莊野さんが、帰ってきた秘書の相澤に声を掛けると相澤のこわばっていた顔が、ふつとほころんだ。

心なしか目も充血している。

もしかしたら、泣いたのかもしれない。

大方、役員さんに無理難題を言われたのだろう。少し気の毒になる。

「相澤さん、お茶をいれるけど何を飲む？」

奥のほうからも、別の秘書が相澤に声を掛ける。

「あつ、私が」

弾かれた様に、相澤が声のほうに反応した。

相澤は秘書室の中では一番年が若い。

入社して、今年で確か三年目だったと思う。

「やってもらえば？ 相澤さん、顔が死んでるよ」

相澤の顔が真っ赤になった。

「す、すみません」

そんなつもりじゃないんだけど、俺の言い方はきついらしい。

やばい、と思った。

今の言葉で、相澤がへこんでしまった。

莊野さんに軽く睨まれる。

「ねえ、相澤さん。私たち秘書室は一つのチームなんだから、そんなに一人で頑張らなくてもいいのよ。どんどん、私たちに相談してくれてもいいんだし。ほら、こういった書類なんかで解らない事があれば、ソームの須藤君に手伝って貰ってもいいんだし」

そう言いながら、莊野さんは書きかけの書類をひらひらさせた。

莊野さんのフォローだ。

莊野さんは人を使うのが上手い。

年数だけで、上にいつてしまう男の社員よりもよっぽど集団で仕事をしていくセンスがある。

おかげで、うちの秘書室は本当にまとまりがよく仕事をこなす力もある。

莊野さんのこういった所を見習いたいと思う。

会社には、困ったチャンの上司もたくさんいるけど莊野さんの様に、『オトナ』だってたくさんいる。

そんな人達が必ずしも出世していないところが『企業マジック』でもあり『人事の七不思議』でもあり。

結局相澤は、先輩秘書の村野さんと一緒に給湯室にお茶を入れに行った。

その後、ばたばたと立て続けに内線電話が鳴り結局秘書室は莊野さんと俺だけになってしまった。

莊野さんは黙々と書類の空欄を埋めている。

あれだな、まるで家庭教師にでもなった気分。

「須藤君、あんまり女の子を泣かしちゃダメよ」

突然、莊野さんに釘を刺される。

相澤のことだろうか。

「すみません」

「違うつて。相澤さんのことじゃないわよ」

「はあ？」

「はあ。これだから最近の若い男子はだんしねえ」

「何ですか？」

「つまりね」

莊野さんが書類から顔を上げて俺をみる。

「会社つてある意味『密室空間』でしょ。他の人よりも少ーし仕事が出来て、少ーし見た目もよければ、女の子は参っちゃうのよ」

「それ、俺のことなんですか？」

「まあね。須藤君さ、この間『禁煙コーナー』を作ったでしょ。ほら、役員室の払い下げのソファとか使つて。ああいうの、ポイント高いのよ」

「別に、俺が作ったわけじゃないですよ。たまたま、今回の室内の間仕切りの関係で、まあ、少し空間が出来て。で、じゃあ、以前から要望があつた禁煙コーナーはどうですかつて上に提案して、通つて、出来たつてことで」

俺の会社じゃないんだから、そう簡単にあちこちいじれる訳じゃない。

もし仮に俺の会社なら、今すぐにでも『全室禁煙』にしてやる。

「まあ、そうなんだけど。それでも、女の子はそうは見ないのよねだから、本気でもないのに女の子に軽口たたいたり下手に手を出したりしないようにね」

「……」

そついう事かあ。

『泣かさないで』なんて俺が『泣かされている』と言つのに。そういえば、林とも確かにそのことで接触が多くなって今回のことに至つたわけだし。

林も以前から『禁煙室』を希望していた一人だった。

そこで禁煙室を作るに当たつて、実質的に女子のリーダーシップをボランティアとしてとつてくれたのも林だった。

だけどなあ。

「もしかして、なにか噂になつてるとか？」

「噂？　なあに？　もう既に誰かと何かあつたわけ？」

冷やかな目で荘野さんが俺を見てきた。

「いえ、ないですよ」

背中に冷や汗たらり。

「忠告までによ。忠告までに。なーんか、須藤君つてお仕事以外はあてにならない感じだし。まあ、四十女の勘かな。じゃあ、はい。この書類よろしくね」

出来上がった書類を俺に渡しながら荘野さんがウインクしてくる。

「確かにお預かりしました」

俺は一礼をして秘書室を出た。

恐るべし、荘野さん。

四十女の勘は侮れない。

でもなあ。なんだかなあ。

コーコーセイでもないのに、そこまで言われなきゃいけないかな。面倒だなあ、と思う。

だいたい二十五を超えた男女が、いちいち真面目にアレコレしないといけないんだろうか。

お互い承知の輔の自己責任だろうが。

なーんて、思つてしまうのは、やはり俺が軽いんだろうか。

いい加減なんだろうか。

林と寝た事は、それは事実でもあるわけで。
そして林は俺と結婚したいと言ってきた。

結婚。

結婚って、そういうもんなんだろうか？

社内便やら、持参であちこちら書類が届きだす。

『今日提出期限』という書類は、たいてい『今日の定時のぎりぎり滑り込み』でやってくる。

もう一日早く処理してくれたら、俺も助かるのにな、なんでそうしないかなあ。

本日最終の社内便のがどっさり俺の机に置かれた。

「これ、須藤さん宛ての。置いておきますね」

同じ総務の小川さんがメールボックスに来た俺宛のものを持って来てくれたのだ。

「ありがとう、助かる」

小川さんがにつこりと笑う。

彼女の手にも、自分の処理分のメールがいくつかあった。

室内の電気がぼつぼつと消え始めた頃、机の上の未開封の社内便も先刻の半分までの量になってきた。

とりあえず残り半分のこれを全てファイルしたら、今日は帰ろうと思った。

チェックをしながら、どんどん部署別に仕分けをしていく。

記入漏れのある部署のものには付箋をつけていく。

がんがんやっていく。

こうして書類を片付けていくのは結構楽しい。

自分がラッセル車にでもなった気分になる。

どんどん開けていくうちに、一つだけ毛色の違うメールがあった。書類でなくて、何か箱のようなものが入っていた。

「なんじゃい、これは」

宛名を見ると。

「業務部 林 利奈」とあった。

そーっと封筒を開けると、中には更に小さなビニール袋に入った箱が見えた。

箱には何かが貼ってあった。

手書きのメモの様なものが。

そのメモは箱にセロハンテープで軽く留めてあるようだった。

片手で袋を持ち上げ、ビニール越しにそのメモの字を読み取った。

メモには、右上がりの癖のある字で『例のヤツのエサです。よろしくね。 利奈』と書かれてあった。

……。

エサ。

再びビニールを掲げて透かして見ると。

箱には、やけにリアルに描かれた『ヤツ』の姿があった。

「x！」

あやうく俺は、大声あげて叫んでしまうところだった。

『下』のボタンを押して、エレベーターを待つ。

社用で使う、会社のロゴの入ったマチ付きの封筒を手に持つ。

この中に、あの箱が入っている。

……恐ろしい。

考えただけで、手の平にじんわりと汗をかいてしまう。情けない。

エレベーターは七階で止まっていた。

ここは五階なので、すぐに降りてくるだろう。

「あつ！ 須藤さん！」

はきはきとした、突然の声にびくつとする。

「ああ、相澤さんか」

私服の夏用の麻のスーツを着た秘書の相澤が立っていた。女子は制服だった。男も制服にすりゃーな。

そうすりゃあ、会社にはＴシャツで来られるのに。

「相澤さんも残業？」

エレベーターが下がってくるのを視覚の隅で捕らえながら相澤に話し掛ける。

もう瞳には赤みがなくなっていた。

自分が泣かした訳じゃないけど、ほつとした。

「あつ、はい。そうなんです。で、あのですね、厄年の事ですが」
そういつて相澤が俺にメモを渡してきた。

「これに書いてありますので」

チーンと軽やかな音がしてエレベーターが開いた。

「ああ？ ああ」

相澤からの紙を受け取りながら２人してエレベーターに乗り込む。エレベーターの中には７階から降りてきたと思われる同じ会社の社員が乗っていた。

俺たちが乗るとエレベーターはほぼ満員になった。

なんだかんだ言っても、どこも残業は減らないのかもな。

ギユインとエレベーターが一階まで降りていく。

「莊野さんからだって？」

隣に立つ相澤をそつと見下ろす。

「はい」

相澤は、やけに小さくなって立っていた。

混んだエレベーターは、女の子には辛いものがあるだろう。

「でも、なんで相澤さんが？」

「そ、それはですねえ」

なんなんだろう？

どうも相澤の歯切れが良くない。

「あつ。相澤さん、実は俺のことが好きだとか？」

ついからかってしまった。

そして、言ってから失敗したと思う。

昼間に荘野さんに釘をさされたばかりだと言うのに。

「いや、今のは」

「ば、ば、ば、バカな事言わないで下さいよ」

冗談だから、と言おうと思った俺の言葉を、異様に焦って真っ赤になりながら相澤が遮った。

そうだよなあ。失礼致しました。

再び、チーンという音と共に、エレベーターの扉が開く。

ぞろりぞろりとエレベーターから人が降りる。

視線の前にあるガラス張りの窓の向こうの外は当然のごとく暗かった。

でも、夏の夜道は嫌いじゃない。

わくわくした感じが、たまらない。

「相澤さん、夕飯は食べたの？」

「えっ？ ああ、まだですけど」

相澤は何かに気をとられていたようで、俺への答えが一瞬遅れた気がした。

「よかつたら、何か食べてく？」

相澤がこつちを見たので俺も話を続けた。

相澤のヘーゼルナッツのような瞳が綺麗だった。

「あつと。ごめんない。約束があつて」

相澤が顔を赤くしながら、やけに小さな声で答えてきた。

「そっか。じゃあ仕方ないな。またね」

「お疲れ様でした」

「はい、おつかれさん」

俺は出口に向って歩き出した。

なのに、何故か相澤は俺を見送るような感じでその場に立ち止まっていた。

ぎりぎりセーフでスーパーに滑り込んだ。
適当に食べるものを籠に入れていく。

そうだ、コーヒー、コーヒー。

コーヒーの棚を見つけ、小さめのビンに入ったインスタントコーヒーをあるだけの種類買いこんだ。

全部で五種類。

これくらいあれば、また当分買わずに済むだろう。
ビールも買った。

このスーパーではビールも売っていた。
ビールやら、コーヒーのビンやらでやたらとところどころとした買い物になった。

ビールは佐倉 岬への賄賂^{わいろ}だった。

この間の合コンでも、佐倉 岬はすいすいとビールを飲んでいた。
つまり、酒好きには酒が一番有効なのだ。

佐倉 岬には『アノ生物』を預かってもらっていた。

しかもとりあえず、今の段階では『例のヤツ』に関しては迅速に
事が運ばないことが見えて来た。

『納得できる答え』っていつのはつまり、林と結婚するということ
となんだろうか。

と言うよりも、林は本気で俺と結婚したいのか？

今日も一日俺なりに考えたけれど、どうもそうとは思えなかった。
林くらいの女なら何も俺でなくても幾らでもオトコはいるはずだ
と思っただし。

なんだかなあ。

何かわけでもあるのかなあ。

もしかして、女子社員の間での賭けの対象になっているとか？
その線が一番ありえそうな気がする。

『須藤 朗は、アノ生物と結婚のどちらを取るか？』

そついや以前も、業務部長の髪の毛は『フェイクカリアルか』で女子が賭けていたよなあ。

まあ世の中の女が全てそうだとは、いくらなんでも俺も思わないけど女って可愛い顔して平気で残酷なまねをする。

それをまた、悪いと思つてないところが恐ろしい。

女だつてことで何でも許されると思っているんだろうか。

もし林のいう事が本気だとしても（まあ、そうとは思えないんだけど）YESなんて言葉は、俺の口からは絶対に出ないんだから。

そんなこといったら半永久的に例の『ヤツ』は佐倉 岬の元にあるということになる。

俺のところにきた『ヤツ』を、ずっと預かり続ける佐倉 岬。

現実逃避だ。

そんな馬鹿なことを考える暇があつたら、この状況を佐倉 岬にどう説明するか考えないといけない。

まず帰つたら、早速、賄賂のビールを彼女に渡し。

箱を渡し。

「あれっ。須藤君？」

マンションの玄関ホールに佐倉 岬が現れた。

佐倉 岬はベージュの涼しそうなロングのワンピースを細い体に着て髪の毛は後ろで無造作にまとめていた。

あつさりした外觀。

ほっそりとした体に真つ黒な髪の毛。

今時、こんなに真つ黒な髪の毛の女は珍しい。

って待てよ、外觀って人の風貌を表すときに使つてよかったんだっけ。

まあ、どうでもいいか。

佐倉 岬に近づくと、彼女の濡れた髪の毛からはシャンプーのい

い香りがした。

風呂だか、シャワーとかの直後なのだろう。

……。

「佐倉 岬さん。昨日の俺の忠告を聞いてなかったの？」

佐倉 岬がびくりとして俺を凝視する。

彼女の反応が面白くて、わざと仰々しく話し出す。

「そんな、いかにも風呂上がりな格好で外に行くなんて、『私を襲って下さい』ってアピールしてるものだって。こんなの、女子高生でもわかってるでしょ」

思いつきり皮肉をこめて、馬鹿にした言葉を選んだ。

なのに、佐倉 岬はまたまたやけに素直に返答してきた。

「外に行こうってことじゃなくて、夕方取り忘れた郵便を、ポストに取りに来ただけけど。でも、これからは気を付けるわ」

またもや、拍子抜けしてしまう。

そして拍子抜けしながらも思う。

こういったものの言い方は嫌いじゃない。

むしろ、佐倉 岬のこういうところって、好感が持てる。

俺なら人に同じ様な事を言われた時に、こう素直に返せるか？

まあ、無理ですな。

はたと気づく。

今、俺はこんな風に佐倉 岬に説教たれたり佐倉 岬の行動をあれこれ批評している場合ではないのだ。

これから『佐倉 岬様』にお願いをしないといけない、という場面だったのだった。

何て話せばいいのか。

どこまで話せばいいのか。

両手にぶら提げたスーパ―の袋が急に重く感じられてきた。

「ビールいいなあ」

佐倉 岬のつぶやきが聞こえた。

「あつ、よかつたら飲む？」

最初から彼女に渡すつもりだったのに、やけに恩着せがましく俺は言う。

「えっ、聞こえた？」

佐倉 岬の顔が赤くなる。

「聞こえました。しっかりと」

「そっか。あはは」

誤魔化したように佐倉 岬が笑う。

へらへらとした笑いだ。

佐倉 岬をつるのにビールは有効。

「ところで。須藤君って面白い買い物するのね」

ビンだらけの袋を覗いて見て佐倉 岬が言ったった。

「ああ、これ」と言って、インスタントコーヒーの小ビンを一つ出した。

「いる？」

「ううん、いいわ」

「そう」

いらないのかあ。

「ああ、これはさ。俺、趣味なの。趣味って言わないか。嗜好？
こうしてさ、インスタントコーヒーのいろんな種類をその時々
の気分で飲むわけ。でもって好きインスタントコーヒーもできちゃ
ったりするわけよ」

自分でも可笑しいくらい饒舌になったしまった。

「えー？ へえ？ ふーん」

そんな俺の説明に佐倉 岬が面白そうに反応してきた。

ふふふ。 須藤君って可らしいの。

佐倉 岬が笑った。

ぎよっとした。

佐倉 岬は、笑うともの凄く可愛かった。

ふふふ。 好きインスタントコーヒー？ おっかしいの。

佐倉 岬の後ろで留めた髪から落ちる後れ毛が笑うたびに肩のあ

たりで揺れた。

さわさわ揺れる髪の毛を、ざわざわした気持ちで見ってしまった。

口元から綺麗な白い歯が少しだけのぞいた。

唇には口紅がのつてなかった。

詐欺だと思った。

こんなありがたい、って思った。

もつと笑わせてみたい。

まるで小学生のガキみたいに、そう思った。

でも俺がそう思った次の瞬間、佐倉 岬の顔がふっと暗くなった。笑ったことを後悔したかのような表情になった。

「ああ。ビール選んでよ」

お互いの間に白々とした空気が流れた。

まるで、今の出来事がなかったかのような。

『無かった』、と言うよりも『あった事を忘れなきゃいけないかのような』と言った方が近い気がする。

「うん。じゃあ」

ビールの中にがさそと入ったビールのうち二本を佐倉 岬は選んだ。

いろんな種類のビールをいれてあったのだが、彼女の選んだのは二本ともモルツ百パーセントのものだった。

俺もモルツ系のビールが好きだった。

「ありがとう。えっと、おいしくかしら」

作ったような明るい声で佐倉 岬が言う。

「えっ、いいよ。預かり代という事で」

こっちまで、ぎこちないような話し方になる。

「そっか。なんか、ごめんね」

なんか、ごめんね。

その言葉がいろんな意味に取れた。

「そういえば、うちのオキヤクサマについてはどうなったの？」

突然、佐倉 岬が聞いてきた。

いきなりのカウンター攻撃だ。

佐倉 岬は、すぐにでも『ヤツ』を引き取りに持ち主が来ると思っているに違いない。

しかし、オキヤクサマか。

なかなか良い表現を使うな、佐倉 岬は。

などと感心している場合ではナイ。

言わないといけない。

「実は、二、三日でどうにかなるってことでは無くなって」

都合が悪いことなので、ついつい声が小さくなる。

昨日初めて会った男（つまり俺）から『ヤツ』を預かってくれただけでもありがたいのに、更にまだもう少し預かってくれなんて、よくよく考えたら非常に不気味だ。

俺に妹がいたら、『そんなオトコからの、そんなヤツは預かるな！』って言うのは間違いない。

他人に危機管理がどうの、なんてほざいていられる俺では全くなかった。

諸悪の根源は俺か？

まあ、しかし佐倉 岬がダメとなると誰か他に捜さないといけない。

佐倉 岬以外に預かってくれる人は。

やっぱ、坂田か？ あいつに取りにこさせるか？

「そう。じゃあ、しばらく預かってあげるよ。みゅうちゃんは」

佐倉 岬がビールを二本持つてこつちを見ている。

佐倉 岬は、髪も黒ければ瞳も黒かった。

正月に母親が煮る『黒豆』みたいな色だった。

つやつやと、真っ黒。

「で、みゅうちゃんって？」

だれじゃい。それ。

「ほら、『ミュータント・タートルズ』っていうアメリカのコミックスがあるじゃない？ 知ってる？ 須藤君はアイツの和名もお嫌いらしいから名前をつけたのよ。ミュータントのみゅうちゃん」
成るほど。

ミュータントなにがしの、なにがしのほうからつけないところに佐倉 岬の心遣いを感じる。

なんて言えはいんだろう。佐倉 岬って、面白い。

はっと、袋の中に入ったみゅうの餌を思い出した。

「これ、エサだから」

スーパーの片方の袋の中に入れていた会社の袋をこそそと出す。そして更にそこから、例のブツをなるべくパッケージの絵を見ないようにしながら佐倉 岬に渡した。

「あつ。これね。私もじつは買ったんだ。同じやつだわ」

まじまじと佐倉 岬はビニール袋越しに箱を見つめた。

エサまで買ったのか？ 佐倉 岬。

「じゃ、代金を」

なるべく箱から顔をそらしながら話しかけた俺に「いいよ。ビールもらったし」と、涼しげに佐倉 岬は笑った。

エサの箱は見たくないけど、佐倉 岬の笑った顔は見たいって、アホか俺は。

アホは速やかに退散する事にしよう。

「じゃあ、すみませんがよろしくお願いします」

エレベータは、たまたま一階にきていた。

『上』のボタンを押すとすぐに扉が開いた。

部屋は二階なんで外階段を使うことも多かった。

まあ、特にどっちを使うなんてこだわりは無かったし。

という事で、エレベーターに乗り込む俺を佐倉 岬が見送るかたちとなった。

「しばらくお世話になります」

俺は佐倉 岬がいるであろう入り口に向き直ってぺこりと頭を下げた。

そうしながら、頭を下げながらまた近いうちにビールを持参しようと思いに決めた。

佐倉 岬は俺が散々悩んでいた『説明』さえも聞かないで、みゆうを預かってくれるというのだ。

それは素直にありがたい。

顔を上げて二階のボタンを押した。

そして佐倉 岬のいる扉の方を向いた。

佐倉 岬の顔が笑顔で一杯になっていた。

？

一体何が何だ？

どうしたって言うんだ？

佐倉岬の笑顔に思いつきり動揺してしまった。

もしかしたら、俺の顔は赤かったかもしれない。

「『利奈ちゃん』と仲直りしてね」

閉まるエレベータの扉の向こうに、最高に可愛い佐倉 岬の笑い顔が消えていく。

利奈？

「あっー！！メモ！」

みゆうのエサの箱にメモが入りっぱなしだったことを思い出す。ポケットの中で、かさつと紙の擦れる音がした。

莊野さんからのメモだ。

莊野さんの書いてくれた男の厄年に二十七才なんてあったか？

ともかく、前途多難であろう夏が始まった。

3話・彼からのお誘い

今日で一週間の仕事が終わる、という金曜の夜の夕方五時近く。
私が勤める設計事務所に従姉妹の有加から電話があった。

『今日、帰りに岬ちゃんの家に行ってもいい？』

特に用事の入っていないかった私は二つ返事でOKした。

有加と会うのは、あの合コンの日以来だった。

あれからお互い連絡をとっていなかったもので、多分今日は「須藤君と、あの後どこに行ったか」、「須藤君とは、どうなっているのか」ってことを聞かれるんだろうなと思って思う。

実は、須藤君とは同じマンションでしかも彼から亀まで預かっているなんて聞いたら、有加は目をぱちくりして驚くだろう。

私だって。

私だって自分で驚いている事だったし。

事務所で少しだけ残業した後、私は駅前のスーパーで有加と二人分の夕食の食材を購入する事にした。

ここは、夜九時まで開いているので働く人にとっては、ありがたいお店だった。

今日の夕食は、有加のリクエストで彼女の好きな魚介類のパスタを作る事になっていた。

幾つかのハーブと、買い置きのパスタは家にあったので魚介類とトマトホールを買えばOKだと思った。

空調の効きすぎたスーパーの店内は、鳥膚が立つ程だった。

思わず手の平で腕を擦ってしまう。

手も、指先までが冷たくなっていた。

擦り合わせた部分だけが、微かに熱をもちそしてそれも一瞬で冷めていった。

本日のメインである魚介類の冷氣漂うコーナーを目の前にして私は一瞬怯んでしまう。

そして、ええいっ！ と気合を入れて、鮮魚のコーナーに近づいた。

売り場に置かれたラジカセからは、魚の歌が流れていた。

私は、ろくろく品物も見ずに目的のアサリとイカを買い物カゴに入れていった。

まあ、今からすぐ食べるんだから、そんなに神経質になって選ばなくてもいいかなあ、とも思ったし。

次に、ビールのコーナーに足を運ぶ。

このスーパーには、アルコールも置いてあった。

本当に便利なお店だと思う。

しかし、やっぱり寒かった。

鮮魚コーナーとは違う、縦型のショーケース全体から、またもや冷気が流れ出ていた。

……。

やっぱり、薄手の長袖一枚を常にカバンに入れておくべきだろう、私の場合は。

気合を入れて、ショーケースに近づいて真剣にビールを選んだ。

自分でも、魚を選ぶ時とは偉く違う態度だと思う。

有加は、ビールにうるさかった。

いま盛んに宣伝している、カロリーの低いビールを好んで飲んでいた。

『岬ちゃん、知ってた？ ビールが一番太るんだってえ』

十分細い身体をしながら、有加はなおもダイエットが好きだった。

『石田 有加：趣味はダイエット』と言えるかもしれない。
だから、注意深く『有加ブランド』のビールを選ぶ。

その種類の350mlの缶を二本選んだ。

冷たい手の平で更に冷たい缶を持つ。

きーんと冷えた缶に、体温が吸い取られてしまいそうだが、やれやれ。

とりあえず、これで有加も大人しいだろう。

次に、私が好きなモルツ系のビールに手を伸ばし。

ドサツ。

その瞬間、私じゃない手がビールをカゴに入れた。

びつくりしてその手を見る。

見覚えのある、スケルトンのバンド。

デジタルな表示。

「こんばんは、佐倉さん。今日のメニューは、パエリア？」

須藤君が私の隣に立っていた。

言葉が出ない。

あんぐりと口を開けている私にお構いなしに、須藤君はどんどんとビールを『私の』カゴに入れていく。

ずんずんとカゴを持つ手がしびれてくる。

すると、さっと須藤君が私からカゴを取った。

「ビールは俺が奢るよ。『みゆう』の預かり代としてさ」

そう言うのと、再び どんどんビールを（しかもモルツ系のものばかりを）入れていく。

困惑してしまう。

「えっ、いいわよ。だって一昨日もビールを貰ったし。それに、そんなに飲めないし」

そうなのだ。

須藤君は、私が『みゆう』を預かってからというものの、時折ビールを持ってきてくれていた。

まるで、昔の牛乳の配達屋さんの様に、袋に入ったビールを玄関

の前に置いていくのだ。

「でもさ、今日も買っているって事はもうこの間あげたのは、飲んじやったって事でしょ。って事はさあ。成る程。佐倉さんって、毎日ビールを飲む人なんだねえ」

須藤君の、相変わらず冴えている発言は全て大当たりなので、私は何も言い返す言葉が無かった。

「ビールさ、これ位あればいいよね？」

須藤君は、大きな手でかごの中のビールを数え出す。

須藤君の、きちんと切られた爪を見つめてしまう。

「えっと、俺の分含めて十本入れたけど」

「……はい」

もう、何本でもよかった。

それにしても、このシチュエーションは、一体なんと言うべきか。

なんだか、ホントに私はダメだなあと思った。

須藤君から亀を預かった事、さらにその期間を自ら延長してしまつた事。

あゝもう、ダメだよなあと思う。

あの時の須藤君の恐がりようや、持ち主がすぐには取りに来れない様子から『私が預かってあげる』なんて言つたけど。

その時は、本当に軽い気持で言つただけだ。

そこが、そもそも良くない。

おせっかいやき、世話焼き。

なんだかんだすぐ人と関わってしまう。

なんの為に離婚した後も、実家には帰らずに一人で知らない町に越して来たんだろう。

こんな自分がつくりしてしまう。
ここにこうして須藤君と立っているのも全てはあの日から始まっている。

有加に付き合ってしまったあの日からだ。

須藤君に気がつかれないように

小さくため息をつく。

でも、仕方が無い。

後悔したって、仕方が無い。

それも、これも結局は自分で決めた事だったし。

それに、こんな須藤君とのやり取りだって、私が『みゆう』を預かっている間だけの事だと思うし。

いずれ『みゆう』は、持ち主の元に戻るんだし。

そうしたら、こんな風な馴れ合うような付き合いも当然なくなるだろう。

「パエリアって米を洗わないで作るってホント？」

須藤君の声が遠くに感じた。

ふと見ると、隣に立っていたはずの須藤君は、人の買い物力ゴを
持ったまま歩き出していた。

慌てて、その後を追いかけるようにして歩く。

「パエリアじゃないよ。今日作るのは」

「えっ？」

驚いた顔して須藤君がこっちを向いた。

そんな顔をされるとこっちの方が驚く。

須藤君は、私がパエリアを作るものだとばかり思っていたのだろ
うか。

どう考えても、パエリアを作る人の方が『絶対数』少ない気がする
んだけど。

「魚介類のパスタを作るの」

そう答ながら、わざわざ訂正をする程の事でもなかったかなあ、なんて思う。

こんな事でも、馬鹿正直に返答をしてしまう私が嫌だ。融通がきかない女だなあって思う。

「一人で食べるの？」

面白い質問をしてくる人だ。

「従姉妹とよ」と、答えながら、またまた正直に答えてしまう自分に腹が立つ。

こういった処、だめだなあと思う。

誤魔化す術を知らない。

今日の夕飯のメニューとか、それを誰と食べるかとか。よくよく考えたら、随分とプライベートな話だった。

「従姉妹？ 佐倉さんの従姉って近くに住んでいるの？」

須藤君の質問は続く。

ああ、嫌だなあ。

こんな事は他人とは話したくないのに。

「まあ、近くって訳ではないけど。須藤君も知っているでしょ。この間の幹事の女の子よ」

「幹事の子？」

「うん」

「ああ！ 『みきちゃん』だか、『ゆきちゃん』？」

須藤君の大きな声に驚いてしまう。

「『有加』です」

「おっしいなあ」

ちっともおしくない。

「で、どんな子だっけ？」

「可愛い子」

本当に覚えていないのだろうか？

「ああ。ふーん。ああ、そうか」

須藤君は、なにやら考えるようなそぶりをしてレジに向いだした。

そして、すぐ側の空いているレジの前にカゴを置いてスボンのポケットからお財布を出した。

「ねえ、須藤君。ビール以外は私が払うんだからね」

「えっ？」

そう言った時に、すでに須藤君のカードはレジを通っていた。

「何？ 佐倉さん」

全然人の話を聞いていないような顔の、須藤君が振り向く。
お会計はカードで一括されてしまった。

「須藤君、後でレシート見せてね」

カードとレシートを受け取る須藤君を置いて私はビール袋が何枚が載せられたカゴをひょいと持ち上げる。

ずっしりとした重さを腕に感じる。

ビールがこれだけあると流石に重かった。

「はい、はい、はい。俺が持つから」

レジの人からカードを素早く受け取った須藤君が私が持ち上げたカゴを取っていつてしまう。

須藤君は歩くのが早かった。

スタスタと大まかで歩いた。

「今日、坂田がうちに来るんだ」

追いついた私に、須藤君がそんなことを言った。

「へえ。坂田君」

あの合コンの時も感じたけど、やっぱりこの二人は仲がいいんだなあって思った。

二人で並んで、買った物をビール袋に入れ出す。

須藤君は、ビールばかりを一つの袋に入れた。

私は先ず、イカとアサリを備え付けの小さな透明のビニール袋に入れた。

そして次に、スーパーのロゴの入ったビニール袋を開けようとした。

実は、このての袋を開けるのが私は苦手だった。

たいてい、一回では開けられなくて

ぐずぐずと遅くなってしまうのだ。

「だからさ、来れば。うちに。有加ちゃんと一緒に」

須藤君の言葉で、袋を開けようとした手が止まってしまう。

「……なんで？」

私は隣に立つ須藤君の横顔を見た。

港の背が高いせいか、須藤君の事は、そんなに背が高い人だとは思わなかった。

斜め上に目線を送ると丁度いい所に彼の耳が見えた。

耳たぶが見えた。

須藤君も動きが止まっていた。

「坂田から、『合コンで知り合った可愛い有加ちゃん』って、耳が痛いほど聞かされていてさ」

ぼそぼそと、須藤君がつぶやく。

面白くなさそうな声だった。

面白くない事なら、私達を誘わなければいいのに、と思う。

そんな須藤君の視線が、私の手元に落ちる。

「佐倉さん、とろい」

えっ？　　と思って須藤君を見ると、彼は既に袋にビールを詰め終わっていた。

一方、私はと言うと。

まだ、スーパーの袋さえも開けていなかった。

「貸して」須藤君が私から袋を取ると、彼はそれを『ぱつ』と一発で開けた。

そして、まだ入っていない品物をどんどんしまいだした。

「ちよつと相談してみてよ、その事。従姉妹さんとさ」

そう言うつと須藤君は私買った荷物まで持つて、歩き出した。

「えつ。岬ちゃん、どういう事？」

部屋にやつて来た有加は、

私が須藤君の『お誘い』の事を話すと目が白黒しだした。

そりゃ、そうでしょう。

「だから、須藤君とはね、たまたま同じマンションだったの。でね、今日の帰りに寄ったスーパで偶然会つて。有加が今からうちに来るつて話したら、須藤君の家にも坂田君が遊びに来る事になっていくらしくて。で、よかったら、一緒に飲みませんかつて」

須藤君から亀を預かっている事は、取り合えず省略した。

そんな事は、きつといずれ解る事だろうし。

「それで、岬ちゃんは、何て答えたの？」

「ん。従姉妹と相談しますつて」

相談してつて言ったのは須藤君だけど、それもこの際そういう事で。

「そっか」

ようやく気持が落着いたのか、有加は自分で買ってきたケーキを袋から出し始めた。

「これ、新商品らしくて。会社の側のデパートで売ってたから」
「へえ」

有加の好きなケーキ屋さんの包装紙だった。

有加はダイエットをしている反面、こういったデパ地下の商品を
買うのが好きだった。

「私、言ったつけ。岬ちゃんに」

「何を？」

「あのさあ」

そう言いながら、有加はケーキ屋さんの包装紙を箱から剥がしだ
し、剥がしたそれを綺麗に畳みだした。

「だから、坂田君の事が気になるって」

有加の指が綺麗に四角に包装紙を畳む。

その動く指先を私は見ていた。

「聞いては、無いけれど」

私の言葉を聞いて、有加が照れたような笑い顔を私に向けて来た。

「「わかった」」

二人で声が揃ってしまった。

顔を見合わせて笑い出してしまう。

「あー！ もう。すぐ岬ちゃんには、ばれちゃうんだから」

有加が顔を真っ赤にしながら笑う。

そんな有加がとても可愛い。

「ああ。でもなあ。どうするかな」

有加が考え始めた。

有加をその場に残してキッチンへ向う。

そして、途中で止まっていたサラダ作りを再開し始めた。

千切りにして塩を振っていたいた大根の水気をぎゅーっと絞った。

面白いほどに水がでる。

何度かに分けて大根の水気を抜いた後、大葉を刻みだした。

大葉の爽やかな香りがすっと気持ちよく胸に入ってくる。

このサラダも有加の好きな一品だった。

大根サラダのドレッシングは、以前買った和風のものにしようと思った。

冷蔵庫をあけてドレッシングを確認しようとした。
ひよいと有加の顔が廊下から覗く。

キラキラとした瞳だった。

その勢いと瑞々しさは、ある種、感動的でした。
有加の瞳には未来が広がっていた。

「岬ちゃん、一緒に行ってくれるかなあ。須藤さんの部屋に」
有加がそう言った。

4話・一番人気の女

坂田 浩二は、ここ半年ばかり『女断ち』をしていた。

「有加ちゃんが来る？」

坂田のヤツは、真っ赤な顔して俺を見てきた。
気色悪い。

そんな顔で、俺の事を見つめるな。

「そつかー。じゃあ、どうする？ 晩飯」

そう言いながら坂田は、コイツが買ってきたたこ焼きをガサガサと 袋から出して机の上にのせだした。

駅前近くに出来たこの評判のたこ焼き屋は、連日長い列ができて
いる。

坂田は、「今日は、とつても たこ焼き気分」、という事らしく、
その長い列に 御丁寧にお並びあそばして『和風たこ焼き』と『元
祖 キムチたこ焼き』を、お買い求めになったのだ。

ふと、佐倉 岬達の今夜のメニューを思い出す。

魚介類の Pasta だと言っていた。

魚介類の Pasta とたこ焼き。

食い合わせ的には、OKなのか？

まあ、シーフード繋がりではあるが。

「言つとくけどね、坂田。『来る』じゃなくて『来るかも』だから
な。 ったくよあ、お前は一体いくつだよ。 コーコーセイじゃな
いんだから、止めるよな。 気持ちの悪い。 そのウブそうな反応は」
目の前の同じ年の男に、俺はそう言った。

コイツは、半年前にこっぴどく女に振られた。
それ以来半年。

勝手に自分で女の子を「自粛」しちゃって、 で、この夏 自ら

「解禁」(おまえは鮎か?) 宣言していた。

そして、坂田クン復帰第一弾として組まれたのが、佐倉 岬の従姉妹と会った合コンと言うわけ。

なんて言うか「たこ焼き気分だから」って言って列に並んだり、

「解禁したから」って事でいきなり女の子の子に惚れたり。

坂田は、いい意味で素直。悪く言うところ、単純。

策略家になれ、とは言わないけど、もう少しどうにかして欲しい。

そんな坂田の事を考えると、意外と友だち思いな俺がいたりする。

こんな風に、応援してあげようなんて他のヤツに対しては思わない事だから。

「いやあ、こんな気分ってさ、ちょっと久しぶりなもんでねえ。

緊張、しちゃいますなあ」

嬉しさを隠せない語調で坂田が言う。

「だって、この間も昼飯二人で食ったんだろう?」

ため息をつきながら、隣にいる坂田を睨む。

二人して台所に立っていた。

狭い台所は、ぎゅうぎゅうだった。

俺はでかい鍋をシンク下の棚から出し、水をたっぷり入れてガス台にのせた。

坂田は、冷蔵庫からきゅうりを出していた。

「だってさ、朗。あれは、あらかじめ約束していた事だろ? こう

いう風に、不意に会えるっていうのとは、違うじゃん」

カチャと火を点けた。

炎の大きさを、鍋の底に合わせて調節した。

「へえ。そーいうもんですかねえ」

俺にしてみれば、どっちにしろ会うわけなんだから 約束して会おうが、偶然に会おうが、全く同じに思えた。

坂田の様に、そこになんらかの違いを見出す事なんて考えたこともない。

まあ、坂田は妙にロマンチックなところがあるから、会うにしても色々という意味があるのかも知れない。

坂田が丁寧にきゅうりを洗い、洗ったきゅうりを次々とビニール袋に入れる。

そして、台所の流しとガス台の間にあるところ（何て言うのだ、このスペースを）に二、三回軽く叩きつけた。

ボロボロになったきゅうりを更に適当に手で折っていく。

坂田が砕いたときゅうりを、俺はごま油と生姜と鷹の爪を入れて炒める。

味付けは、酢と醤油だ。

簡単だけど、これがとってもビールには合う。

これが今日の「THE キャンプメニュー」だった。

俺たちは、幼稚園の頃からお互いキャンプで鍛えあった仲で数えると気が遠くなるほどトモダチをやっている。

そういう付き合いって、悪くはない。

「これ、運んでよ」

きゅうりを盛った皿を坂田に渡す。

皿を受け取りながら、にやりと坂田が笑った。

「朗、おまえ。黙ってたな」

昔から坂田は、俺より少し背が高い。

とうとうコイツの背を追い抜く事が出来なかったのが、ちとばかり悔しくもある。

俺は目線を少し上に上げ坂田を見た。

「何を？」

「朗が、佐倉 岬さんと同じマンションだって」
「気がついていたか、と思う。」

「あれっ？ 言わなかったか？」

冷蔵庫を開く振りをして誤魔化す。

冷蔵庫の中には、坂田が買ってきた生のピザが入っていた。ピザとたこ焼きとパスタかあ。

小麦粉屋にでもなつた気分だ。

「俺は、聞いてなかったけどなあ」

何か言いたげな坂田だった。

別にわざと話さなかった訳じゃない。

色々と説明するのが面倒だっただけだ。

「あの日さ。おまえが一番人気の岬さんを攫っていったんで、残された奴らブーブー言ってたぜ。まあ、他の女の子の手前あからさまな事は、なかったけどな」

岬さん。

「一番人気、だったのか？」

「何を言ってるんだよ。おまえだって狙っていたんだろ？」

「このこのお」という仕草をしながら、坂田は皿を運んでいった。

狙っていた、といえば、そうなのかもしれない。

あの場で「一番帰ったそうにしていた女」って事で。

「いっしょに抜けるのに一番適した女」って事で。

しかし、いくら坂田にでも、そんな表現で佐倉 岬の事を言い表すのは 佐倉 岬に悪い様な気がした。

「どこが、一番人気だったわけ？」

恐る恐る聞いてみる。

「おまえが一番よく解ってるんじゃないの？ まあ、他の奴らのいうには、第一清楚だ」

清楚、ねえ。

佐倉 岬の顔を思い出す。

「地味顔って事だろ？」

「お前一回、日本語を習い直せ」

そ、そうなのか？

「しーません」

「第二に、優しく儚げな雰囲気がある」
ハカナゲ。

あの「みゆう」の入った水槽を両手でしっかりと運ぶ姿は、男の俺から見ても遅しかったぞ。

「第三に」

「まだあるのか？」

「スタイルが良い」

「……」

おいおい皆さん、何をもって「スタイルが良い」と言っただろうねえ。

「で、どこまでの付き合いになったわけ？ 岬さんと」
さつきから、坂田が「岬さん」って言うのが気になってしょうがない。

「どこまでの付き合いって、『近所付き合い』だろ」

「ただの？」

「ただの」

「……してないの？」

「……坂田君。お下品」

男同士の会話は、まあこんなモンなんだけど。

「それは、大変失礼しました。そっか、朗は岬さん狙いじゃないんだ。って事はさ、岬さんへのアタックにまだ望みアリって伝えていいって事かな？」

坂田は半分俺を挑発するように、そして半分は他の奴らへ朗報が伝えられるぞ といったニュアンスで、そんな事を言いやる。

「いーんじゃないのー」

なんだか面白くない。

わざとそっけなく、坂田に答える。

火にかけて鍋のお湯がグラグラと沸いて来た。俺はコンロの火を止めた。

「そのわりには不機嫌そうな声だね、朗くん」

坂田の台詞に、かちんと来る。

「言っとくけどね。今からでも、彼女たちを俺の部屋に呼ぶのを断つてもいいんだぜ」

坂田の目がまん丸になる。

「あつ、朗！ 拗ねてる？」

拗ねてる、だとお？

「あつー！ 腹が立つ。よし、今から俺は佐倉 岬の部屋に行つて今日の事は中止にすると伝えてくるからな！」

何で、坂田の為にこの部屋を提供しようと言う トモダチ思いの優しい俺が、こんな風にかかわれないといけなんだ？

俺は、勢いよく玄関へとドスドスと歩きだした。

あわてた坂田が、俺に絡み付き背中に乗ってくる。

プロレスの技をかけるような格好で、坂田は俺にのしかかってきた。

まるで坂田を背中におんぶした様な体制になりながらも、どうにか玄関まで辿り着き、たたきでスニーカーをつっかける。

そして、絡まる坂田の腕をひん剥いた腕で玄関のカギを開け、

そしてドアを開けた。

「……コンバンハ、須藤君。もしかして、お取り込み中？」

少し視線が低くなっている俺の目に、大皿に乗ったうまそうな大根のサラダが映った。

そして、そーっと視線を上に移すと。

そこには、ただ今の声の主 黒豆みたいな目をした佐倉 岬が、じっと俺を見つめて立っていた。

5話・上の階の彼

マンションのドアを開けた途端に、涼やかな夏の虫の音が聞えた。

蚊が部屋に入っちゃうかなあ、と思いながらも、背中でドアを押さえて有加を待つ。

金属のドアの冷たい感触が、木綿のワンピース越しにじわじわと伝わってきて気持ちがいい。

蚊と言えば、と思い笑ってしまう。

昔からやたらと蚊に刺される港と違って、私はあまり蚊に刺されなくて。

そんな私を見て港は、「岬には、ムシもつかないんだなあ〜」なんて、日焼けだか虫刺されだかわらない腕をボリボリ掻きながら悪態をついてきたっけ。

床にポロポロと落ちる茶色の皮が汚くてその事を注意すると、ニヤニヤと笑いながら、わざと皮を私の方に飛ばしてきたり。

本当に港はワルガキだった。

そのワルガキ港も、今では小学校の先生をやっている。

港が「先生になる」、なんて言った時に家族全員、滅茶苦茶に驚いたけど、今となってみると、まあ意外に向いているのかも、と私は思っていた。

ただ、港が『先生』をしていく中で家族としては、少しばかり心配になることがあったのだけれど。

二十九歳の姉が二十七歳の弟の事を心配するなんて、なんだか過保護だと思わないでもなかった。

でも、お互いがオトナと言われる年になっても、姉は姉で弟は弟なのだった。

どんなに体が大きくなっても、どんなに肩書きが立派になっても

港は私の『弟』で、『姉』の私にとってはいつまでたっても心配な存在だった。

なんて、思いながら。

今の私は、港の事を心配するよりも、自分の事をしっかり考えないといけないのかもしれない、と思った。

港は口には出さないけれど、今回の事で相当私の事を心配をかけているのは分かっていたし。

遂に、弟にまで心配されるようになったかあ、なんて少し複雑な気持になったり。

有加は、まだ来ない。

初夏の夜風が頬にあたった。

腕からぶら下がった、パスタの材料の入ったスーパーのビニール袋も乾いた音を立てて微かに揺れた。

手には、さつき作った大根のサラダが盛られたお皿があった。

こうして有加を待つ間、段々とサラダが手の中で温んでくるような気がした。

「ゆーかあ。まあだあ？」

なかなか来ない有加に声をかける。

私の声を聞いて、洗面所からひよいと有加が顔を出してきた。

「今、行くからあ」

有加の手には、口紅があった。

さつき、須藤君の部屋に行こうと二人で玄関まで来たのに、「やっぱり、もう一度洗面所に行ってもいい？」と言い残して有加は、お化粧直しに戻ってしまったのだ。

はあー、と溜息をついた。

ぼんやりと有加のピンクの小さなミニールを見つめる。

有名なブランドの名前が書いてあった。
高かったんだろうなあ、なんて思った。

「岬ちゃん、お待たせ、お待たせ」

ようやく有加が、ケーキの箱やらデパートで買ったお惣菜を持って玄関までやって来た。

有名ブランドの名前が、有加のすんなりと細い足の甲で消されていった。

「行きましようか」と有加に聞くと、「うん！」という元気な答えが返ってきた。

すつきりとした有加の表情だった。

お化粧なんて直さなくても綺麗だったのに、それでも、少しでも綺麗な自分を見てもらいたいと思う有加の気持ちが可愛いと思うた。

「岬ちゃん。顔、ヘンだよ」

「えっ。……えっ？」

「嘘だよ、綺麗だよ」

有加がケタケタと笑いだした。

「ヘンな表情をしてた、って事よ」

玄関の鍵を閉める私の脇腹を、有加が肘でグリグリと押してきた。

「もう、有加。危ないでしょ！ 止めて！」

抱えたお皿が、落ちそうになる。

あははは、なんて明るく笑いながら有加は外階段を上がっていく。

私もその後続いた。

住宅街の夜の空気に、有加の弾むような足音とそれに続く私の音がコンコンと鳴り響く。

「ねえ、岬ちゃん。ホントに連絡もしないで須藤さんの部屋に行っ

てもいいの？」

有加は階段の途中で振り返り、少し心配そうな声で聞いてきた。昼間の熱を静かに放出していく土の匂いが、夜風に乗ってやってくる。

ちりり、と何処かの家からの風鈴の音も聞えてきた。

「だって、知らないし電話番号」

私の腕にぶら下がったビニール袋が、歩くたびにガサガサと頼りなげに左右に揺れた。

「えっ？ 知らない？ 岬ちゃん、須藤さんと電話番号とか、メールとか交換してないの？」

さも驚いたような有加の声だった。

「してないけど」

その、有加の口調に、私はしかられた子どもみたいな気持になった。

「じゃあ、どうやって須藤さんと会っているの？」
会う？

「偶然に、つてところかなあ」

『偶然』だよねえ、と自分で自分に問い掛ける。

「別に、須藤君に用事は無いし」

用事といえば、『みゆう』の事くらいだけど。

でも、『みゆう』の事を有加に話すという事は、須藤君の『彼女』の話題にも触れなくてはならなくて。

そんなに、気をつかう事ではないかもしれないけど、いくら有加だからってそうペラペラと人の恋愛事情を話していいものでもない
と思ったし。

「岬ちゃんと須藤さんって、付き合っているわけじゃないの？」
はあ？

「なんで、そんなことを」

「うーん。なんとなく」

「なにそれえ」

有加は、全く突拍子もないこと言う。

「だって。さつき、岬ちゃんへんな顔したし」

だから、へんな顔って。

「だから。なんとなく、そうかなって思ってたんだあ」

「ふーん？ 有加の言いたい事って今ひとつよく解らないんだけど。ともかく須藤君には、そんな事言わないでよ」

階段を上り、ようやく2階に着いた私たちは205号室に歩き出した。

204号室の前を通って205号室へと向う。

『須藤 朗』という表札を確認した。

『スドウ ロウ』君から『須藤 朗』君に、この場所で漢字変換されたことを思いだした。

あの日有加に誘われて合コンに行かなければ、この同じマンションに住む住人ともこうしたお付き合いはなかったのよね、と思うと不思議な気がした。

再び、お皿を左手に持ちインターフォンを押そうと手を伸ばしたその時だった。

「なんで、須藤さんにそんな話をしちゃいけないの？」

有加だった。

有加の真ん丸な瞳が私を見つめていた。

私は、啞然として言葉を失ってしまった。

伸ばした指先までが下に降りてしまった。

「失礼、でしょ？ 須藤君に。なんでわざわざバツイチ女とくっつけられなきゃいけないのよ」

諭すように有加に話す。

有加がもし、私と須藤君のことをそんな目で見ているのなら、なお更の事だと思った。

そこら辺の事は、しっかりと釘を刺さなきゃいけない。

大体、『合コン』だってそんな目的で行ったわけじゃないって、

有加こそ一番わかっている筈なのに。

苦いような思いで、胸が一杯になる。

そんな私の真剣な目に、有加も何かを感じたようだった。

「そんな風に自分の事を言うのって。なんか、岬ちゃん良くないよ」

しょぼしょぼと、有加が話し出す。

困ったなあと、思う。

有加ビジョンで私を見るのは、それはそれで構わないけど（でも、本当は構わ不开心いけど）、その思いを全く関係の無い人にまで応用させようなんて、それは幾らなんでも困ってしまう。

「だって、私がバツイチなのは、ホントの事でしょ？」

有加とは、私の離婚のことで一回しっかりと話さなくてはいけないとは思ってはいたけど。

まさか、それが今になるなんて。

しかも、こんな人の部屋の前で。

溜息をつく私の目に、外階段の側に『A階段』と書かれたプレートが見えた。

あの階段は『A階段』っていうのねえ、なんて、こんな状況でどうでもいいことを知ってしまった。

黙ってしまった有加が、再び話し始めた。

「まあ、そうだけどさ。岬ちゃんが離婚したのはホントのことだけどさ。でも、岬ちゃんは結婚してようが、離婚してようが、岬ちゃん岬ちゃんだよ」

眩暈がした。

なんて言ったらいいんだろう。このコには。

一体どうという言葉を使えば、私に対して好意ばかりを向けないようになつてくれるのだろう。

「有加こそ、そーいう事を言わないの。第一、そんな問題じゃないでしょ？」

ついつい強い口調で有加に言ってしまう。

泣きたくなってきた。

「有加。一回部屋に戻ろう？　そこで、ちゃんと話しをしよう。ねっ？」

有加の顔を覗き込む。

今度は有加がしかられた子どもみたいな顔になった。

有加の私に向けられる好意は、ありがたいと思う。

それは、そうなんだけど、もう一方で無性に腹立たしくなる。

有加は、わかっていないんだ。

だから、そう簡単に今の私を受け入れようとしてしまうんだ。

全ては私の責任なのに。

結婚したのも。

離婚したのも。

それは、『やってみないとわからない』なんていう、悪戯に優しい言葉じゃ済まされない事だった。

結婚生活を続ける、という事。

人生を二人で送る、という事。

いい加減な気持で、流されるように結婚してしまった私には最初からそんな覚悟はこれっぽっちもなかったというのに。

だから、そんな風に私のことを受け入れられるのが辛い。

優しい言葉が辛い。

そしてたとえ、何百人の人に優しい言葉を掛けられたとしても、

それで私のしたことが帳消しになるなんて思っではない。

『おまえを許さない』

それは当然の言葉だった。

なんとも言えない、空気が私と有加を取り巻いた。

二人とも、金縛りにあった様に須藤君の部屋の前で立ちつくしていた。

と、その時。

「うわぁ」

凄い声と共に、勢いよく目の前の玄関が開いた。

何事起きたかと驚いて扉の方に向き直す。

人の部屋の前の廊下で棒立ちになっていた私たちの目の前に、坂田君をおんぶした須藤君が突如現れた。

「岬さんに有加ちゃん、ドーゾ上がってください」

坂田君の明るい声に背中を押されるような形で、私たちは須藤君の部屋に上がった。

にこに顔の坂田君は、私たちの荷物をガシガシと抱えて持ってくれた上に、私たちがサンダルを脱いで部屋に上がるのまで待っていてくれた。

坂田君とは対照的に須藤君は、とつても不機嫌そうな顔で、さつさと一人で部屋に入っていた。

あのDonaldな口は、への字になっていた。

心配になる。

なんだか、私たちに勝るとも劣らぬ不穏な空気をこの二人に感じてしまったから。

そして一方の私たちは、と言うと、今の驚きで完全に毒気が吹き飛んでしまったというか、気が抜けてしまったというか。

そういう意味では、二人のあの登場の仕方に感謝はしているんだけど、だからって、有加とのさっきの話が帳消しになったわけじゃなかった。

でも、本当のところ、果たして自分の離婚について有加にどの程度話することが出来るのかという疑問も私にはあった。

離婚のこと。

そこに至るまでのいろいろを、私は未だに誰にもきちんと話せてはいないから。

だから、有加がそんな風に私を思ってくれる責任は私自身にあって、たと思った。

何もかもが自分の責任だと思つと、息をするのも苦しくなってくる。

はつとして我にかえる。

ここは、自分の部屋じゃない。
人の部屋。

須藤君の部屋。

そして、この部屋の住人の須藤君は不機嫌。

「ねえ、ねえ、有加」

こんな気持ちのままお邪魔しているのはどうなのかなあ、と思い、廊下の前を歩く有加の背中をつついてみる。

「ん？ なあに？ 岬ちゃん」

有加ったら、既にバラ色のほっぺなんかになって、オメメまでキ

ラキラと輝いていた。

「……何でもない」

こんな表情の有加に、『やっぱり、帰らない？』なんて言えなかった。

それにしても、よ？

私たちの事はともかくとして、有加ったら須藤君のアノ様子に気がつかないのかしら？

あんなに不機嫌そうな顔をしていたのに。

あれは、よっぽど嫌なことがあったに違いないとしか思えなかった。

なのに、坂田君も須藤君の様子に関しては、『全くお構いなし』な感じだった。

じゃあ、坂田君とケンカをしていたわけではないって事なのかしら？

でもでも、須藤君は坂田君から逃げる様に玄関から出てきていた様に見えたし。

なんだろう？

買い物？

な、訳ないし。

ああ、なんだか、気になってしまっ。

「あつ、眉間に皺」

声のする方へと反射的に顔を上げると、須藤君がキッチンの入り口に立っていた。

須藤君は、キッチンにいたんだ。

有加と坂田君は、そのまま真っ直ぐにリビングに進んでいった。

須藤君のその言葉に、私は思わず右手で眉間を押さえてしまった。

「皺。あつた？」

指先で皺を伸ばそうと、さりげなくマッサージなんてしてみたり。

「ウソ。冗談だよ」

ぷいと、そのままガス台の方へと須藤君は歩き出した。
私も後についてキッチンに入った。

「ここ、使う？」

須藤君が、キッチンを指した。

ぴたっとした感じの手の平から伸びた指が、綺麗だった。

「うん。いい？」

初めて入る人の部屋なのに、勝手知ったる、といった感じが不思議だった。

「全く、同じ造りなんだね」

つい、ぼろつと感想が出てしまった。

「へえ、同じなんだあ」

須藤君もさりと返してきてくれた。

「じゃあさ、佐倉さん、寝ぼけてうちに上がりこまないでね」
ドナルドな口の口角が、にっと上がる。

その須藤君の見覚えのある表情に、とてもほっとした私がいた。

6話・面倒な女

背中をそつとさする。

バカ坂田が上に乗りやがったところが、少し痛かった。

体格を考えて欲しいと思う。

そんなアホの坂田は、お気に入りの由美ちゃんだか、加奈ちゃんだかと、いちやついていた。

台所には、佐倉 岬と俺の二人がいた。

佐倉 岬は、黙々と料理を始めた。

台所は、さつき坂田と二人でいた程の窮屈さは無かった。

やっぱり、女の人は華奢なんだなと思った。

華奢でも、彼女の場合は遅しいとも言えたけれど。

「エンピツ」

佐倉 岬がつぶやく。

「坂田君が『エンピツ』って叫んでいるけど」

えっ？ と思った瞬間、台所の入り口に、でかいなりをした坂田が顔を出した。

「朗。エンピツ貸してよ」

坂田が、何か言いたげなエセ爽やか笑いをしながら立っていた。嫌なやつだ。

「はい、はい、はいはいはい」

なんだか、自分の家なのに主導権ナシって感じで腹が立つ。

電話のそばにあるペンを取って（坂田に目線で『ココにあるだろうか！』と威嚇しながら）、そのままベランダに一人で出た。

急いでクーラーを直してもらった途端、涼しい夏夜になった。

一万二千五百円。

修理代が惜しくなる。

まあ、いずれにせよ、いつかは払わないといけない金だったんだ

と、自分で自分に納得させようと思った。

ちりん。

どこかの家で風鈴が鳴った。

自分の家には、付ける気はしない風鈴だけど（風が拭くたびに『ちりんちりん』とされたら腹が立つ）、どこかの誰かの家で鳴るぶんには一向に構わなかった。

『要するに、自分が当事者になるのは、ごめんだって事よね』
軽蔑したような瞳を向けられながら、そんな台詞を言われた事がある。

『そうだよ。面倒なのは、ごめんだだよ』

今なら同じ質問をされても、もっといいかげんに答えたのかもしれない。

そう考えると、あの時の俺は、正直だった。

『そんなんで、朗は人生楽しいの？』

すごくヘンな質問だと思った。

そうしたいから、そうしているのに、そんな事を言われるなんて

『楽しく暮す為に、そうしているんだろ？』

そういえばあの日も、こんな夏の夜だった。

「あの。須藤さん」

千香ちゃんだか、美香ちゃんだかに声を掛けられる。

彼女がベランダの網戸をそつと開ける。

「あの。ワインってあります？」

「ワイン？」

「岬ちゃんが、あるんならお料理に使いたいですって」

ああ、ワインね。

「今、行くよ」

確か冷蔵庫に、飲みかけのワインがあったと思った。

「あの、須藤さんは」

そのコに呼び止められる。

「ん？ なに？」

改めてよく見れば、確かに綺麗なコだった。

坂田君、がんばらないとねえ。

「あの、岬ちゃんとは」

「……はあ」

途端に彼女は口をつぐんでしまった。

「あつ！ 朗！ 有加ちゃんに、何かヘンな事でも言ってる！」

坂田がトイレから出てくるなり叫んだ。

手は洗ったんだろうな、坂田。

「言うか、そんな事」

俯く有加ちゃん（名前が判明。そして確定）を置いて、俺はワインを探すべく台所へと向った。

台所では、ぐらぐらとした鍋の中で、パスタがゆらゆらと揺れていた。

そして、その隣の中華鍋では（焼きもの系の鍋は、それしかないのだ）、魚介類のトマトのソースが出来つつあった。

「へえ。うまげ」

ひょいと覗き込みながら、冷蔵庫からワインを出す。

「白でもいい？」

白しかないのだが。

「うん。ありがとう」

佐倉 岬の白い手の平にワインのボトルを持たせた。

真剣な眼差しで、中華なべを見つめる佐倉 岬がおかしい。

その瞳がワインのボトルに注がれた。

「このワイン。お料理に使ってもいいの？」

佐倉 岬の揺れた瞳が俺を見つめる。

佐倉 岬が見ていたワインのボトルを俺も見た。
そこには、とても可愛いラベルが貼ってあった。
そのラベルを見て思い出す。

『須藤さん。ワイン好き?』

あの日、林 利奈が持ってきたワインだった。

佐倉 岬は、その事をまるで知っているかのような表情をしている。

癪に障る。

「いいよ」

ぶっきらぼうに返す。

だったら、何だと言うんだ。

女が持ってきたワインなら、だったら、何だと言うんだ。

「わかった」

そう言うのと、佐倉 岬は、じょぼじょぼとソースの中にワインを入れる。

ふわーっと芳醇な香りが広がって、次の瞬間魚介とトマトとワインの融合された香りが台所中に広がった。

「すげっ。いい匂い」

冷蔵庫で眠ってたワインが生き返る。

もう少しのところで、配水管に流し捨てられる運命だったワインが、だ。

それが、佐倉 岬の手によって、生き生きとした香りを放ち始めた。

何とも言えない、複雑な気持になる。

『そんなんで、朗は人生楽しいの?』

なんだって、またそんな言葉を。

胸の中に苦い思いが滲み広がる。

人の家の台所で、さも知ったかぶりな様子で料理を続ける佐倉岬を、冷たい目で眺めながら思う。

彼女は。

佐倉 岬は。

面倒な女だと。

7話・彼は共犯者

あまり良く知らない人に自分が作る料理を出す時は、とても緊張してしまう。

パスタソースを作る鍋から目が離せない。

いつもわりとアバウトに料理をしているだけに、今日は心がけて注意深くソースを作る。

何度も作っている料理だし、多分失敗は無いとは思っけど。

なんて事を考えていたら、パスタを茹でる時間を見るのを忘れたことに気がついた。

あつちをやれば、こつちを忘れて。

こつちをやれば、あつちを忘れて。

何がなんだか。

パニックになってきた。

「へえ。うまげ」

須藤君が鍋を覗き込む気配がした。

ああ。パニックになっていている場合じゃなかった。

料理ができるのを待ってくれる人がいるんだから、気持を立て直してやっていかないと、と思った。

須藤君が、冷蔵庫を開ける音がした。

さつき有加に、ワインのことを頼んだので、おそらく彼はそれで来てくれたんだと思う。

ピタッと、手の平に冷たいボトルの感触がした。

自然に、須藤君から手渡されたワインのラベルに目が行った。

そしてそれは、最近雑誌の広告でよく見かける人気のワインだった。

『とても高価な品』という訳ではないけれど、だからってお料理

に使うには勿体ないワインだった。

彼女が持ってきたワインだろうなあと考えた。

「このワイン。お料理に使ってもいいの？」

須藤君の顔を見る。

須藤君は、私が言った意味がわからないのか、ぽかんとした顔のまま視線をボトルに移した。

「いいよ」

表情を陰しくした須藤君が、乱暴な口調で返してきた。
怒っている。

聞かないほうがよかったのかしら。

「わかった」

なにが？ と自分で自分の『わかった』に疑問を感じながら、ソースの中にワインを注ぐ。

ふわっと広がる香りにほっとした。

大丈夫。

ソースは、成功。

でも、須藤君はご機嫌ななめ。

「あと何分茹でるの？」

須藤君がイタイところを突いてくる。

「えっと、どうだろ」

実は時間を見るのを忘れて。

でも、もつと本当のことを言うといつも時間なんて適当で、 Pastaが熱湯の中でバラける感じを見ながら茹でて。

そんなことを説明したものかどうか、考えてしまう。

隣の火にかかっている、お鍋の中のPastaをちらっと覗いてみた。

なかなか、いい感じには見える。

「一本取って食べてみて」

「はあ？」

その間もぐらぐらとパスタは茹でられる。

「だから」

「って事はさ、佐倉さんは時間を計ってないって事？」

責めるような口調で須藤君が聞いてくる。

「そうです」

私の答えを溜息をつきながら聞いた須藤君は、菜ばしを使って一本パスタをつるんと食べた。

「これで、いいと思うけど」

「ホント？　じゃ、ザル、ザル」

きよろきよろする私に対して、須藤君は悠々とした態度で、シンクの上の棚からザルを出してくれた。

「やるよ」

そう言つと、須藤君がパスタをお湯からあげてくれた。

一瞬で湯気がシンクの中にモワモワと広がっていく。

片手に鍋、片手にザル。

須藤君は、手際よく道具を扱っていく。

その馴れた手つきに、つい見とれてしまった。

「なんですか？」

じろりと睨まれる。

「何でもないです」

須藤君のいちいちに、刺を感じてしまう私だった。

できた料理を運んでいくと、有加と坂田君は机一杯に雑誌を広げて何やら書き込んでいた。

「ああ、岬ちゃん。これねっ、おつかしいくらいに当たるのよ」

にこにこしながら、有加がこつちを向いた。

えっ？　と見ると、雑誌の特集の占いだった。

生年月日を足した引いたりして、表と照らしあわせて自分のタイプを見るとかいうやつだ。

あははは、と思う。

こんな状況で楽しく占いが出来るほどの気持ちに、私なれなかったから。

須藤君も、そんな二人の様子を見て一瞬言葉を失いながらも、坂田君に蹴りを入れてテーブルセッティングを始めた。

須藤君の部屋のリビングは、フローリングの床の上にベージュのラグマットが敷かれ、その上に低く細長いテーブルが置かれたいた

「岬さん、この机ね。脚を長いのに替えるとイスでも使えるんですよ」

坂田くんがお皿を並べながら、このテーブルの説明をしてくれる。

そして、坂田君の指す方向には、確かにこの机で使っていたと思われるイスが二脚、重ねて部屋の隅に置かれていた。

私は、脚が替えられる、そんなテーブルがあるってことを初めて知った。

須藤君がキッチンから、いろんな銘柄のビールを両手一杯に持ってやって来た。

私たちが持ってきたビールもその中にあつた。

「俺のドライもある？」

坂田君が須藤君に聞く。

「見りゃ、わかるだろ？」

どさどさと、ビールの缶を床に置きながら須藤君が答えた。

ごろん、と置かれたビールが本格的な『飲み会』の雰囲気を出してきた。

どんどん運ばれる料理が、わらわらと賑やかな食卓を彩り始めた。

「お待たせ」

有加が、ピザを載せたお皿を持ってきた。

ピザの上のチーズは滑らかにとろけていて、所々こげていた。香ばしい、とてもいい匂いを放っていた。

須藤君の不機嫌さも、こうしてあれこれ動いているせいかな、さほど気にならなかった。

仁との色々で、人の機嫌の悪さについて、少しナーバスなところが私にはあった。

そして、そういった感情を、自分に向けられるのは正直悲しいけど、でも返って私と須藤君には丁度いいのかも、とも思えた。

これ以上、なにかしら親しくなるのは良くないと思ったから。だから、嫌われてよかったんだと思った。

須藤君も坂田君も、アルコールは強いみたいだった。気が付くと、どんどこ空き缶が増えていつていた。

須藤君が、空いた缶をペコツとへこます音がする。どうやらそれが、須藤君の癖の様だった。

そんなお二人さんを横目で見ながら、料理をいただく。

「あつ、このキュウリのお料理、おいしい」

この料理は、須藤君と坂田くんが一緒に作ったものらしかった。鷹の爪のぴりつとしたアクセントと、ごま油のいい香りが食欲をそそった。

自分でも作ってみたいなあ、と思った。

坂田君は、私の言葉に嬉しそうな顔をしてほほ笑んでくれた。初めて会った時もあったけど、坂田君の笑顔はいい。

素直な、邪気の無い笑顔だと思った。

「ねえ、岬ちゃん。やつぱり、岬ちゃんのお料理っておいしいわ」
有加が、もぐもぐとサラダやパスタを食べて感想を言ってくれる。

「ホントに、うまいですよねえ。これ、全部。岬さん一人で作ってたんですか？」

坂田君まで、そんなことを言ってくれる。

「しかも、このパスタの茹で具合って言ったら。最高ですね」
つるつるとパスタを食べる坂田君の隣で、須藤君が苦笑する。

「ああ。……これは、須藤君がやってくれて」

苦笑だけして、しゃべらない須藤君の代わりに私が話す。

「だって、コノヒト時間を計らないし」

サラダをつつきながら須藤君がしゃべった。

須藤君は、パスタには少しも手をつけていない。

「あれっ？ 朗。おまえパスタ食わないの？」

坂田君が聞く。

「……たこ焼き食ったからあ。なんかな」

ふーん、と有加がつぶやく。

「でもお」

有加がオメメをくるくるさせながら須藤君を見た。

「たこ焼きよりもおいしいですよ、こっちのほうか」

そう言いながら、有加はパスタをパクツと食べた。

うーん。有加ってば。

しーんとなった空気が肌にぴしぴしと、突き刺さる。

有加は、ほほ笑んでいるけど目が座っているし。

坂田君は坂田君で、有加の顔を穴があく程見つめているし。

須藤君は、サラダをつつく手が止まってしまったし。

そして私の額には、数十本の斜線が入った、と思う。

「ゆ、有加あ。さっきの占いはどうだったの？」

話をそらそうと、話題を振る。

「ああ？ 占いだって？」

須藤君が鼻で笑う。

「鉛筆なんて騒ぐから何かと思ったけど。ああ、丁度いいじゃん。

佐倉さんも、男運でも見てもらえば？ どーせ、合コンに来るくらいなんだから男なんていないんですよ」

今度は須藤君だった。

「ああ、まあ、そうね。また、機会でもあつたらあ
か、帰りたい。」

今すぐ部屋に帰りたい。

もしくは、誰かにこの場の空気を浄化して欲しい。

「バツカだなあ、朗は。言っただろ？ 佐倉さんは一番人気だつて」

坂田君が須藤君を小突いて話し出す。

「えっ？ 岬ちゃんが？ 凄い岬ちゃん！」

きゃいきゃいと、有加がはしゃぐ。

なんていうか、話題がどんどん斜め四十五度にスライドしていく。

「あははは」

やけになつて、無意味な笑いをする。

「じゃあ、坂田も佐倉さん狙いなのか？」

新しく開けたモルツのビールを飲みながら、須藤君が言った。

途端に、再び緊張が走る。

有加の笑顔も凍りつく。

意地悪な顔で、須藤君は坂田君を見る。

「おいおい坂田。おまえ、なーんて顔してんだよ。なんだよ、なん
か言つ事でもあるのかよ」

ごくごくごくと須藤君がビールを飲み干した。

そして、お約束の様に、缶の横をペコッと潰した。

「あーっと。空になつたじゃん。まだ、モルツはあつたかなあ」

須藤君が席を立ててキッチンへと向かう。

冷蔵庫をあける音がする。

私たち三人は黙つたままだつた。

暫くして、須藤君がこつちに戻ってきた。

彼の手にはビールは無かつた。

「佐倉さん、買い物に付き合つて」

突然名まえを呼ばれて、驚いて顔を上げる。

「モルツ、切れた」

「ああ、はい」

ゆっくり立ち上がり、お財布をカバンから出そうとした。それにしても、あんなに買っていたモルツビールが、もう無くなつたのかしら？

「お金は出すから、いいから」

私のことを促すような須藤君の声だった。

須藤君は、既に玄関へと歩き出していた。

私も急いで須藤君に続く。

「は、はい。じゃ、有加。ちょっと行ってくるから」

有加たちに声をかける。

二人とも、顔を赤くしながら俯いていた。

ああ、これって、もしかして？

玄関の扉を開けて須藤君が立っている。

視線は廊下のほうに向けられていて、私とは目が合わない。

須藤君って。

もしかして？

外に出ると、気持のいい夜風が吹いてきた。

二人で無言で歩く。

私は、少しだけ須藤君よりも後ろを歩いた。

怒りんぼの彼の、無防備な耳たぶが見えた。

どこまで歩くんだろう。

そう思いながらも、不思議と不安にはならなかった。

須藤君の後についていけば、多分どうにかなるんじゃないかと思つた。

虫の音と、私たちが歩く足音だけが住宅街の夜に響いていた。

時折、ナイター中継のテレビの音がわーっという歓声をのせて聞えてきた。

この時間なら、延長戦に入っているのかもしれない。

今年は、どこの球団が優勝をするのだろうか。
港も今ごろ、テレビにかじりついてお気に入りの球団の応援をしているのかもしれない。

歩くうちに、公園の前のコンビニが見えてきた。

結構な数の人たちが、コンビニで何かを買っている様だった。

「ここ。酒も置いてあるから」

外に出てから、須藤君が初めて口を開いた。

「で、何本買うの？」

須藤君に聞く。

「ゼロ本」

きっぱりと須藤君は、そう答えた。

ゼロかぁ。

「そう」

そうか、やっぱりそうなんだ。

須藤君はあの二人の為に、仕掛けたんだ。

「じゃあ、私たち。共犯だね」

有加と坂田君の恋を始めさせようとした、共犯。

「共犯かぁ」

須藤君が考えるような仕草をした。

「上手いこと言うね。佐倉 岬さんは」

須藤君はそう言うと、横顔だけで少し笑った。

8話・どうにかなりそうぞ、どうにもならない

「須藤さん」

会議室からの帰りに、後から声を掛けられた。

振向くと、林 利奈が書類を抱えて立っていた。

「よお」

そう答えると、俺は再び自分の席に向うべく歩き出した。

林は俺に並んで歩き出した。

「朝から大変ですね」

今日は朝から、近々行なわれる居室の移動についての説明会を各プロジェクトに向け、順次開いたのだった。

昼飯も食べたんだか食べないんだかわらないような状態だった。時計は既に三時近くになっていた。

俺の歩調に合わせる為に、林がパタパタと音を立てて歩く。

「まあさ。無事に終わってよかったよ」

新しく始まったり、通常とは違う事を説明する時は、やはり緊張する。

『説明後の質問』ってやつが、全くどういう角度で来るか分かったもんじゃないからだ。

「ふふふ」

林は笑っている。

今日の林は、機嫌がいい。

歩きながら自分の席が視界に入ってくる。

今朝、綺麗に整理していったはずの机の上は、雑多に載せられた書類の山となっていた。

電話機なんて、既に埋もれて見えない状態だった。
やれやれ、とどっかりと席に着く。

「すみません。実は、これも総務あてなんですよ。回覧をお願いしますね」

林が回覧板を、俺の机に置いた。

その途端、湿度を持った甘い香りが俺の横を掠めた。

その香りには、覚えがあった。

林の視線を感じながらも、俺はわざとそっちの方には目をやらなかった。

林の顔は見なかった。

回覧板には、社内の慶弔のお知らせが挟んであった。

「へえ。結婚」

自分の言葉を自分の耳で聞きながら、しまった、と思った。

「彼女、須藤さんのファンだったんですよ」

林が言う。

林のやる事には、常に計算がある。

「は？」

突拍子もない言葉だった。

周りに人はいなかった。

会社つて、たまにそういう瞬間がある。

ふと顔を上げると、誰もいないって。

そんな中で、林が俺に仕掛けてきているって事は明らかだった。

「ほら、以前に女子トイレで入れ歯が落ちている事があったじゃないですか」

林は話しを続ける。

『入れ歯事件』。

そういえば、あったなあ。そんな事が。

「あの時須藤さん、彼女に優しくしたでしょ。で、すっかり、須藤ファンに」

優しく？

した覚えなんてないし。

「バカな事を言っていないで、仕事に戻りなさい」

バカな事？ と林はつぶやきながら、覗き込むようにして俺の顔を楽しげに見つめてきた。

俺と目が合うと林は、口元をきゅっと上げて更にほほ笑んだ。まじまじと近くで見ってしまった林の顔には、さらりとした涼しげな化粧がしてあり。

やっぱり林は美人だった。

「いつ、持ち帰ってくれるのさ。アレ」

観念して、林の顔を見ながら話す。

俺たちの顔は、かなり近かった様に思う。

林の瞳が輝く。

「お返事。用意していただきました？」

「返事は、NO」

林の艶々とした唇が、少しだけ歪んだ。

「じゃあ、こつちもNOです」

強い目線で睨み返される。

「ちよつと」「冗談じゃない、と続けようとしたところ、タイ

ミングよく電話が鳴り出した。

「ちくしょう」

書類の下になっていた電話機を、がざがざと探し出す。

「回覧、よろしく願いますね」

そう言いながら、林がゆっくりとした歩調で部屋を出て行く姿を目で追っていた。

目の敵の様に、電話機は鳴り続ける。

他のシマの人が、何事かと眉をひそめてこちらを見るのがわかる。

ええい。

なんだってこの瞬間、ココには、俺だけかなあ。

そう思いながら、やけになって出てしまった受話器の向こうからは、受付からの高く通る声が聞こえてきた。

受付近くのソファで俺を待っていたのは、今回の間仕切りの見積もりを頼んでいる業者さんだった。

どっしりとした体格の人なのだが、何故か落ち着きが無い印象を受ける。

彼のカバンは、書類やなにやらでパンパンに膨れ上がっていた。

おまけに、あんなにたくさん物を入れているのに、肝心な書類が一枚足りない事がよくある。

ちよつと、俺には理解できないなあと、会うたびに思う。

まあ、シゴトだし。トモダチって訳じゃないし。

彼がどんなであろうと契約が上手くいきさえすれば、問題無しなわけだし。

そのまま応接室に移り、間仕切りの種類と数量と価格の話をした。

居室の見取り図を開きながら、今あるもので使えるものと、必要になる所の数を何度も見直した。

できるだけ出す金は押さえない、それがこつちで、できるだけ出す金を増やさせたい、それがあちら。

お互い容赦の無い駆け引きだった。

「すみません、煙草を吸ってもいいですか？」

彼が聞いてくる。

聞きながらも、既にポケットに手は伸びて煙草を出そうとしていた。

「ドウゾ」

一応聞いてくるあたりが、しおらしいと言えるが。

しかし、この人の吸う煙草は『重い』。

しかも、量が半端じゃなく多い。

正直参るが、仕方が無い。

案の定、話し合いは難航した。

数はともかく、値段の折り合いがつかない。

「もう少し、勉強していただけませんか？」

再三に渡り、のらりくらりと打診をする。

「いや、こちらの方としましてね」

あちらさんの首は、中々縦には振られない。

心の中で大きく溜息をつく。

既に俺の肺の中は、短期集中で黒くなりかけているような気がした。

こいつに、俺のガン保険の支払いを命じたい気分になる。

静かな押し問答が続いたが、どうもうまい具合に話しがつかなかった。

どんな交渉も、そう一度で上手くいくとは限らなかった。

まあ、結果的に、こちらの言い分が通ればいいのだから。

机に広げたスケジュール帳に視線を走らせる。

まだ、価格決定の期限までは、少しだけ余裕があった。

話し合いは、次回に持ち越されることになった。

応接室から、総務に戻る前に禁煙コーナに寄った。

時計を見ると四時過ぎだった。

彼と、一時間以上も話していたことが解る。

どつかりと、ソファに身を沈める。

ようやく、本物の大きな溜息をつくことが出来た。

参る。

仕事もプライベートもどっちも決裂。

二つが重なると、流石に参る。

両方とも、どうにかなりそうでもどうにもならないのが、余計にストレスをためる原因だと思う。

左手で、ズボンのポケットに小銭入れがあるのを確認した。

よいしょ、と体を起こして、目の前の自販にお金を入れた。

この自販は、缶でなく紙コップ式のものだった。

アイスコーヒーを押し、氷増量を押した。

カランと紙コップが落ちる乾いた音がして、続いてザザザと氷が

落ちる音がした。

ウィーンというモーター音と共にコーヒーが注がれ始める。

一体この自販の中身はどういう仕組みになっているのだろう。

そんな事を考えながら、手に紙コップを持ったまま窓の向こうの景色を眺めた。

夏の太陽は夕方になってもまぶしく白く光り、そのきつい日差しとやけに青い空　が、少し離れた所にあるビルの、鏡みtainな外壁に映っている。

外はまだ、さぞかし暑いのだろう。

じつと眺めていると、ビルに映った雲は、ゆっくりと大きく動いていた。

無機質なビルの壁に、動いていく空の映像が映し出されていた。けれど、日中は、クーラーの効いた部屋の中で快適に生活している俺には、なんだかそんなのはヒトゴトの景色だった。

映画や、ドラマの中で見るのと同じだった。

ふと、思う。

こんなビルの中で、間仕切りの価格がどうのとか、林の事でイライラしている自分が、酷くちっぽけで愚かだと。

どうでもいいことじゃないか。

間仕切りの価格が多少高くても、林がアイツを取りにこなくても。

もう俺は、あんな煙だらけ部屋の中に一秒たりとも居たくなかったし、林に知ったかぶり顔で、周りをウロウロされるのもごめんだった。

全て、どうでもいいことじゃないか。

ばかばかしい。

そして、こんな事に振り回されている自分は、もつとばかばかしい、と。

生暖かな夜の街を歩き、ようやく家に辿り着く。

玄関を開けた途端、むっとした空気を感じた。

今日の日中も、かなり暑かったのだらう。

靴を脱いで、そのまま一直線でベランダへと歩く。

がらりと、思いっきり窓を開ける。

外気がサツ　と頬を掠める様にして部屋に流れ込んできた。

外の生暖かく感じた空気も、この部屋の暑さに比べたら随分と涼しいものだった。

要は、比較の問題なのかもしれない。

どっちがマシか。

そんなことを思いながら、なんとはなしに目に映った夜空を眺める。

生い茂る枝葉の向こうに、夜空に浮かぶグレイの雲が、ゆっくりと流れるのが見えた。

そして、細く弓なりになった三日月の姿が、気紛れに雲の間から見え隠れした。

そのチラチラと輝く姿は、健気にさえ思えた。

月の存在は、星もろくに見ることができないこの街で、唯一夜空に輝く宇宙的なものだと思えた。

たとえ今夜、雲が無いとしても、星なんていくつも見えやしない。

まるで地上が燃えているかの様に、この街の夜の空色は、赤く濁った黒さだった。

星が輝くには、明るすぎる。

そして、そんな空の下に、俺の生活の全てがあった。

仕事をするのは、好きなほうだと思う。

働く、という事が性に合っているのだと思う。

金銭的に自立しているという事も、安心感が有る。

親の人生に振り回されずにすむからだ。

自立という言葉は、自分の人生を好きに生きられる意味と同義語だと思っていた。

所詮、コドモってというのは、親の人生にいいように引つ掻き回される立場だと経験していたから。

けれど今、気が付けば、今の生活をちつとも楽しめてなんかいやしない、自分がいた。

自立という言葉は、自分の人生を好きに生きられる意味と同義語なんかじゃなかった。

そんなことを思う俺の耳に、どこかの誰かの家で鳴る、風鈴の音が聞こえた。

9 話・彼と弟

恋が実る瞬間は、美しいと思う。

有加と坂田君の恋は、思いがけず私の目の前で始まった。
そう。

恋は、始まったのだ。

みゆうを預かってからというもの、須藤君は週に二回程、玄関前にちよこんとビールを置いていくようになっていた。

その様子が、まるで牛乳屋さんみたいだと思ってしまった。

意外と須藤君は、律儀な人なのかもしれない。

または、人に借りを作りにたくない人なのかも。

それにしても、なんかなあと思ってしまう。

こういう、モノで「行為」に対するお礼を払うような事ってどうなんだろうって。

もし、相手が弟の港なら「どうかと思うよ、こういうのって」、と話したりも出来るけど（でも、港からならビールはしっかりと貰うかも）須藤君は私の弟でもなければ、友だちでもない。

だから、須藤君の気がそれでおさまるのなら、わざわざ断りに行かなくてもいいのかなあとも思った。

それに、あまり須藤君とは、会話を重ねたくなかった。

話すって事は、それだけ相手の事を知ってしまう事になるわけで。

私は須藤君の事を今以上に知りたいとは思わなかったし、私の事も話したいとは思わなかった。

有加と坂田君が付き合うようになったからといって、須藤君と私も親しくならなくちゃいけないってことでもないし。

でも、解っている。

一番ヘンなのは、こんな風に須藤君の事をアレコレと考えてしまっている私なのだって。

考えなきやいいのに。

ホントに、須藤君の事なんて、考えなきやいいのに。

「佐倉さん、『港区赤坂一丁目』の物件の地図のコピーと路線価格を調べてくれる？」

ぼんやりとしていた私に、事務所の柴崎社長からの声がかかった。

あわてて席を立つ。

「あつ。佐倉さん」

コピーを取る背中に、社長が声を掛けてくる。

「はい」

「再来週、早ければ今週末なんだけど。直行で書類を届けてもらいう事が出てくるかもしれないけど。いいかな」

直行。

ダメな理由は、何もなかった。

家に帰ると、留守電のランプが赤く光っていた。

再生ボタンを押しながら、シャワーを浴びようと着ていた服を脱ぎ始める。

昼間の暑い時間は、室内ににいるとはいえ、ブラウスからは薄っすらと汗の匂いがした。

そのブラウスを洗濯ネットにパツと入れて、ポンと洗濯機に入れた。

電話からは、母の声がした。

岬ちゃん、元気？　ちゃんと食べてる？

母からの言葉に苦笑する。

二十九の娘をつかまえて『食べてる？』なんて。

いくつになっても、子どもは子どもで、親にはなんだか心配をかけているんだなあ、と思っていると、「港のことなんだけど」なんて、突然『港』の名まえが出てきた。

ぱっと、体中から汗が出てしまう。

そして、思わず電話に近寄った。

あのコ、岬ちゃんどこにお邪魔してない？

えっ？　いるわけ？　ココに、港が？

焦りながら部屋中を見渡した。

まさか、既に部屋に上がりこんでいるなんてことは無いよね、と思いながらも、もしかしているかもしれない、って思わせてしまう港ってブキミだと思った。

その時、ガサガサとビニールが擦れる音が庭の方からしてきた。そして、コツン・コツンとガラス窓をノックする音も聞えた。締め切ったカーテンの向こうには、誰かがいるみたい。

凄く、嫌な予感がした。

予感というよりも、確信に近かった。

『誰か』なんて思いながら、頭に浮かぶ人物はただ一人。

朝、脱いだままイスに掛けてあったＴシャツをぱっと着て、窓に向う。

BGMとして、母の声が効果的に響く。

港ったら、また今日お父さんと揉めて。さっき家を飛び出したのよ

カーテンの前で大きく深呼吸する。

どうか港がいまssen様に、なんて、一応カミサマをお願いをして

みたりもする。

そして、意を決して、ザザツと思い切りよくカーテンを開けた。布のカーテンとレースのカーテンと一緒に、勢いをつけて。

すると、すっかり夜になったマンシヨンの庭の縁側に、白いＴシヤツを着たでかい背中が見えた。

そしてその人物は、ガラス越しに顔だけをこちらに向けながら手をヒラヒラと振っていた。

港だった。

やっぱり、港がいたあ。

体中の力が、がっくりと抜けていく。

諦めの心境でガラツと窓ガラスをあけた。

「よお、岬。元気？」

港は人の家の庭先で、呑気にビールなんて飲んでいた。

そして、にゅつと私に向けて、まだあけていない缶ビールを差し出してきた。

「ねえ。何してんの、港」

ビールを受け取りながら、港の横にしゃがみこんだ。

「ん？ ボクかい？ お月見さ」

そう言つて空に浮かぶ月を指差しながら、港はおいしそうにビールを飲んでいる。

よく日に焼けた喉に、ビールがごくごくと入っていく。

つられて私もビールを開けた。

今更気が付いたけど、このビールはまだ冷たかった。

「港っていつここに来たの？」

ビールに口をつけてながら聞いてみた。

「ん、五分？ いや、十分位前かなあ」

「ふーん」

そうなんだ。

本当に、少しの差だったのね。

「あのさ、あんまり聞きたくない事だけど。港は、どうやってこの庭まで入って来たのよ」

このマンションの構造上、そう簡単にはここまでは入って来られない筈だったから。

「塀の上をさ、歩いてきた」

「ふーん」

そうでしょうよ。

もう散々、港のメチャクチャさに付き合ってきているから、これ位の事ではビクともしないけど。

「港さあ、先生を辞めてないよね？」

「辞めてないよ」

私の質問に不思議そうな顔で、港が答えた。

それを聞いて少しほっとした。

「あっ！ やられたっ！」

パチツという音を立てながら、港が自分の腕を叩いた。

「O型の血がたっぷりと吸われてしまったあ」

港の手の平には、つぶれた蚊と蚊の吸ったO型とやらの血が付いていた。

ボリボリと港が腕を掻きだす。

「ほら、あまり掻いちゃだめだよ。薬をつけようよ。港も部屋に入ったら？」

港は、蚊に刺されやすいんだった。

「いいの？」

嬉しそうな顔で港が私を見る。

有加にしろ、港にしろ。

本当に私のツボを良く押さえている。いいように甘えられているんだろう。

まあ、仕方がないよね。私はお姉さんなんだし。

「靴は、脱いで上がってね」

「いーい。ラッキー」

港は、右手にビールを持ちながら、左手でなにやらでかいリュックを持ち上げた。

この様子だと、今日は家に帰りそうにもない。

「岬さあ、この袋を捨てていてよ」

港からポンと渡されたビニール袋は、いつか須藤君と行ったお酒の買えるコンビニのものだった。

「ねえ、港。このビールって港の奢りだっけ？」

靴を脱いでいる港に、恐る恐る聞いてみる。

「えっ？ 違うよ。なんかさ、スドー君だっけ？ くれたんだよ」

……。

「カレさ、岬の男？」

眩暈がする。

「んな訳ないでしょ」

動悸もしてきた。

「じゃなに？ 岬のシャティ君？」

「馬鹿なこと言わないの。で、港さあ、須藤君に余計な事は言わなかったでしょうね」

「余計なことって何さ？」

「うーん、何と言うか。つまり、しゃべらなかったならいいのよ」

「じゃべるなってさ、何だよ。言うだろ。『ありがとうございます』はさ」

妙なところで、港は礼儀正しい。

「まあ、ね。ああ、じゃあ、それだけね。話した事は」

「ん、そうだな。ああ、でも岬の弟だってことは言わなかったよ。ほら、プライバシーって事でさ」

「ふーん」

「でも、挨拶はしたさ。『これから、岬と一緒に暮します』って」

「暮すう?」

「うん。カレ、同じマンションだって言うからさ、挨拶はした方がいいかなって」

そう言つと港は、確信犯的いたずらな笑顔を私に向けて、ニツと笑つた。

10話・茶色い男

佐倉 岬には、男がいた。

いつものように、玄関先にビールを置こうとした時、髪から、体から、どこもかしこも茶色い男が、佐倉 岬の部屋の前にやって来た。

彼は、でかくて重そうでそして汚いリュックを肩から下げていた。

「あれ？ 岬は、まだ帰ってませんか」と、突然に茶色の彼は、真っ直ぐな視線を俺に向けて、そう話し掛けてきた。

「どうなんでしょう。チャイムは鳴らしていないので」
本当に、そんな事を聞かれても困る。

ビールは、いつも適当に玄関前に置いておいたから。

いちいちチャイムを鳴らすなんて、そんな面倒な事は、していないかった。

「そうですか」

茶色の彼は、そう言つと、今度は俺の持つビールの入ったビニール袋に視線を移してきた。

いつか佐倉 岬と行った、あのコンビニに寄って買って来たのだつた。

「あれっ？ もしかしてそれは、ビールですか？ 岬に比べるとか？」

「ええ、そうですよ」

隠す必要もないと思つたので、素直に答えた。

「えっ？ 本当に？」 冗談で言っただけだなあ。いやあ。嬉しいな。ご馳走になります」

そう言つと彼は、長い体を律儀に曲げて俺に礼を言ってきた。

なんだかこちらもつられて「いえ」なんて、ガラにもない言葉が口から出てきてしまう。

体を元に戻した茶色の彼は、ニコニコしながら俺のことを見た。

「ああ、私はですね。岬の、何て言うか。えー、その、つまりがこれから暫く岬と暮す事になりますので、よろしくお願いします」

そう言つと、彼は再び深々と頭を下げだした。

一緒に暮らす？

その言葉をもう一度頭の中で、ゆっくりと繰り返す。

一緒に暮らすって？

この人が？

佐倉 岬と？

ああ、成る程。

つまり彼は、佐倉 岬サンの「彼」ってわけだ。

でもって俺に向つて、と言うか、こういう場面での「そーいう発言」はアレですね。

俗に言う「威嚇射撃」。

完璧誤解されている、のだろう。

それは、やっぱり、非常にマズイだろ。

『君子危うきに近寄らず』（若しくは『割れ鍋に閉じ蓋』って、それは違うか）

そして、こういう時にこそ、会社員生活で培った外面が役に立つのだった。

「ああ、そうですか。佐倉さんも女性お一人では何かと心配だったでしょうからこれで安心ですね。私は二階に住む須藤と申します。何かありましたらいつでも遠慮なく声を掛けてください」

俺は、そう言つて彼に向つて一礼すると、ビール入りのビニール袋を手渡した。

そして、彼の横を通り過ぎて、そのまま外階段を使った。

階段を上る自分の足音を、人ごとの様に聞きながら思う。

ビールを持って行くのは、もう止めようと。

例えばどんな理由があるにしろ、自分の女が誰かから何かを貰うなんて、やっぱり嫌なんじゃないかと思う。

一般的に。

そして何よりも、人の恋愛事情に首を突っ込んでしまうほど、俺は暇人じゃないってことだ。

「朗、聞いてるか？」

部屋に入った途端の、坂田からの電話だった。

「ハイハイ、聞いてますよ」

大嘘。

聞いていなかった。

受話器を左手に持ち変えて、ネクタイを緩めた。

「だから、貰ったんだよ。ビアホールの招待券をさ。二時間、飲み放題食い放題だって、行くだろう？」

「ごちゃごちゃと坂田が、日にちと時間と店の場所を言い出した。

「はいはい、メモをするから少し待ってって」

スケジュール帳に、言われた通りの事を書き込む。

「でさ、朗の方は、その後どうなんだよ」

受話器の向こうでニヤつく坂田が、簡単に想像できた。

「何のことさ」

「またまた。佐倉さんだつてば」

「誰だっけ、その人」

「お前なあ」

「悪い、キャッチが入ったわ。切るから」

「オイ！ おまえんち、いつからキャッチ
電話を強引に切った。」

幸せボケした坂田とこれ以上話しても、ムカツクだけだった。

イライラする。

緩めたネクタイを解いて、乱暴に机の上に投げる。
ふう、と溜息が出る。

そして初めて、部屋の空気がやけに重いことに気がついた。
そうだ、坂田からの電話に出ていて、部屋の窓を開けるもの忘れていた。

そりゃ窓でも開けないと、大変でしょ。

夏だしさっ、と何歩か歩き出して、俺は足を止めた。

窓なんて、開けなくてもいい。

乱暴に、側にあつた冷房のリモコンのスイッチをギュツと入れた。

直したばかりのエアコンは、ゆっくり音を立てて動き出した。
と、次の瞬間、ガーツと大量の冷気が部屋に流れ込んできた。
風の向き具合で、瞬間的に冷気が体に直接当たってきた。
体がピリツと冷えた。

汗を、かいていたんだ。

でも、これは、暑くてかいた汗じゃない。

理由が思い当たるだけに、舌打ちしてしまう。

一体、どうしたっていうんだ。

佐倉 岬に男がいたことに、俺は動揺していた。

そして、そんな自分にイライラとした気持ちが止まらない。

11話・彼の名刺

「じゃ、岬。ガッコに行つて来るね〜！」

今日も港は、朝から元気に出かけていく。

港が学校の先生になるまで、夏休みにも先生が学校に行くなんて知らなかった。

『夏期プールとか、まあ、イロイロあるんだよ』

そう言われれば、そうなんだろうなあと思って思う。

知っているようで知らない事つて、世の中多いのかもしれない。

今朝は取引先の会社に、朝一番で書類を届けに行かなくてはならなかった。

昨日の帰りに出来上った書類を受け取り、家に持ち帰った。

いつもは下りしか乗らない朝の電車を、今朝は上りで使う。

混んでいるんだろうなあ、と思うと気が滅入ってしまう。

でも、まあ仕方ない。

その積み重ねで、お給料を貰っているんだから。

ぞろぞろと人の流れにのつて、駅へと向う。

路線図を見て、目的地までの切符を買う。

自動改札をくぐり、階段、と思つたら、最近出来たエレベーターが丁度来ていた。

ラッキーと思い、そこに並ぶ。

スーツ姿のサラリーマンさんたちに混じつて乗り込む。

ふう、と溜息をつき体の向きをかえると、最後に男の人が飛び乗ってきたのが見えた。

「あつ」

声が出てしまった。

その人が、驚いたようにこっちを見た。

「オハヨウゴザイマス」

須藤君が、小さな声でそう言った。

彼は、「サラリーマン」していた。

エレベーターがプラットホームに着くと、中に乗っていた人がわつと外に散っていった。

先にプラットホームに降りていた須藤君が、こっちを見ている。

須藤君のスーツ姿は、初めて見たわけじゃないけど（帰りに一緒になった事があるし）なんか違った。

例えるなら「焼き立てのパン」というか。

出来たてホヤホヤのサラリーマンと言うか。

仕事帰りと、仕事に行くときの顔や雰囲気は、どこが違う。

上手く言えないけど。

須藤君の隣に立った。

須藤君がジロリと私を見た。

「佐倉さん、いつもと時間帯違うかい？」

ぼそとした声で、そう聞いてきた。

「うん。今日は仕事先に朝一番で書類を届けなくちゃいけないくて」

上りの電車が隣の駅を出たランプがつく。

「だから今日は、こっちに乗るの」

そう言っ私は、上りのプラットホームを指した。

「どこまで乗るの？」

「ああ、あのね」

間もなく一番線に参ります電車は

私の答えと、駅のアナウンスが重なる。

「ふーん。って事は」

須藤君が、私のことを見ないで言う。

「俺が降りる駅の先か」

ファ ン

電車が滑る様に一番線に入ってきた。

ザワザワと動き出す人の中で、須藤君と私だけが隔離された空間にいるみたいだった。

妙な感じ。

変な気分。

車内は、思ったよりも混んでいなくて、ほっとした。

なんというか流れて、須藤君と同じ車両に乗った。

つり革を掴んで、隣どうして並んだ。

左側に立つ須藤君を、そっと見る。

いつも港を見ているせいか、須藤君のツクリがやけに華奢に感じてしまう。

夏物のスーツをきちんと着込んで、ネクタイもスーツにあったものをしていた。

靴も綺麗だし。

「都会の男の子」って感じだった。

涼しそうで、軽やかで。

なんにも背負っていない感じ。

それに比べて、なんて私は色んなどろどろとしたものを背負っているんだろう。

そう考えると、少し落ち込んでしまった。

ふと、須藤君と目があつた。

つい、ほほ笑んでしまう。

須藤君は、私と目があわなかったかのようにプイと目をそらした。

嫌われているなあ、と思った。

いいんだけど。別に。

次の駅で、人がどつと乗ってきた。

入り口付近の人たちは、かなりきつそうな感じだった。

私も少しだけ須藤君の方に、体を寄せなくちゃいけなくなった。

「大丈夫？」

須藤君が声を掛けてきた。

たくさん人を乗せて重くなった電車が走り出す。

「うん。ありがとう、ごめん」と、その私の言葉がいい終わら

ないうちに、キキキ という電車のブレーキ音が重なった。

車内がガクンと揺れて、うわっと言う人の声も上がった。

わわわわ、と私も足元が揺れた。

落ちそうになる書類を必死で掴む。

バランスがくずれて、体がよろける。

わわ、まずいかも、と思った時に、目の前にバツとスーツの袖と

ワイシャツと、そこから伸びる手が見えた。

そして、そのまま、体ごとぎゅっと包まれた。

「佐倉さん、平気？」

須藤君だった。

須藤君が、彼の右腕で私の体をつかまえてくれたのだ。

「あ、ありがとう」

クーラーが効いた、寒いくらいの車内だったけど、その一瞬で汗が吹き出た。

ただいまの急ブレーキ、大変申し訳ございませんでした

車内アナウンスが流れ出した。

あちこちから、ほっとした溜息が漏れ出す。

電車も、ふたたび穏やかに走り出した。

でも私は緊張したままだった。

「あ、あの、須藤君」

「は？」

須藤君の二重のオメメがきょとんとした顔でこつちを見ている。

「ありがとう。もう大丈夫」

電車は元に戻ったのに、私だけが須藤君の腕の中だった。

「あつ！ ご、ごめん」

ぱつと、須藤君が右手を離れた。

「ごめん」

須藤君はもう一度そう言うと、そのまま前を向いた。

須藤君の دونالد 口は、へそを曲げたような不機嫌な形になっていた。

次は、

須藤君が降りる駅のアナウンスが聞こえた。

パツと須藤君は、お財布を出すと、そこから名刺を取り出した。

「その仕事先には、何時まで？」

「私？ 午前中くらいかなあ」

書類を見せながら、簡単な説明をする予定だったし。

「ここ、直通だから。その仕事が終わったら電話して」

「えっ？ 電話？」

差し出された名刺をじつと見る。

須藤君の会社と部署と、直通の電話番号が印刷してある。

ガタンと駅に止まると、須藤君は何事も無かったかのようにさつさと電車から降りて行ってしまった。

シュー、とドアが閉まる。

須藤君の後ろ姿が、たくさんの人に紛れて見えなくなっていく。

わけも分からず、須藤君の名刺を握り締めたままの私を乗せて、電車はゆっくりと次の駅に私を運びだした。

12話・誘ってしまった

バカだ。

俺は、とんでもないバカだ。

男がいる女に、なに色気づいて名刺なんて渡してんだ。

「あら？ 須藤くん、二日酔い？」

エレベーターで一緒になった、秘書室の荘野さんに声をかけられる。

「いえ。違いますよ」

頭の痛さは同じかもしれないけど。

「でも、顔色がヘンね。そんな顔で仕事もないでしょ。あとで秘書室にいらっしゃい。ビタミン剤をあげるから」

軽やかなベルの音と共に、エレベーターは俺たちのフロアへと到着した。

自己嫌悪で一杯の体を引きずりながら、俺は自分の席へと向った。

朝のひと通りの仕事を済ませたあと、俺は秘書室に向った。

やっぱり、ビタミン剤を貰わないわけにはいかないだろう。

ノックのあと、秘書室に入ると、いつものごとく荘野さんしかなかった。

「みなさん、『接待』ですか？」

嫌味を含んだ声でそう聞いた。

「全く、朝からねえ」

溜息をつきながら荘野さんが答えた。

「はい。須藤君」

莊野さんがビンごとビタミン剤を俺に渡してきた。

「ワカモノなんだから、ちゃんと野菜も食べないとね」

肩をすくめながら、莊野さんは俺にウインクしてきた。

ビンに貼ってある説明書を読みながら、三錠を口に放り込む。

チュアブルタイプなので、噛めるみたいだ。

口の中に、すっぱい味が広がる。

「ねえ、相談。須藤君」

莊野さんが、小さな声で話し出す。

「相澤さんと、付き合わない？」

ガギッ。

勢い余って、ビタミン剤じゃなくて舌を噛んだ。

「っ。はあ？」

「誰か付き合っている人はいる？」

頭の中が真っ白になる。

「いないんだったら」

「ちよちよちよ、ちよつと待ってくださいよ。ナンですか、ソレ」
うっ。

今度は、まだ細かく噛んでいないビタミン剤が喉に入ってしまったぞ。

「あら。そんなに驚かなくても。相澤さん、美人だし」

「美人だとか、そういうモンダイではなくて」

「タイプじゃないかしら？」

「タイプだとか、どうかそいうことじゃなくて」と言いながら、
佐倉 岬の地味な顔が浮んできた。

断然好みじゃない。地味な顔。

「そお。じゃあ、振りでもいいから」

ふりい？ それは、アヤシイ。

「なんか、あつたんですか？」

莊野さんが、大袈裟に溜息をつく。

「相澤さんの担当の常務がね、以前から、自分の甥っ子クンと相澤さんを会わせたいって、言ってるね」

「はあ」

「なんかの拍子に、まあ、そーいったプライベートな事を常務から聞かれたそうで、『お付き合っている人はいません』って相澤さんも答えたらしいのよ。まあ、そうよね。私だって、相澤さんの立場だったらそう答えるわよ。いる、いないに関係なくネ」

だよな。

『いる』なんて言ったら、今度はどんなことを聞かれるか分かったもんじゃない。

休みを取るにしたって、何を言われるか。

社員の私生活にまで、首を突っ込むなよ常務さんよ。

「困りましたね」

「困りましたよ。だから、相澤さんにも、『須藤くんに、彼氏の役を頼んだら』って言ったんだけど。なんか、言い出せなかったみたいね」

相澤が？

もしかして、厄年の事を俺に教えに来てくれた時かなあ？

「でも、下手に俺みたいな社内の奴だと、今度は『仲人』をしないと言い出すんじゃないですか？」

莊野さんが、にやりと笑った。

「大丈夫。『仲人』さんはできないわよ」

「えっ？」

「常務のところ、熟年離婚の危機らしいもの」

コリコリと肩を回しながら席に戻る。

『考えておいてね』

ひとまず、あの話は保留。

相澤こそ厄年かもしれない。

机の上に載っていた、伝言メモを確認した。

社内の部署から、間仕切りについてのいくつかの問い合わせがあった。

「俺宛に、外線なんてかかってきてないよね」

隣の席の小川さんに聞く。

「外線？　そういえば、今日はめずらしくかかってこないですね」書類に目線を落としたまま、小川さんがそう言った。

佐倉　岬からの電話が気になる。

名刺を渡した時に、黒豆ちつくなオメメが大きく開いていたことを思い出す。

多分、嫌々にせよ、彼女は電話をかけてくるだろう。

そういう女だと思う。

いつそ、無視してくれたら、とも思う。

無視できずに、きつとかけてくる、そんな、やけに律儀なところに腹が立ってくる。

そもそも、自分が誘ったことなのに。

なのに、佐倉　岬に対して腹を立てるなんて、全く俺は正しくない。

正しくないか。

『須藤君って、仕事以外は、あてにならない』、と言った莊野さんの言葉を思い出す。

そうだよ。ホントニ。

佐倉　岬と関わると、そんな自分の本当を自覚させられてイヤになる。

そう思ったときに電話が鳴った。

「はい、総務です」

「もしもし、佐倉と申しますが。総務の須藤さんは、いらっしゃいますか？」

佐倉 岬からだった。

「須藤です」

受話器を持つ手に汗をかいてしまう。

「あ。須藤君。佐倉です。あの。今朝……」

そのまま佐倉 岬は黙ってしまった。

そりゃそうだろう。

わけもわからず、名刺を渡されて、電話しろなんて。

そりゃ、何がなんだかわからないだろう。

俺にしたってそうだ。

自分でもわけが分からない。

だから、今の今まで、佐倉 岬からの電話にどう対応すればいいのか決めきれてなかった。

でも。

「今、どこですか」

俺の問いに、佐倉 岬が答える。

俺の会社の隣の駅だった。

「お昼でも一緒にどうですか？」

時計を見ると十二時少し前だった。

ランチには、丁度いい時間。

「最近、ビールも渡してないし」

「でも」

佐倉 岬に、うだうだ言わせないように畳み掛けて言う。

「申し訳ないですが、次の駅まで来てもらえますか？ 東口の改札

で待っていますから」

一方的にそう言って、受話器を置く。

結局。

誘ってしまった。

なんなんだ、俺は。

「あれ？ 今のつて、彼女さんからですか？」

小川さんが意味深な顔して笑う。

「あのねえ」

「だったら、お勧めのお店を教えちゃおうかな。昨日、私も行ったんですけれど」

小川さんが引き出しを開けて、お店の名刺をくれた。

黒地に白の文字で店名がぽっかりと浮き上がっていた。

13話・彼とのランチ

夏の日差しが眩しく煌く都会の駅前で、仏頂面した須藤君が私の事を待つて立っていた。

「佐倉さん。嫌いなものある？」

斜め前を足早に歩く須藤君から、声がした。

「ない、です」

パタパタと遅れないように、ついていく。

オフィス街のランチタイムは、綺麗な女の子たちがサンダルをパタパタさせながら歩いていた。

白いブラウスが、光に輝いてキラキラしていた。

若いなあ、と思った。

私と五つは違うんだろうなあ、と思って見た。

そういえば、前を歩く須藤君だって、私より二つ年下だった。

「……」

地下に行く階段の前で、須藤君が止まる。

黒地に白い店名が目立つ。

「……はい」

言われるままに、後について階段を下りた。

竹林のような装飾が施された入口を入ると、和服を着たお店の人が直ぐに席の案内をしてくれた。

案内された席に、案内されるままに、大人しく座る。

四人がけの席に、斜めに向かい合って座った。

なんか。なんかよ。

須藤君はひと言も話さないで、メニューを開いて見ている。

私もメニューを開く。

でも。

須藤君が決めないと、私だって決められない。

「佐倉さん、決まった？」

須藤君の声にぎくりとした。

「えっと。須藤君と同じので」

多分、須藤君は奢ってくれる気なんだと思う。

そう思うと、気軽に自分で決められない。

「へえ」

最高に意地悪な顔で須藤君が私を見る。

「二十九にもなって、自分の食うもん決められないんだ」

カチンとくる。

「では、私は！『日替わり御膳』でっ！」

バシッとメニューを閉じた。

ぐっと、グラスに入ったお茶を飲む。

「あれ？これ、そば茶だ。珍しい。お蕎麦屋さんでは多いけど」

私の大好きなお茶だった。

くくくく、と笑い声が聞える。

「なに？」

「ゴメン」

須藤君が、くくくくと笑っている。

「いやあ、佐倉さんって、食えることが好きなんだなあ、ってさ」

そう言いながら須藤君は、通りがかったお店の人にオーダーをしていた。

彼の顔はもう、仏頂面ではなかった。

それから、ぽつぽつと話をした。

マンションのメンテナンスのこととか（今度、自動火災報知設備の点検があるとか）、管理人さんのこととか。

クーラーの調子はその後どうだとか、あそこの電気屋さんのおじさんはどうだとか。

生活の中での「同じ」が多いから、そんな話が出来るんだと思った。

お料理が運ばれてきた時に、結局、私と同じものを頼んだ須藤君に文句を言つと、「ボクは『まだ』二十七だから、自分の食うもん決められなくてもいいんです」なんて悪態をついてきた。

まあ、いいんだけどね。

冷たいお吸い物をいただく。
喉越しがすつとしてて。

「おいしい」

須藤君と目があつたので、ほほ笑んでしまう。

おいしいものを食べるのって、精神衛生上とてもいいと思う。

「外でご飯を食べるのって、久しぶりだなあ」

しかも、知らないお店に連れてきてもらえるなんて、あの合コン以来かもしれない。（まあ、あの時は自力で行ったけど）

「彼とは外で食べないの？」

須藤君が聞いてきた。

はて。

彼とは？

ああ、港のことか。

「うん、たいてい家だし」

でも、港って朝は早いし、夜もドコで遊んでいるんだかで。

「そういえば、あの子と最近夕飯を食べていないなあ」と、ふつとぼやいてしまう。

夜になると母から電話があるから、あれはきつと逃げているのね。

「あの子」

須藤君がつぶやく。

「ああ、『あの子』なんてオカシイわよね。そうよね、うん」

弟のことは、いつまでたっても『あの子』って感じがするけど他の人に見てみたら、立派な成人した男性だもんね。

「いくつなの、彼」

いくつ？

はて、はて。

「いくつだろう」

ええと、誕生日がきて？

あれ？

きたっけ？

つて、今、何月だっけ？

「いや、別にいいんだけど」

須藤君が、私の困った様子を見て、そんな風に言ってくれた。

たまには、須藤君も適当なところで見逃してくれることもあるのね。

そして、やっぱり、というか。

須藤君が伝票を持って席を立つ。

「俺が払うから」

そうきっぱりと言われると、「はい」としか言えない。

別に、いいのに。

確かに彼の苦手な生き物を預かってはいるけれど。

でもそんなこと、どうってことないことだし。

ビールとか、お昼代とか、そんなのわざわざ貰うほどのことじゃないのに。

お店を出ると、アスファルトの照り返しで、地面から湯気が出るくらい暑かった。

これから事務所に戻って、またひと仕事。

「あのさ、須藤君」

須藤君も眩しいのか、大きな目が細くなっていた。

「いいよ、そんなに気をつかわなくても」

須藤君が、ん？、という顔をした。

「うん、だからね。私が、みゆうを預かっているからって、ビールを届けてくれたりとか、ランチをご馳走してくれたりとか。そんなの、いいのよ」

気をつかわないで欲しいって言いたかった。

もう充分してもらった、と。

「佐倉さんには、迷惑かもしれないけど」

日差しを避けるようにか、須藤君が立っている場所から少しだけ動いた。

「お互い全くの他人なんだし。ギブ アンド テイクってことで何か形になったケジメでもない、だめなんじゃないですか？」

大きな口の端がにゅっと上に上がる。

「でも、物を渡せば済むとか、そういう事では」と言いながら、
遂に言ってしまった』と思う。

「ともかく。それが俺のやり方なんで」

ぷいと須藤君が、歩き出した。

流石に私も、その後について歩こうとは思えなかった。

港にお説教するみたいに、須藤君に話してしまった。

須藤君は、弟じゃないのに。

知らない街の知らない場所で。

私は、後悔でいっぱい気持で、立ち尽くしてしまっていた。

14話・あの子

『あの子』だつて。

自分のオトコの事を、『あの子』だつて。

そして、妙に年上ぶったお説教。

いつにも増して、佐倉 岬に腹が立った。

ビルのエントランスに入った途端に、冷たい空気が顔に当たった。

「あつ。須藤さん」

エレベーターホールで、相澤が俺に声を掛けてきた。

もしかしたら、ずっと待っていたのかもしれない。

「あの。荘野さんからお聞きかと思いますが」

「ああ」

『甥っ子くんの件』か、と思い相澤の次の言葉を待つ。

「須藤さんには、ご迷惑をおかけしました。もう、大丈夫ですから。お気になさらないください」

相澤が、はつきりとした声でそう言ってきた。

「大丈夫って、じゃ、常務がもう会わなくていいって言ったってこと？」

俺のその言葉に相澤が表情をきつくした。

「私、会いますので」

睨むような目つきで、相澤が俺を見ている。

「会いますから」

ロボットの様な声で相澤が言う。

「会うつて。相澤さん、なに言ってるの？」

「だから、会えば」

そう言いながら、徐々に相澤の目には、涙が溜まりだした。

一階のエレベーターホールは、お昼を終えた人達でどんどんと膨れ上がってきた。

「ちよっと。相澤さん」

彼女の腕をとり、公衆電話が置かれている隅になったコーナへと連れて行った。

携帯電話の普及で利用も段々と減ってきているここは、いい死角だったのだ。

電話の側では、大手園芸店からレンタルしている観葉植物の大きな葉が、ゆらゆらと冷気に当たって揺れていた。ひっぱって来た相澤を、俺の正面に向かせた。

「会いたくないんじゃないの？」

だから莊野さんも、俺にまで声をかけてきたんじゃない。

「もう、いいんです」

即答だった。

「ふーん。まあ、相澤さんが会いたいのならいいんじゃないの」ホント、そうなら何のモンダイもなしだ。

甥っくんがいい奴なら、相澤だって儲けもんってやつだし。

「会いたいだなんて、そんな。私は……」

怒ったような顔で、相澤が俺を見返してきた。

どうでもいいけどさあ。

そんな顔を俺に向けるのは、筋違いってもんだと思う。

「相澤さんもさ、小学生じゃないんだからさ。会った後にどういう展開になるかって、少しは分かかってんだろ？」

相澤は戸惑いながらも、コクンと俯いた。

柔らかかそうな茶色の髪が、ふわっと揺れた。

「会えばそれで、ハイオシマイなわけないよな。下手すると話は進むよ」

相澤は表情を厳しくしたまま、無言だ。

どう見ても、喜んで常務の甥っ子に会いたいって顔してないのは、誰にでもわかること。

「あのね。ボクたちは、ここにお仕事に来てるわけよ。お金貰ってさ。だから、『仕事キツチリ』は当然の事だけど、自分の私生活まで売る事はないんだよ」

そう俺が話したすと、じわじわと相澤の瞳に涙が溜まっていくのが見えた。

ただいま涙を製造中って感じで、相澤の瞳がウルウルとしてきた。

でも、相澤は泣かない。

泣かないように、自分の中で葛藤しているかのように見える。

そして、瞳の中の表面張力を駆使しながら、俺の事を見ている。

きつと、彼女は絶対に、泣き顔を俺には見せたくないんだ。

根性のある女だ、相澤は。

なんか、スポコンマンガの先輩後輩にでもなった気分になる。

「あのお、男の人って。やっぱり社内恋愛が周りに知られると、『結婚しなきゃいけない』って思っちゃうところがありますよね」

突然、相澤がトンチンカンな事を聞いてきた。

もしかして、相澤と『付き合っている』関係になった時の俺の心配をしてくれているんだろうか？

「ま、まあ。うーん。どうなんだろうなあ。でもゴマンというぞ、社内恋愛破局組」

「えっ？」

相澤のヘーゼルナッツの様な瞳が、いち段と大きく開かれた。

「だから。まあ、付き合ったり、別れたり。あるでしょ、普通に」

「そうなんですか？」

「まあ、そうだな」

と、答えつつ。

これは全くのでまかせだ。

実のところ、社内で誰と誰が付き合っていて、誰が破局したかなんて、全く知らないんだなあ、俺は。

そーいう話には、ノータッチなもんで。

でも、多分、そうだと思う。

くつついたり、別れたり。

そうだった事は、会社でも簡単に行われていると思う。

男と女がいれば、むしろ当然のこと。

そういう俺だって、林と揉めているワケでして。

待てよ。

『相澤との事』が、会社で広まったりでもしたら、林がお出ましになるのか？

爆弾処理女、林が。

そうになると、相澤にも迷惑がかかるなあ。

いや、待てよ。

そうしたら、相澤の事を盾に林と縁が切れるとか？

『実は、相澤とは常務公認で付き合っていたから』って。

ここは IPP パツ、ギブ アンド テイクで、相澤にも協力をしてもらって。

いや、しかしなあ。それは、いくらなんでも、NG だよなあ。

相澤の事を、思いつきり巻き込むことになるし。

って事は、だよ。

俺は、相澤の事を引き受ける前に、林との関係をどうにかしないといけないって事か？

なんか、気が重いというか。

と言うよりも、今の状況じゃ、全くもって不可能な気がしてきた。

そうだよ、佐倉 岬にもヤツを預かってもらっているわけだし。

相澤の事を構っているよりも、自分の事をどうにかしないといけないじゃないか！

「……私。もう少し考えてみます」

相澤が、ぼつりと言った。

「でも、会わないにしろ。 須藤さんに、ご迷惑はおかけしません」

ドキリとした。

こっちのイロイロを、見透かされているようで。

「自分の力でどうにかしてみます」

ぱつと俺を見た相澤の表情は、さっきよりも多少、晴れていた。

そして、ペコリと頭を下げると、俺の横を通り過ぎ、エレベーターホールへ向かっていった。

自分よりも年下の女の子でさえ、自分の事を自分でどうにかしようとしているのに。

どこまでもいい加減な自分に、嫌気がさしてきた。

15話・犬と子どもと弟

「ただいまあ」

港の間延びした声が聞こえる。

私は、港の方を振り向きもせずに、ひたすら床の雑巾がけに精を出す。

全く、本当に、港は！

「あれっ。こんな夜に雑巾がけなんて、さすが元主婦。働き者だねえ」

心の底から感心したような声で港はそう言つと、冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎだした。

「岬も飲む？」

私の返事を待ちもせず、港は既に二つ目のコップに麦茶を注いでいた。

「ありがと。そこに置いておいて」

溜息ひとつついて、私はそう港に返事をした。

「ねえ、港。」

私は、『この床の件』を話し出す。

「今日、連れ込んだでしょ」

「えっ？」

港が笑いながらとぼける。

「そうねえ、犬が一匹に子どもが一人つてとこかな」

「おっっ！ さっすが、岬サマ。大当たりでございます」
「はあ。」

またか、と思う。

雑巾がけの手を休め、港に向き合う。

「あのさあ、港はセンセイなんだからさ、あまり特定の子どもと親しくするのは、どうかと思うよ」

港の今の受け持ちは、二年生だった。

「あと、庭で水遊びをするのは構わないけど、泥だらけの足で家中を歩かないでね」

仕事から帰って来て、私は驚いてしまった。

床の色が、やや白めの茶色　つまり、泥の乾いた色に変色していたからだ。

そしてご丁寧に、犯人のモノと思われる大きな足跡と、小さな足跡と、犬の足跡が残っていたのだった。

そして、その後始末を、私はしているというわけ。

「岬、庭にあるやつ見た？」

港は麦茶を片手に、嬉しそうに聞いてくる。

「うん。すごい基地ができていたね。二人で作ったの？」

庭には、木の枝や、小石や、ペットボトルでできた小さな基地があった。

見ただけで、楽しい時間を過ごしたことがわかるものだった。

「ほとんど、吉成が作ったんだ」

生徒の名前は、『吉成君』というのだろう。

「うちの庭もいいけど、キミの家の方が広い庭があるでしょ」

私たちが育った家には、ここよりも大きな庭があった。

「嫌なことを言うなあ、岬は。いいんだよ、狭くても。広さより快適さを取るのだ、ワシは」

全く。何が『ワシ』は『よ』。

そんな私の気持も知らないで、港は偉そうに立ったまま、私を見下ろしている。

「佐倉センセイ。キミのお母さんが、心配してますよ」

「いいんですよ、佐倉サン。そもそも、今時、親の知人の娘に会うって、どうよ？」

港には、そういった種類のいわゆる『お見合いの話』がいくつかある。

「やだ、今回もその事で揉めて飛び出してきたわけ？ もう、進歩ないなあ。港に関しては、そういうの賛成だな、私は。それに、もしかしたらさ『松 たかこ』ちゃんが来るかもしれないしい」

港をからかう。

「岬。そのネタ、微妙に古い」

港が私の言葉に、クレームをつけてくる。

「古くてもいいんです。ともかくお母さんは、心配なんだヨ。港がコンナだから」

「『コンナ』って、なんだよ」

「ああ。コンナっていうのは、こういうことよ」

私は、汚れた雑巾を港の目の前に差し出した。

「港はさ、子どもの事が大好きで、どの子も大切にするでしょ。それはさ、凄く、凄くエネルギーのいることでしょ」

港は、優しいすぎるのだ。

何度も、何度も、子どものことで悩んで、苦しんでいる港を私たち家族は見てきた。

だからこそ。

「港の事をサポートしてくれる人がいればいいなあって思うのは、お母さんだけじゃないよ」

私だってそう思う。

「だいたいね。港は多すぎるのよ、ガールフレンドが。でさ、『みんないい子で一人に決められない』なんて言うから、お見合いの話になるのよ。嫌なら、その中から『一人を』さっさと自分で決めなさい！」

港は男女問わず友達が多い。

それは、それでいいけれど。

港のもろさを知っている、母や私にとっては、どうもそれだけでは物足りない。

結婚は『本人の問題』という言葉で片付けられない複雑な感情が、家族の中には存在するのだ。

「いいよ。岬がいるから」

面倒くさそうな声で港が言う。

出たっ！

「よくない！」

即座に言い返す。

先生になったところで、港のこんなところは小さいころからちつとも変わらない。

面倒なことがあると、その矛先はいつも私に来るのだ。

「ほら、邪魔な仁も消えた事だし」

「なんで、仁のことが、港に関係あるのよ」

話がいやな方向になってきた。

「いやあ、別れて正解よ。岬ちゃん」

港が大袈裟なゼスチャーで、手で何かを追い払う動きをした。

「そこまで、港が言うことじゃないでしょ」

港が『しまった』という表情をした。

でも、もう遅いんだから。

「私、ちよつと出てくるから。あとは港が拭いとくんだからね」

雑巾を置いて、港の横を通り過ぎる。

「み、みさきい」

思いつきり港が慌てている。

「もし、少しでも汚かったら。強制送還」

そう言いながら、ぎろりと港を睨ん部屋を出た。

外へ出た途端に、夏の夜風が、さーっと髪を揺らしていった。

ぶつくさ言いながらも、きつとピカピカに床を磨き上げるであるう港の為に、私はビールを買いにコンビニへと向った。

16話・もう、いい

朝からバタバタと走り回る。

悪筆の新人が発注した品が、業者さんの型番の読み違いという事態を招き、結果全くの別物が納品されたりとか（しかもその新人は、注文すること自体も遅くて、頼んだ方はその品が今日必要だったり）、社内便のアルバイトの子が「総務」と「業務」を間違えて今日一日書類を配り歩いたとか、秘書と常務が（相澤じゃなかったけど）言い合いになったとか。

今日に限ってそんな信じられないことが次々と起こり、自分の仕事に取り掛かれたのは四時過ぎだった。

更に今日は、坂田に飲みに誘われていた日でもあった。

パスするか？

約束の時間は七時半だった。

今は六時過ぎ。

しかも世間では夏休みの八月の金曜。

フロアに人は殆どいなかった。

そんな中、自分の机の上にある今日中に仕上げたい書類の束を見つめる。

やっぱり、坂田に断わりの電話を入れたほうがいいだろう。

それで、ついでにアイス珈琲でも飲もう。

人が少なくなったフロアは、その分クーラーが効いてますますで寒くなってきた。

でも空気が乾燥しているのか、喉は無性に乾いていた。

自販の珈琲の紙コップに口をつけたまま、携帯を取り出す。

禁煙コーナーの窓の外には、都会の夏の夕焼けがオレンジ色に滲

んでいた。

「須藤さん」

呼ばれて振り向くと、甘い香りをさせた林が帰り仕度の済んだ姿で立っていた。

「よお」

林が、にこりと笑いかけてきた。

「今日、大変でしたよねっ」

林も業務なので、社内便パニックの被害にあった1人だ。

「ああ、そうだね。お疲れさん」

「夏だからって、社内便にアルバイトを頼むのってどうなんでしょう」

「どうなんでしょう、と言われましてもね。」

「そこら辺は、あちらさんの都合が色いろあるんだろうし」

社内便の仕事は、業者に委託していた。

「まあ、どうにかやっていくしかないでしょ、お互い」

「そういうもんなのだ。」

「須藤さんは、優しいから」

優しいって、またかよ。

「俺が？」

「ええ。だって」

林がずっと俺に近寄り、小さな声で話してくる。

「みんな、会社みんな言っていますよ。何か困ったときには総務の須藤のところに行けばどうにかなるって。それに、最近では秘書の誰かさんの相談にもよく乗っているみたいだし」

相澤のことか。

「相談になんて、乗ってないよ」

「そう言いながら携帯を内ポケットにしまった。」

「ふーん」

不機嫌な形に林の唇が歪んだ。

「じゃ、なんだろ。やけに仲がいいような気がするけど」

はあ。

「仲がいいねえ。まあ、秘書の人とはみんなあんな感じだよ、俺はそれでもって、好みってことと言えば相澤さんよりも荘野さんの方かなあ」

相澤のことで、これ以上あれこれと林と話したくなかった。

「やだあ。年上好みなんだ、須藤さんって」
げほつ。

「やだ。大丈夫？　珈琲、こぼれませんでした？」

「いや、大丈夫」

手に持っていた珈琲の紙コップが傾いてしまったのだ。

年上好み。

動揺してしまう。

マンシヨンの下の階に男と住む誰かを思い出してしまったから。

そして誰かの彼の「暫く」という言葉通りに、いまだにお二人仲良く一緒に住んでいるようだったし。

もうそのまま、ずっと住むのかもしれないし。

「ねえ、須藤さん。今晚は、これからお暇ですか？」

林が聞いてくる。

「予定がある」

仕事の為に断わりようとしている予定だけど。

「誰と？」

じーっと林が俺を見つめる。

「言わないといけないの？」

俺も林を見つめ返す。

「聞く権利があると思う、私には」

林も負けない。

「だって、私は須藤さんにプロポーズしてるんですよ？」

「お断わりしましたけど」

「納得がいきません」

「何に納得がいかないのさ」

「だって」

「だって？」

「私たち、そういう関係でしたよね？」

林がズバリと言ってくる

「関係は、したよな」

それは、そうだ。

「なら」

林は、キツと俺を見据えてきた。

「林さんは、そういう関係になったから、俺と結婚したいんだ？」

林に聞く。

「違います」

違う？

「違います」

じゃ、なんだ？

林が肩からさげたショルダーの位置を変えながら、こっちをじつと見た。

「好きだからでしょ。須藤さんのことが」

ドスンと衝撃が来た、林の言葉に。

「好きだから。須藤さんのことが好きだから。だから『みんなも後から来るから』なんて須藤さんに嘘をついてまで家に行つて。好きだから、好きだから、須藤さんとも」

「好き？ 俺の事を？」

「当たり前です。私は、嫌いな人とはそんなことしません」

いや、ちよつと待て。

林が俺を好き？

賭けとか、気まぐれとか、遊びじゃなくて？

林が本気だなんて、考えもしなかった事で混乱する。
そうだ、考えもしなかったんだ、俺は。
林の気持を。

「ごめん」

林の顔が蒼白になる。

「ごめんって。それ、どういう意味ですか」

「君のことは、好きじゃない」

バックの紐を掴む林の指先が、きゅっと白くなった。

「嘘、ですよ？ そんなの。あんなことしといて、私のこと好きじゃないなんて」

「ごめん」

「そんなの、そんなの。嘘、嘘ですよ」

「ごめん」

「ごめん、ですって？ 散々その気にさせといて、今更？ 今更そんなこと言って！」

ずっと、林の手が動くのが見えた。

そして、林の夏用のバックが、弧を描いてそのまま俺の顔にヒットしてきた。

流石に、体がよろける。

そして当然の様に、珈琲はこぼれ、スーツを濡らした。

「私、須藤さんは。須藤さんは、照れているだけかって思ったから」

真っ白な顔で林が続ける。

「須藤さん、仕事の話とかすごく聞いてくれたし。だから」

それは、いつも自信満々の林の姿ではなかった。

けど俺が、林をこんな風にさせてしまったんだ。

莊野さんの言葉を思い出す。

『ああいうの、ポイント高いのよ』

「このコーナーを作る時も、すごく私のことを認めてくれたから。」

私、嬉しくて」

「ごめん」

「ごめん、だなんて」

林が手に持っていたバックを肩に掛け直した。

「いい。もう」

しばらく無言で俺たちは見つめ合った。

「もう、いい」

その言葉を残して、林はスタスタと俺に背を向けて歩き出した。

床に散らばった氷を屈んで拾い、紙コップに入れる。

喉を潤すはずだったアイス珈琲は、ズボンと床の上にぶちまけられていた。

「痛つてえ」

今ごろになって、林に叩かれた頬がジンジンと痛くなってくる。

「冷てえ」

おまけに、珈琲で濡れたズボンにクーラーの冷気が当たりだした。

胸ポケットに入れた携帯が、屈むたびにごそごと揺れる。

俺は、濡れていない左手を使い内ポケットから携帯を取り出した。

坂田のがっかりした顔が、目に浮んで消えた。

17話・真夜中のコンバンハ

「岬ちゃん」

朝食の珈琲にミルクをたっぷり注ぎながら港が言った。

港が「岬ちゃん」なんて呼んでくる時は、要注意。

今までの経験上ろくなことがないのは、わかっている。

「なあに？ 港クン。食費でも入れてくれるの？」

「あつ。痛いところをつくなあ。でも、それはそうだね。うん、払う」

「えっ？ 待ってよ、待ってよ。ってことは、まだいるわけ？ ここに」

私は三〇四日のつもりでいたのに、あれから港はずるずるとうちにいた。

「ああ、そうそう。そのことなんだけれど。あと一週間は、岬んとここにいてもいいかなあ」

「なに、その具体的な数字は」

港はへへへと笑っている。絶対に何かを隠しているわ、このコ。

「あつ。やべ。遅刻する！」

バタバタとデカイなりをした港が動き出す。

港がいると、部屋が狭く感じる。

港が緑色のキャップを目深に被り、スニーカーを履く。

「ほんと似合うね、そーいう格好」

わが弟ながら、感心してしまう。

「惚れるなよ、岬」

「ハイハイ。あつ、ねえ、港」

「ん？」

玄関のノブに手を掛けたまま港が振り向く。

「港って、今いくつだったけ？」

「二十七」

そう言つて茶色の顔一杯でニヤリと笑うと、港は夏の朝の光の中に飛び出していった。

「港は、二十七かあ。二十七でよかったんだ。そっか」

須藤君に聞かれて、咄嗟に答えられなかったので気になっていたのだ。

学年では二つ違うけれど、生まれ月のアレコレで年の差がいつも必ず二つとは限らなかったし。

つてことは、須藤君と港は同じ年なのね。

珈琲を飲みながら、ふーんと思う。

そう思いながら、机の上に置いてある物に目が留まる。

「鍵と携帯」

港のだ。

「あのコ、忘れていったのね」

馬鹿港。

私は仕事があるのに。一日中家にはいられないのに。

佐倉港クン、今日は締め出し決定でございます。

後で実家にも電話をしないとあと思う、ここが開いていなかったら実家に戻るかもしれないし。

溜息が出る。

あれで、二十七歳。

あの、スーツがよく似合うすっかり者の須藤君と港が、同じ年だなんて思えない。

「港には緊張感が足りないのよ！ 須藤君の方が港よりもずっとお兄さんに見えるわ」

そう独り言を言いながら、須藤君とお昼を食べたことを思い出したりもして、胸がズキンとした。

怒らせてしまった。

そう。須藤君の言うことは、それなりに筋は通っているのだ。
「問題は」

仁の顔が浮んだ。

「すべて私にあるんだわ」

手の中のカップの珈琲が、暗く深く揺れた。

港のことが気になったので、スーパーで買い物もせずに真っ直ぐ家に帰った途端、家の電話のベルがなった。

有加からだった。

「ええと。今日、これから？」

「うん。岬ちゃん、お暇？」

「えっと。実は、み」

港がここにいるなんて知ったら、また有加からお小言をもらいそうだと思った。

『岬ちゃんは甘やかしすぎ！』なんてね。

でもまあ、港だつてずっといるわけじゃないし。（あと一週間くらいのことらしいし。本人いわく）

だから、まあ、いいよね。言わなくても。

「ごめんね。今日は、無理なんだ」

「そっかあ」

そっかあ、だなんて、有加の淋しい声に心が揺れる。

「有加、何かあったの？」

「あのね。坂田さんとね、約束をしてたんだ。今日」

「あ、そう」

「楽しみにしてたんだけど」

「うん」

「キャンセルされちゃった」

「……えっ」

「坂田さん、仕事が終わらないから、今日はパスしたいって」

「……なるほど」

「で、暇になったの」

「ふーん、それは残念だったね」

なにか凄い理由があつてのことかとドキドキとしてしまったけれど、単に仕事が忙しいってことなのね。

「上手くいつてるんだ、坂田君と」

「うーん。多分？」

「多分なんて、弱気なことを言わないで。ね、大丈夫よ」
可愛いなあ、有加は。

「えへへ。実はね、今日さ。岬ちゃんトコの須藤君も来る予定だったんだ」

須藤君の名前を聞いてドキンとした。

「そうなんだ」

「三枚、飲み放題の券があつて」

「ふーん」

「もし、もしもさ、四枚あつたら岬ちゃんも来た？」

「飲み放題に？」

「そう、飲み放題に」

「……行かないよ」

「ふーん」

「行かないからね」

「ハイハイ」

「そうそう。『ハイハイ』なんだからね」

「ハイハイ、分かりましたよ。誘いませんよ。もう、岬ちゃんつてば、固いんだから」

「悪かったわね」

「まあ、いいや、そのことは。でもなあ、悔しいなあ、港に負けるなんて」

ん？

「どうせ港絡みのことで、今日は私は遊んでもらえないんですよ」

「……港がうちにいるの知ってた？」

「知らないわけないでしょ、岬ちゃん。親同士で情報がびゅんびゅん飛んでるっていうのに。ほんともう、岬ちゃんは呑気なんだから」

「それは、失礼しました」

「じゃあね、岬ちゃん。港にもよろしくね」

「うん、伝えとく」

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

有加が受話器を置く音が聞えた。

時計は六時を過ぎていた。

港からの連絡は、まだ無い。

録画をしていた映画を見ようとビデオをセットした。

港が来てから、港のペースで生活が回っていたのでゆっくりとこうして過ごす時間もなかった。

リモコンで再生ボタンを押す。

画面が切り替わり映画が始まった。

「ん？ 東宝？」

衛星で洋画を録画したはずだったけど。

『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』
は？

驚いてビデオを止めてカセットを出す。

見出しには、間違いなく私の字で、これから見る予定だった映画の題名が書かれていた。

「みいなあとおー！！」

帰ってきたら、ただではすまないから！

なのに、待てど暮せど、港は帰ってこない。

私の怒りマックスも、もう風の状態になってしまっていた。
十二時を過ぎている。

鍵を持っていればもう寝てしまうところだけど、実家にも戻っていないそうなので、そうもいかない。

まあ、友だちや彼女いればねの所に泊まっているのならそれでもいいけれど。

でも、日頃いい加減な割には、そこら辺のことだけは律儀に連絡してくる子だったから、だから気になる。

気になるけど、まさか港の携帯のメモリーを調べてまでどうにかするのは気が引けた。

と、その時。

突然、静かな住宅街に救急車の音が響いた。

心臓が縮み上がった。

もしかして。

サンダルをつっかけて玄関の扉を開ける。

扉を開けると、一段と救急車の音がよく聞こえた。

けれど、その音は段々と遠くの方へと消えていった。

だからって、大丈夫ってことじゃないけど。

でも、安心した。

真夏の真夜中。

近所の明かりも消えている。

昼間が暑かっただけに、涼しく感じる。

気持がよかった。

「ついでだから、マンションの前まで出てみようかな」

もしかしたら、どこからか港がテクテクと歩いて帰って来るかもしれないし。

そう思って、扉に鍵を掛けて、エントランスへと向かった。

ここは、少し古いマンションなのだけれど（だから、家賃もお安

かった)、エントランスはゆったりとしていて、感じがよかった。
集合ポストの横を通り過ぎ、表へ出ようとしたら、エントランス
へと上がる為の短い階段に誰かが座っているのが見えた。

ふ、不良？

不良なんて言葉、久しぶりに頭に浮んだわ、なんて思いつつ、そ
の人の背中を眺める。

あれ？ もしかして。

階段に座って頭を膝につけたまま(体育座り?)動かないその人
の横をそつと通る。

階段を、静かに静かに下りる。

その人は、顔も上げない。

自分以外の誰かがここにいてること、全く気がつかないみたい
だ。

マンション前の道路に立ち、左右をゆっくりと見渡す。
暗い道のどちらからも港は歩いてきそうにはなかった。

どうしよう。

港といい、階段に座り込んでいるこの人といい。

「……須藤、君？」

その人に声を掛ける。

寝ているのかしら？

「須藤君、だよな？」

寝ているのなら、大変。

夏だから凍死はしないだろうけど、風邪はひくかも。

「ねえ、大丈夫？」

私の声が聞えたのか、その人はゆっくりと顔を上げてきた。

そして、その二重な目をゆっくりと開け、焦点の定まらない目で
私の顔をじーっと見だした。

「……コンバンハ」

須藤君ってば、こんな状態なのに挨拶をしてきた！

こんばんは、だって！

「こんばんは」

なんか妙な会話だった。

でもこの先、これよりももっと妙な出来事が起こってしまっつて
ことを。

この時の私には、予想ができなかった。

18話・好きなんだろうなあ

やばいなあ、と思った。

すきっ腹に、これはくると。

「まあ、須藤。たまにはいいじゃないか」

あの後、残業を終えようやく帰れると思った俺に、同じ会社で大学の先輩でもある池野さんがそう声を掛けてきたのだ。

<ゴメン！ 朗。仕事が終わらん。今日の飲みは延期して！>

携帯のメールには、坂田からのこんなメッセージが入っていた。

林とのゴタゴタの後に、坂田に電話をしようとして気がついたものだった。

それなら、と冷たいズボンを穿いたまま（勿論、シミにならない様に水洗いはしたけれど）片っ端からガシガシと仕事を片付けていった。

そして、そんな俺に池野さんは声を掛けてきたのだ。

いつもだったら、そういう『飲み』のお誘いには一切乗らない俺だったが、疲れていて腹も減ってて、まあいいか、なんて思ってた。

それがまずかった。

「須藤。『十四代』は、飲んだことがあるか？」

池野さんは、そう言いながらあれこれと日本酒を俺に勧めだした。

そして、延々と奥さんの愚痴をこぼしだした。

すきっ腹に日本酒&愚痴。

これは、悪酔いのパターンなんではないかい？ と思いつつ、ま

あそくなったらそうなんだでいいや、とも思ってた。

もう、なんでもいいや、ってな感じになって。

で、今の状態。

俺は、池野さんの愚痴をひたすら黙って聞き（コメントする気力もなかった）、勧められる銘柄も全て飲んだ（断る気力もなかった）。

結果、池野さんはご満足されたようでお帰りアソバシ、残った俺は予想通り悪酔い状態。

帰り際に池野さんはあんだだけ愚痴った奥さんのことも「でも、可愛いところもなるんだよなあ」なんてフォローもして。

つまりは、もしかして、愚痴ではなく惚気だったのだろうか。

……迷惑。

非常に、迷惑。

やってられないなあ、なんて思ったあと、酔って重くなった足をただ前に出していくことだけに集中することにした。

足が前に出続ければ、必ず家には着くのだから。

……でも、それももう限界。

ペタンと座り込む。

なんとか、気力で帰っては来たけれど、見慣れた自宅マンションを見た途端に体がへなへなとなってしまった。

いつもは、歩いてしか通らないマンション入り口の階段に、へたりこんで座ってしまう。

ハイハイ、ワタクシ。

右から見ても左から見ても、立派な酔っ払いでゴザイマス。

全く、学生でもないのにこんなに酔って。

なあにやってんのおゝ、と自分で思う。

可笑しい。

笑える。

笑ってしまえ。

ハハハ、と笑うつもりが、口が上手く開かずにクククと籠ってしまふ。

それも、笑える。

ペタンと座ったコンクリートの階段から、ジンジンと冷たさが伝

わってくる。

熱くなつた体を冷やしたす。

きいもちいい。

明日は休みなんだし、このままここで寝るのも有りだよなあ、と思えてくる。

ところで、今、何時なんだろう？

住宅街のここいらは、十時過ぎると物音ひとつしなくなるから。

だから静かだ、すごく。

でもまあ、電車があつたってことは、一時は過ぎていないんだろ
うけど。

多分、ねっ。

とはいえ、電車を降りてから時間は随分と経っているのかもしれないし。

そうだ、時計を見りゃいいんだ。時計を。

なんて思ったら、いきなり救急車のサイレンの音がした。
びっくりした。

もしかして、俺の事を誰かさんが通報したとか？

っーことは、なんだ？　もしかして、俺ってばこれから救急病院
行きか？

家はココなのに、病院なんか連れて行かれちゃったりするわけ
？

笑える。

非常に、笑える。

笑い出したくなる。

「須藤、君？」

はあ？

救急隊員サンは、俺の名前をご存知なのか？

しかも、女かいな？

「須藤君、だよな？」

ゆっくりと顔をあげ、重たい目を開ける。

「大丈夫？」

黒豆。

なあんだ。救急隊員サンじゃないじゃないか。

これは、これは、黒豆オメメの佐倉 岬サンでしたか。

しかも、俺の顔を覗き込んでいたりして。

そーいや、サイレンの音は、どーした？

もう聞こえないなあ。

「コンバンハ」

とにかく、佐倉 岬に挨拶だけはして、また目を閉じる。

ご挨拶は、ご近所付き合いの必須事項。

こんな酔っ払いでもね。

「こんばんは」

ありやうや。

適当に流せばいいのに、佐倉 岬は、いつもの如く馬鹿丁寧に答えてくるし。

笑える。

笑っちゃうえ。

「須藤君、どうしたの？」

クククと、急に笑い出した俺に、佐倉 岬が焦ったような声を出してきた。

「笑える、と思ってさ」

笑える。

何もかもが笑える。

馬鹿正直に挨拶を返してくる佐倉 岬にも、俺を好きだと言った林にも、珍しい日本酒を勧めながら奥さんの愚痴だか惚気だかを話し出す池野さんにも。

そして、そんなものを全てがバカバカしいと斜めに見ている自分自身にも。

行き先をなくした、アノ生物にも。

もう、バカバカしくなっただけで笑える。

「もう、爆笑」

クククと、笑いが止まらない。

「須藤君、風邪引くよ。部屋に帰ろう?」

おーっ!

まだいましたデスカ、佐倉 岬サンは。

お節介女。

「部屋って何さ? 佐倉さんの部屋のこと?」

そう軽口を言って、再び目を開く。

目を開いて驚いた。

佐倉 岬の顔が至近距離で見えたからだ。

へっ? と一瞬正気に戻ってしまった。

と、いきなり俺の両脇に、佐倉 岬の両腕がそれぞれ入ってきた。

「須藤君。ほら、立って」

細い腕をした佐倉 岬が、俺を立たせる為に体を持ち上げようとしだしていたのだ。

うーん、仕方がないなあと思い、俺もよいしょ、と立ち上がった。
とした。

けど。

「れっ?」

自分が思うよりも、アルコールが体に回っていたようだった。
足が思うように動かない。

上手く立てない。

ゆらゆらよろよろとしながら、なんとか体を動かす。

そんな俺を佐倉 岬が支える。

「須藤君、歩ける?」

佐倉 岬が聞いてくる。

「多分」

多分、歩けるとは思っけれど。
体を横に向けられる。

「ほら、階段よ」

佐倉 岬の声に足を一步踏み出そうとした。

「わっ、わわわ」

けど、やっぱり『多分』は『多分』で。

俺は、佐倉 岬と一緒によろけながら、その場に再びしゃがみ込んでしまった。

で、しゃがみ込んだ俺の腕の中には、当然の様に佐倉 岬がいたりする。

華奢な体が、すっぽりと俺の腕の中に入っていた。

「ダメかも」

佐倉 岬を腕の中に入れたまま、俺はつぶやいた。

「今日は、ココで寝ます」

佐倉 岬の髪の毛の香りを感じながら、佐倉 岬の肩に顎をのつけたままで、そう言った。

そうだ、寝ちゃえ、寝ちゃえ。

丁度いい抱き枕もあることだし。でも、少し骨っぽいかも。

「だ、ダメよ！ ほら起きて！」

眠るモードに入った俺の気持なんて知るよしもない佐倉 岬は、必死な声を出しながら、俺をぎゅうぎゅうと持ち上げようとしている。

でも、非協力的な俺の体は、佐倉 岬にはどうも扱えないようだった。

「うーん。どうしよう」

しゃがみ込んだまま、佐倉 岬が悩みだした。

どうしてココでこの人が悩むのか、俺には全く分からん。

「馬鹿じゃないの、佐倉さん。俺を置いて部屋に帰ればいいだけじゃん」

そういえば、例の彼だって部屋であなたの事を待っているんじゃないの？

「それにさ。あなたはなんでこんな時間にこんなトコにいるのさ？」

」
抱き合ったような形のまま、佐倉 岬の後頭部に向かって話しかける。

「弟が」

オート？

佐倉 岬には弟がいるのか。

「弟が帰って来なくて、で、家にも帰っていないっていうから」
なんじゃそれ。

「佐倉さんの弟って、小学生？」

「そんなわけではないでしょ」

佐倉 岬の声も、俺の後頭部に響きだす。

「あのね、あなたの弟が高校生だか大学生だか知らんけど。赤ちゃん扱いしてんじゃないの？その『弟』とやらを」

そう言いながら、佐倉 岬が自分の彼のことを『あのこ』だなんて言ったことも思い出してしまった。

「佐倉さん、馬鹿にしてんでしょ。男のことを、なめてんでしょ」

ああ、脳みそがどんどん沸騰していくのがわかる。

「だいたいね。女が、こんな遅くに弟を探そうとこのこと出てきたり。酔っ払った奴にお節介を焼きだしたりってさ、非常識なんだよ。全く、何なんだよ、あなたは」

こんな俺の言葉に、佐倉 岬は、何も言わない。

「と言うか、一体何様のつもり？」

反応が無いのをいいことに、言いたいことをズバズバと言った。

でも、佐倉 岬は何も言わない。

沈黙が続く。

酔っ払いの戯言だと思っているのかもしれない、佐倉 岬は。

だから俺も、もう何も言わない。

佐倉 岬を腕の中に入れたまま。

佐倉 岬の肩に顎をのせながら。

あ、この間、テレビにこんなシーンが映っていたなあ、と思う。
井の頭公園が出てくる、女優の卵と画家のお話。

こうして抱き合って、声の響きで。……響きで、なんだっけ？

そう、何か言葉を言うんだ。

「そうよね。うん。そうだわ」

突然の佐倉 岬の声が、俺の体に響いた。

くつついていると、声は体の中にも響いてくる。

佐倉 岬の声が、俺の体に入って消化される。

消化されたその言葉に腹が立つ。

「前々から言いたかったんだけど、あんたの脳みそはトーフなのか？
なんでいちいち納得するんだよ。でもって、なんで俺は、こんなにむきになってあんたに」

佐倉 岬の肩から顔を離し、両腕を掴んで、そう言った。

って。

何を言おうとしてんだ？ 俺は。

全く、なにをムキになってんだよ。

『朗っていつも冷静よね』

『そうか？』

『そうよ。自分の進路だって。あんなに家具好き男のくせして、
全く関係ないところで働こうとしてるし』

『趣味より安定を選んだのさ』

『ふーん』

『なんだよ』

『私のことだってさ』

『吉岡のことって、何だよ』

『好きなくせに。私のこと。でも、私が『親友の彼女』だからって
何もしてこない』

『それは、何か勘違いだろ？』

『私は、そんなうぬぼれ屋じゃない。でも、そう思っただもん』

『仮にそうだと。どうして欲しいの俺に。俺はゴメンだよ。そうだったゴタゴタは』

『ゴタゴタ？ なによ、それ！』

『坂田と別れたいんなら、俺を使わないで自分でどうにかすればいい』

『要するに、自分が当事者になるのは、ごめんだってことよね』

『そうだよ。面倒なのは、ごめんなんだよ』

『そんなんで、朗は人生楽しいの？』

『楽しく暮す為に、そうしているんだろ？』

突然また、あの大学四年の時のやりとりが蘇った。

佐倉 岬と知り合ってから、二度目だ。

大学の時のあれも、確かこんな夏の夜だった。

だから、思い出すのか？

それとも、俺の心の何かがあ思い出を引き出すのか？

いつも外野でいようとする。

面倒くさいことには、足をつっこまない。

ゴタゴタの当事者にはならない。

いつも傍観者でいたい。

そんな風に、生きてきた。

今、俺の目の前にいるのは、『ご近所さん』で、『年上』で、しかも『男と一緒に住む』女。

日本全国探しても、面倒くささではベストテンに入るだろう。でも。

何故が無視できない。

適当に出来ない。

外野になれない。

彼女に対しては、何かとムキになってしまう。

好きなんだろうなあ。

俺は。

佐倉 岬のことが。

段々と酔いが覚めてきた頭には、どう考えてもその答しかなかった。

だから、自分と同じ年ぐらいの男を『あのこ』なんて言われて腹が立つし、男がいるのに俺にこんなお節介をやいてくる佐倉 岬にも腹が立つのだろう。

腹が立ちつつも、彼女の側にいたくて。

つまり、面倒な事になっても手に入れたいんだろう。
この人を。

「俺、部屋に戻るから」

佐倉 岬から手を離し、階段に手をついて、体をゆっくりと起す。

佐倉 岬の体温が、俺から徐々に離れていく。

なんとか立った体で、コンクリートの壁に寄りかかる。

佐倉 岬を見る。

佐倉 岬も立ち上がり、俺のことを見ていた。

「俺、あなたのことが好きだ」

素直な気持が、口から零れ落ちるようにして言葉になる。
そしてその言葉は、再び俺の胸の中にストンと落ちていき。
パズルの一ピースのように、心の真ん中にピタリと嵌った。

19話・二十九にもなつて

明け方近く、港は帰つて来た。
背中に、小さな男の子を背負つて。

「いいお天気」

ぼーっと庭を眺めながら思う。
みゆうの入った水槽は、日陰になるように少し動かした。
時折風に吹かれた葉の動きで、ちらちらと夏の日差しが水槽の水に光つては揺れていた。

あなたのことが好きだ

水面の煌きを見ながら、夕べの須藤君の言葉を思い出していた。
一人で立ち上がれもしない程に、彼のイメージには合わない程に、
ぐでぐでんに須藤君は酔っていた。

そんな人の言ったことなんて、本気にしちゃいけない。聞き流せばいい。

聞き流さなくちゃいけない。

それに。

そもそも、そんな言葉を私は受け取れない。

部屋のチャイムがなった。

一瞬、身構えてしまい、そしてそんな自分に呆れてしまった。

「岬ちゃん、私」

有加だった。

「ひゃあ、なにアノ状態」

有加は、ベットを見ながらそう言った。
確かにそう。

泥だらけの港と男の子が、洋服を着たまま私のベットに転がっているんだもの。

「ベットごと、洗濯機に放り込みたいって感じね」

有加が溜息をついた。

「本当にねえ」

港のすることには、本当に毎回毎回、溜息しかでない。

「あのこ、港の教え子くん？」

有加が聞いてきた。

「うん。多分」

きつと、以前ここで基地を作った男の子なのだろうと思った。

そんな気がした。

「私、お風呂作るわ」

有加に声をかけた。

きつとお湯も、どろどろになるんだろうな、と思いながら。

お昼は、有加が作ってきてくれたサラダと、うちにあるベーコンとブロッコリーを使ったパスタにしようと思った。

「もう作り始める？」

そう有加が聞いてきた時に、「……おはよ」と、港がぼーっとした様子で起きて来た。

「岬、なんか飲むもん」

「はい、はい、はい」と返事をしながら、パタパタとキッチンへと向った。

「バカ港、おはよう」

有加の声がした。

「ん。有加かあ。ちみもいい加減に岬離れしなさいよあ」

港の間延びた声が聞えた。

「その台詞。港だけには、言われたくない」

ブンと怒る有加の声がした。

冷蔵庫から出した麦茶をコップに注いで渡すと、港はそれをそのままイツキに飲み干した。

そして、「俺、風呂に入るわ」と言っ、そのまま浴室へと消えていった。

「……せんせい」

ベットから声が聞える。

「はいはい」

今度は、そちにパタパタと移動する。

「岬ちゃん、ご苦労様だわあ」

背中では有加の声を聞く。

「こんにちは」

ベットの上に寝ぼけ眼で座っている男の子に声を掛ける。

「先生はね、今お風呂だよ。君も入る？」

痩せて真黒な男の子が、じっと私を見ている。

「先生のお姉さん？」

探るような瞳だ。

「そうだよ、佐倉先生のお姉さんだよ」

私のその言葉に、どこか安心したような表情を男の子は浮かべた。

「色は似てないけど、目は似てる」

男の子が言う。

笑ってしまう。

「うん、そうだね。よく見ているんだね。じゃあさ、あつちで冷たい麦茶でも飲もうか？」

目で男の子を促すように、有加のいる部屋に視線を移す。

「こんにちは」

テクテクと私の後ろをついて来た男の子に、有加が声を掛けた。

「……こんにちは」

男の子も言う。

男の子も、私が出した麦茶をゴクゴクと飲んだ。

「おつ。吉成、起きたか。ちょうどいい、風呂に入れ」

泥の黒さの無くなった港が、ひよいと顔を出した。

「やっぱ風呂はいいなあ。こう、生まれ変わる感じがするよ。あつ

そうそう岬、吉成用にさＴシャツとか短パンとか貸してよ」

「はいはい」

「生まれ変わったんなら、少しは岬ちゃんに迷惑をかけるのを止めにしたら、『佐倉先生』。で、岬ちゃんは岬ちゃんで、返事に若さを感じられないし！」

もうしょうがないなあ、と言いながら有加が苦笑している。

「若さかあ。いいの、それはもう。有加サンに任せだから」

「えっ？ 私？ 若さなんて、ないよう。会社じゃさりげなく勤続年数長いほうになってきたし」

「おお。有加も、もう三十九か」

「バカ港。港の分のお昼は、ないからね」

「あつ、間違えた。有加。おまえ、今年十九だっけ？」

「それは、若すぎだつてば」

そんなおバカなイトコ三人の会話を、吉成君は不思議な顔をして見ていた。

「あつ。ボク、ビールが飲みたいでーす」

お昼ごはんを食べながら、突然に港が言う。

ビールって聞いて、思わずむせてしまう。

須藤君を思い出してしまったから。

「な、ないでーす」

「ごほごほとしながら、それだけ言った。

「うつしやゝ！　じゃあ、買いに行くぞ。岬」

人がまだ食べているのというのに、港が背中をボンと叩いた。

「もう、港ってば。そんなの一人で、」と言いながら港の顔を見ると。

「……ああ、はいはい。そうですかあ。この顔にピンと来たらってヤツですね。

「有加、ごめん。すぐに帰ってくるから」

「はいはい、ごゆっくり」

いつものことね、って感じで有加が言う。

「吉成君、あのおじさんとおばさんがいない間に、二人でおいしいアイスを食べようね」

そう言っ、笑いかける有加の顔を、吉成君は困ったように見上げていた。

「どうするの？　吉成君。港のクラスの子なんでしょ？」

コンビ二へと歩きながら港に聞く。

「うん、まあ。あ、そうそう。昨日は悪かったよ、岬に連絡もしないでさ。で、吉成の事だけど、今日もう一回、親御さんと会って話すから」

「はあ、と溜息出る。

「港さ。何があったか知らないけど。今は夏休みで、しかもあんな時間に連れ帰ってきて。いくらなんでも踏み込みすぎなんじゃないの、そのご家庭の問題に。港の関わる範疇を越えていると思うけど」

「どう考えても、おかしいと思った。

「……その範疇ってやつはさ、一体誰が決めるの？」
港がそう言った。

「誰って。一般的によ」

そう私が答えると、港は一度開きかけた口を閉じてしまった。

しかし、次の瞬間。

港は、妙なことを話し出した。

「岬が仁と付き合っていたとき」

は？ 私と仁？ この話にどう関係があるのだろうか。

「反対だった。だって、おまえ、仁といると、変だったもん」

港が歩きながら言う。

「変って」

「岬は、いつも仁の言葉で仁の気にいるように動いて。あんなの、絶対に変だと思っていた」

「……それは」

「気がつくと思った、ほっといたって岬は。そんなの変だって、そんな関係は変なんだってことに気がつくって。でも岬は、気がつかないで結婚までして」

体の温度がずっと下がるのが分った。

「俺たちは家族だけど、付き合っているのは岬と仁なんだから、そこは踏み込めないって思って。言うべきではないと思って。俺は、岬に正面きって何も意見をしなかった。自分の本当のところの言葉を何一つ言えなかった。でも、言えばよかった。範疇だとか、部外者だとか、そんな言葉で逃げないで、言えばよかった」

そう言って、港が立ち止まり振り向く。

「俺は、岬と仁が付き合うのは反対だと。結婚なんて、とんでもない」と

「港」

「今のあいつ、吉成を見ていると思い出すんだ、岬のことを。親の気にいる子どもでいよいようってがんばって、身動きが取れないあいつを見ていると、岬と重なるんだ」

どんと胸を突かれたような衝撃が走る。

「だから、今度は、吉成の力になりたい。岬の時は、俺は何もできなかったから」

港は、そう言っただけ、ふつりと黙ってしまった。

私も何も言えなくなってしまった。

そのまま二人して、クーラーががんがんに効いたコンビニに入り、
ゴロゴロと缶ビールをカゴに入れた。

お互い無言のままだった。

レジの前までスタスタと歩いて行った港が、突然くるつとこつち
を振り返った。

「金、忘れた」

港は、とつても心細そうな顔をしていた。

それは、昔から知っている、彼の表情だった。

「もう。バカね」

クスクスと笑いながら、私はお財布を出した。

「ごめん」

「いいよ」

「ごめん」

「いいってば」

そんなやり取りをしながら、お互い照れくさくて顔が見れなかつた。

私なんて、危うく涙まで出てしまいそうだった。

港の色々な気持が私の心に流れてくるようで。

そして、情けなくなつた。自分に。

港に、私のことでそんな思いをさせていたなんて。

心配はしてくれているとは思っていたけど、それは私の予想をは
るかに上回ることだったから。

……ううん。

心配をかけているって、本当に思っていたのだろうか。

周りの事に目がいかなくらい、私は自分のことで一杯一杯だつ
たんじゃないだろうか。

自分の事ばかり。

そうだ。いつだって、私はそうだ。

自分で決めて選んだ相手なのに、自分から逃げ出してしまった。

上手く生きられない。

二十九にもなって。

人に心配ばかりかけている。

夏の暑い日差しの中に身を置きながらも、体はやけに冷たくて、私は思わず腕を擦ってしまった。

けれど、擦っても擦っても、気持ちが悪いくらいに体は温まらない。

まるで体の中から冷気が生み出されているような、そんな不安を伴った冷たさが、私の体を取り巻きだした。

20話・暑い一日

暑いなあ。

暑い。

あつ。

あ？

がばつと音が出るような勢いで、体を起した。

頭をいじつて（ああ、風呂に入ってない）、床に散ばったスーツを見て（ああ、即クリーニングだあ）、次に。

佐倉 岬の驚いた顔を思い出した。

部屋の窓を全開にした。

洋服についていた煙草の煙で、部屋の中がヤニ臭かった。

洋服を纏めてイスに掛けて、そのままシャワーを浴びにいった。

なんじゃこりゃ、と膝小僧あたりを見ると、青あざができていた。

この年で、こんな作るかなあ。

がつくりときた。

思い出す。

ああ、これは確か階段の辺りで。

ああ、きつと、あのよろよろしていた時にだと。

はあ、と溜息が出る。

当然の様に、あの様子を全部見られていただろうなあ、と思う。

そんな失態の数々を思い出すと溜息は出るけど、あの時間をやり直したいとか消したいとは思わない。

覚悟は、出来ている。

佐倉 岬に好きだと言った。

それは、もう、自分でさえ逃げられない事実だから。

さっぱりとした髪をがしとバスタオルで拭きながら、冷蔵庫からミネラルウォーターを出した。

きんきんに冷えていたそれを、そのまま、でっかいペットボトルのままごくごくと飲んだ。

時計は、もう二時近くになっていた。

今日も暑い一日だ。

シーツやタオルを洗濯して、クリーニングに持っていくものを纏めたりしていたら、家が出るのが夕方近くになってしまった。

マンシヨンのエントランスに出ると、ばったりと佐倉 岬の従姉妹の有加ちゃん（だったよな？）に会った。

お互い目が合い、ぺこりと挨拶をした。

「お買い物ですか？」

有加ちゃんが聞いてくる。

「うん、まあ。あと、クリーニングに」

そう言ってスーツやYシャツの入った袋を持ち上げて見せる。

「マメですね、須藤さんって」

感心したような顔で、有加ちゃんが俺を見た。

「マメ、というか。自分でしないと、ねえ」

マメとか、そういう問題でもないと思うんだけど。

「あ、坂田さんから」

「はい？」

「昨日、須藤さんにも飲み会中止の連絡ってありましたか？」

「うん。携帯のメールに」

「そうですか」

「うん」

多分、有加ちゃんは昨日のことで何か気になることがあるんだろうなあ、と思いつつ、そう思っているのに聞いてあげない俺は嫌な奴かなあとも思う。

「あのさ。もしかして、昨日は佐倉さんの家に泊まっていたとか？」

「え？ 泊まってはいませんけど」

「そっか。いや。……そういえばさ。佐倉さんの弟ってさ、帰ってきたわけ？」

「はい、今朝、って。まあ、よく御存じで。もしかして、須藤さんにもそのことで御迷惑をおかけしたとか？」

「いやあ、まあ。そんなことは」

「ほんと、あのお騒がせ男ってば。散々岬ちゃんに心配をかけた拳句、朝帰りですよ。朝帰り！ しかも、もう、どろどろになつて。

もう本当にあいつは、いつまでたっても岬ちゃんに甘えて。岬ちゃん大好き人間だから」

そう言う有加ちゃんの顔を見て、俺は笑ってしまふ。

「そう言うつきみも、好きだよな。佐倉さんのこと」

「えへへ。ばれたか。そう。凄く好き。大好き。岬ちゃんの周りの人って、みんな岬ちゃんが好きなんですよ。ほら、岬ちゃんってお世話上手だし」

「確かに」

おせっかいは、佐倉 岬のDNAに染み込んでいるんだな。

「でも、岬ちゃんって自分の世話は人にさせないっていうか、本当の所を見せてくれないっていうか」

「本当のところ？」

「そつ。岬ちゃんは岬ちゃんを演じているっていうか」

ああ、なるほど。

でもまあ、多少なりとも人って言う奴は、佐倉 岬に限らずそんなところがあるんじゃないかって思うけど。

でもまあ、彼女はそう思っていないようだから、あえてそんなことは言わないけど。

「でも、どうして？ 須藤さん、どうしてそんなに岬ちゃんのことを聞くんですか？」

突然有加ちゃんが、大きな目をぱつちり開けて、俺の顔を覗いてきた。

この顔を見て、坂田や、佐倉 岬が彼女に敵わないのが少しわかった気がした。

真っ直ぐなんだなあ、彼女は。

「『岬ちゃんの周りの人って、みんな岬ちゃんが好き』なんだろう？ 生憎俺も彼女の上の部屋に住んでいる『周りの人』になっちゃったしね」

えっ、と有加ちゃんの目がひと回り大きくなった。

「つまり。そーいうこと」

自分に言い聞かせるように、俺はそう言った。

なんだか駅まで有加ちゃんを送る形になって、そのままクリーニングに寄って、珈琲屋に入った。

腹は減っていなかったけど、無性にインスタントではない、きちんといれた珈琲が飲みたくなったのだ。

「いらっしやいませ」

カウンターには、マスターがいて、その隣りにはマスターのいる珈琲の様子をじっと見ている小柄な女の子がいた。

たまに来るこの店は、珈琲も美味くて落ち着ける、いい店だった。

窓側の席に座って、のんびりと外を眺める。

眺めながら、ああ、とமாகくやることをやらないとなあと思った。

やること。

佐倉 岬の家に置いてもらっているアノ生物を、引き取りに行くこと。

あれを自分で引き取らないと、何も始められないと思った。
林に対しても、佐倉 岬に対しても。

しかし。

アノ生物かあ。

ああ、考えただけで、手の平に汗が滲んできた。

人って字を手の平に書くのは、こんなことにも有効だろうか、なんてことを考えていたら。

「えっ？ えっ？」

窓の外を、佐倉 岬の男が子ども連れで通り過ぎるのが見えた。

「ウソダロ」

思わず身を乗り出して、もう後ろ姿しか見えない二人を目で追った。

「子ども」

子ども？

待て待て。

ってことは、佐倉 岬の男は、子持ちってことか？

もしくは、佐倉 岬との間の子どもとか？

まあ、年齢的にも、ありえなくはないのだろう。

いや、しかし待てよ。

佐倉 岬のキャラクターからして、自分の子どもと（どんな理由があるにせよ）離れて暮すような感じには見えない。

まあ、世の中にはいろんな事情があるとは思っけど。

事情を抜きにすると、そうだと思う。

『どろどろになって帰ってきた』

いや、でも弟は小学生ではないって言っていた。

なんだか、妙な感じがした。

もしかして、俺は、何かを勘違いしている？

「お待たせしました」

この店の看板娘のマスターの孫が、珈琲を運んできた。

この珈琲を飲んだら。

カップに口をつける。

ほろ苦い深い味のする珈琲が、まるやかに喉を通っていく。

俺は、佐倉 岬に会いに行こうと思った。

21話・泣いてもいいよ

港と部屋に戻ったら、吉成君と有加は本当にアイスを食べていた。

二人そろって庭のほうに足を投げ出しながら、口の周りをチヨコ色に染めていた。

「亀、飼ってる？」

チヨコの髭をつけた吉成君が聞いてくる。

吉成君は網戸の向こうのみゅうの水槽を見ていた。 須藤君から預かっていることは言わない。

吉成君は、ふーん、と言ったあと、まるでみゅうに「おいで、おいで」をするかのように足の指を動かした。

「うちは。犬」

吉成君が言う。

「あら。そうなんだ」と知らない振りで私も答える。

「そういえば岬ちゃんって、生き物を育てるのが上手だね。まあ、この弟がいたら上手にならざるをえないっていうかねえ。あ、今、私の頭の中に、岬ちゃんが誰かさんの代わりに水槽や虫かごを洗っている映像が浮かんだわあ」

有加が「ねえ、佐倉先生」なんて言って港を見ている。

「ちえ。なんだよ」

身に覚えのある港が、ぼりぼりと頭を掻く。

港が途中で世話をしなくなった生き物は、結局私が育てることになっていたから。

カブト虫の幼虫や、めだか。

それこそ、亀だったこともあった。

「岬ちゃん、洗面所を使うよ」

アイスを食べ終わった有加が歯を磨きだした。

「俺は、電話を使う」

港は子機を持ってベットの部屋に入っていった。

「僕も、」

吉成君が、私の顔を見上げている。

「ん？」

「歯を磨く」

「うん、じゃあ、あのお姉ちゃんのあとね」

そう言って、食器を片付けようとしたら、吉成君にシャツを引っ張られた。

しゃがんで、視線を吉成君に合わせる。

「ない」

「え？」

「歯ブラシ」

「ああ、貸してあげるよ」

ほっとした表情が吉成君に浮ぶ。

岬と重なる。

ずきんと胸が痛む。

「さっきの、喧嘩？」

吉成君が言う。

「さっきの？」

「『バカ港』って」

ああ、さっきの有加の言葉ね。

「喧嘩じゃないよ。うーん、なんていうかなあ。仲良しだと、あんなことを言っても大丈夫な時があるのよ」

「先生のお姉さん、言う？」

「うーん、言うよ」

……誰に？

言ってた、私？

仁に、あんなこと言えてた？

岬は僕が好きなんだろう？　好きだから、僕の氣にいるような人間になりたいんだろ？

僕に愛されたいんだろ？　だったら、僕が氣にいる女になるように努力をすればいい。

好きだった。

懂れて。

少しでも仁に近づきたくて。

だから努力して。

仁に好かれる人間になりたかった。

もう一緒に暮せないって、どういう事だよ。一体、何年間一緒にいたと思っっているんだよ。

結婚して一年を過ぎた頃から、私は体調がおかしくなってしまうた。

でも、親にも病院の先生にも、仁のことは話せなかった。

自分が悪いからこんなことになるのだと思った。

こんな風に、自分の好きな人の希望に添えないのは、自分が悪いからだ。

自分が悪いんだから、もっと、がんばらないと、って。

がんばって、仁の望む私にならないと、って。

もっと、もっと、がんばらないと。

もっと。

もっと。

もつと。

努力が足りないんだよ。辛抱が足りないんだよ。
僕のことを愛しているんだろ？ だったら岬が、もつとが
んばらないと。

そんなに甘ったれたことを言っで、いい大人が恥ずかしく
ないの？

……でも。

苦しくなってきた。

仁との生活が。

そして、一体今までどうやって仁と付き合ってきたのだろうと、
自分でも考えるようになった。

そして、私は気がついてしまった。

仁と結婚する前は、仁と一緒にいない時間で、自分の気持のバラ
ンスを保っていた、と。

でも、結婚して。

生活の全てに仁が絡んでくると。

もう、何一つ自分で決められないくらいに仁が私の中まで侵食
してきた。

息も出来ないくらい、仁の側にいるのが苦しくなってしまった。

別れたいだつて？ そんなこと、今更よく言えるよな。

結局、おまえは自己中心なんだよ。散々、僕のことを振り

回して。

おまえの事は、……許さない。

全身から冷汗が出てきた。

ガクガクと体が崩れ落ちる。

涙も。

コントロールが効かずに、出てしまいそうになる。

「先生のお姉さん？」

吉成君のいる前で、こんなになっちゃだめなのに。

子どもに、こんなところを見せちゃだめなのに。

必死で涙を堪える。

すると、ふいに。

小さな温かな手が、私の頭にのった。

そして、ゆっくり、ゆっくりと動き出した。

かろうじて流れずに溜まった涙の向こうに、吉成君の顔が見えた。

「泣いてもいいって、先生が言った」

「えっ？」

「お、お父さんもお母さんも。『泣いちゃいけない』って。『我慢しなさい』って。でも、先生は泣いてもいいって言った。痛いときや悲しい時は、泣いてもいいって」

「うん」

「先生もよく泣いたって。転んで泣いたりしてたって。泣くのは、恥ずかしいことじゃないって」

さつきから単語でしか話しをしなかった吉成君が、顔を真っ赤にしながら私に一生懸命に話し掛けてきてくれる。

小さな吉成君が、気持ちの全部で私をなぐさめようとしてくれている。

大人だとか、子どもだとかそんな垣根を全部なしにして、今吉成君と私は同じ目線で同じ場所に立っているんだ、と強く感じた。

人って、凄い。

温かい。

ありがたい。

そして、その吉成君の言葉で、私は港の小さい時のことも思い出していた。

港は、転んでは泣いて。

喧嘩して負けたといつては、泣いて。

いつもどろどろの顔で泣くもんだから、涙の流れた縦の線が顔にできていて。

それが可笑しいやら、でも笑うとまた泣くからって、ぐっと我慢して。

「うん。港なんて、泣かない日はないってくらい、よく泣いていたよ」

自然と顔が、ほころんでくる。

「先生は、たくさん泣いたから。だから今は強いのかな」
港が強い？

「強いのか？ 港って？」

こっちが驚いてしまった。

「だって泣かないもん」

あはは、と思う。

そっか。

そうかもね。

「だから。先生のお姉さん、泣いてもいいよ」

「えっ？」

「痛そうな顔だった」

「痛くないよ。どこも」

「平気？」

「平気だよ」

吉成君のはにかんだ笑顔に答えるように、私も笑ってみせた。

「あれ？ 岬。どっか痛いのか？」

子機を持ったままで港がこっちに帰ってきた。

「なんでもないよ。大丈夫だよ」

「お待たせ〜！ 岬ちゃん、洗面所ありがとう」

口の周りのチョコも、はげかった口紅も綺麗に直した有加がひよこつと顔を出した。

「有加。次、吉成君が使うから」

バタバタとする中で、ストック用に買ってあった歯ブラシを吉成君に渡す。

「ほら、吉成君、こっちにおいでよ」

有加が呼ぶ。

てくてくと吉成君が洗面所に向って歩き出す。

その様子を見ながら港が「これから親御さんところに、吉成を連れて帰るよ」、と言った。

有加が帰り。

そして、港が吉成君を家に送っていった。

賑やかだった家が、とたんに静かになった。

「さてと」

庭に干していた洗濯物を取り込み始めた。

「あらら」

小さな真四角の、吉成君のハンカチが残っていた。

吉成君の服は、あつという間に乾き（布が少ないせいだと思っけど）結局彼はそれを着て帰った。

だからこれは。

「忘れ物だあ」

ピンポン

チャームになった。
港だと思った。

「はいはい」

このハンカチを取りにきたのね、と、ドアを開けた。

『やあ、悪い悪い』って言いながら、港がそこに立っていると思
った。

「こんにちは。こんばんは、かな」

だけどそこには、港ではなくて。
須藤君が立っていた。

22話・嘘じゃないから

思いがけず勢いよく扉が開き、笑顔の佐倉 岬がそこにいた。

「須藤君」

俺の名前を呼ぶと、佐倉 岬の表情は強張^{こわば}った。

「確認もしないで、扉を開けるのは危ないと思いますけどね」

その表情に少し傷つき、強い口調でそんなことを言ってしまった。

「そうよね。須藤君だとわかっていたら、開けなかった」

佐倉 岬も、そんな台詞を言った。

それは、上等。

「あなたに預かって貰っていたものを取りにきたんですけど
その言葉を一気に言う」

そう言わないと、最後まで言えない気がしたから。

「えっ？ 持ち主さんが、取りに来てくれたの？」

驚いたような佐倉 岬の声だった。

「残念ながら、それはもうないかな」

無いだろう、きつと。

「でも、須藤君は」

心配そうに佐倉 岬が言う。

「まあ、そうだけど。でも、そうしないと」

人に預かって貰ったのが、そもそもの間違いだったのだし。

「わかったわ。で、ええと」

佐倉 岬の視線が部屋の奥へと注がれる。

「じゃあ、持ってくるからここで待ってて」

そう言っ佐倉 岬は、俺に玄関内で待つように言った。

自分の部屋と同じ造りの部屋。

造りは同じでも、どこか違う空気を感じる。

佐倉 岬のパタパタと歩く音とガラス窓を開ける音が聞えた。

部屋の中を見ないようにと、視線を下のほうにしていた俺の目に、

佐倉 岬の足が見えた。

小さな水槽と小さな紙の手さげ袋を持った佐倉 岬が俺の前に立っていた。

俺はまともにその水槽の中が見られず、誤魔化すかの様に今度は斜め上を見上げた。

その瞬間、ガランとした佐倉 岬の部屋が見えた。

家具らしい家具が、一切ない部屋だった。

「須藤君？」

佐倉 岬が俺に声を掛けてきた。

「あつ。じゃあ、すみませんがその床に置いてくれますか。自分で持つんで」

そう言いながら、これからの自分の取るべき行動を想像して、やはりいくらいに手の平に汗が滲み出てくるのがわかった。

まさか、汗で水槽が滑るなんてことは、ないだろうな？

「私が、運ぶわ」

佐倉 岬の言葉に驚く。

「いいよ、佐倉さん。自分でやるから」

「須藤君の意地だけで運んで、万が一水槽が落ちたりでもしたら、みゆうが可哀相」

そう言われると、なにも言えない。

「須藤君の部屋まで、私が運ぶから」

佐倉 岬がそう言いながらサンダルを履いた。

「……お願いします」

ああ、本当に。

佐倉 岬の前では、何一ついいところなしって感じの俺だった。

玄関まで運んでくれた佐倉 岬に礼を言った。

この先は（予定としては、みゆうにはベランダに行ってもらう予定）、気合でどうにかするしかないだろう。

帰っていかうとする佐倉 岬に声を掛けた。

「弟さん、帰って来たって？」

少しでも、なんでもいいから話しをしたいと思った。

「そう、明け方近くに帰って来たの。御心配をおかけしました」

固い表情で佐倉 岬が答えた。

「もしかして、子どもを連れて？」

「一か八かでカマをかける。」

「えっ？ どうしてそれを？」

佐倉 岬が、黒豆のオメメを一杯に大きくして驚いている。

「さっき。小学生の男の子を連れて歩く、『佐倉さんの弟』を見かけたから」

「ああ。うん、そうなの。あの男の子は…ちょっと知り合いの子で」

弟。

彼は、佐倉 岬の男じゃない。

「あはは」

ああ、勿論。

男がいようが、どうにかするつもりだったけど。

でもやっぱり、いないに越したことはない。

佐倉 岬が、俺のことをどう思っているのかわからない状態なのに、それでもやっぱりほっとしてしまった。

「どうしたの？ 須藤君」

佐倉 岬が、突然笑い出した俺を見て驚いている。

「いや、ごめん。ほっとして」

そして、また笑ってしまった。

「もしかして、弟のことを、そんなに心配してくれていたの？」

申し訳なさそうな顔をして、佐倉 岬が俺を見る。

「そういうわけではないけれど」なんて、正直に答えてしまう。

佐倉 岬は、俺のその言葉にどう返していいのかわからないような顔をしていた。

そして自分の部屋に帰るタイミングをどう切り出したものか、という頼りなさげな様子で、俺の前に立っていた。

自分の瞳の中に、佐倉 岬がいる。

それがとても、くすぐったい。

本当に、なんて俺の体は正直なんだろう、と思う。

目の前にいる人が、佐倉 岬だってことだけで、気分が浮かれてしまうなんて。

でも、もつと求めてしまう。

自分の瞳に佐倉 岬が映るように、彼女の瞳にも自分を映して欲しいと。

……坂田以下、だな。

「昨日、俺が言ったことは、嘘じゃないから」

佐倉 岬がギクリとした表情になる。

「ああ、昨日じゃないか、あれは今日だったかも」

「……私。す、須藤君には、何も言われてませんから」

そう言つて、俺をきつと睨むと、佐倉 岬は外階段を駆け下りていった。

サンダルのペタペタした音が間抜けに響く。

「じゃあ、また言いに行くから」

外廊下から一階を見下ろしてそう叫んだ。

階段を降りきった佐倉 岬が、びくんとしてこっちを見上げ、そして泣きそうな顔で部屋へと入って行った。

23話・大嫌い

なんだろう。

私って、なんだろう。

どうして、須藤君の言葉や仕草に気持ちがいかに揺れてしまうんだろう。

十時近くになって、港が帰ってきた。

「ただいまあ」

はあ、と溜息をつきながら港が床にぺたんと座った。

「お帰り」

私も、はあ、と溜息をついた。

「あれれ？ 岬、なんかあったの？」

港が私の顔を見上げてきた。

「ないです。何も」

でも、溜息が出てしまう。

「あのさあ。吉成んとこさ」

「うん」

「まあ。うん。ようやく、親御さんと俺とで目線が同じになれるよ
うなあ、なれないような、ってまあ、そんな感じかな」

「うん」

「そんな、直ぐにどうのってことはできないからね。今までのこと
もあるわけだし」

「うん。そうだね」

「岬のところに行ったのもさ、吉成のこともあつてのことだったんだ
けど。実家だと、ほら。こうはいろいろと動けなかっただろうし」

「そうね。うん」

確かに、それは港の言う通りだと思った。
実家にいたら、両親にもあれこれと説明しなくてはいけないこと
になっていただろうから。

吉成君のことだって、泊めるなんてことは出来なかったかもしれない。
ない。

庭から風が流れたきた。

それとともに、チリリといつもの風鈴の音が聞えた。

港に「ビールでも飲む？」と聞いたら、にかつと笑った。

冷蔵庫から冷えたビールを出して、姉弟二人して、床に座って飲
んだ。

「スドー君、見かけたわさ」

港が言う。

「喫茶店にいた。あちらさんが気がついたかは不明だけど」

港が私の顔を覗き込む。

「あいつ、岬のこと好きだろ」

ぼそつと港が言う。

私が返事をしないのを知っていて、疑問文では訊いてこない。
確定している事実を話すように、言ってくる。

「で、岬もスドー君が気になる、と」

「違う」

違う。

「須藤君なんて、気になってなんかない。むしろ、嫌いよ」

そう。

嫌い。

大嫌い。

「ひょ。初めて聞いた」

「なにをよ」

「岬が、誰かを嫌いだなんて言うの、初めて聞いた」

「嘘よ。そんなの」

「嘘じゃないよ。俺なんて嫌いな奴は結構いたからさ、いつもそんなこと言っていたけど。岬なんて『みんなイイヒトよ』なあって言ってるさ」

「そんなの、覚えてない。もう、いいよ。止めようよ、こんな話は」

「へえ。ふーん。じゃあ、止めるけどさ。ま、とにかく俺は、明日家に帰るわ」

えっ？

「な、なんでよ」

「はあ？」

「港、そんな。なんで今なのよ。そんなに突然に、帰るなんて言わないでよ」

そう言いながら、自分でも何を言いだすんだろう、と驚く。

私は、港を早く家に帰りたいって思っていたはずなのに。

「お願い。港、帰らないで。もう少しだけいてよ」

「岬」

「港がいてくれないと、私。……私」

「スドー君に、落ちちゃう、って？」

「ば、ばか。そんなんじゃない」

「そんな顔してるよ、岬ちゃん。いいじゃん、落ちれば」

「何言っているの。港、一体、何を言っているのよ」

「ん。岬さあ」

そう言いながら、港がゴクゴクと水のようにビールを飲んだ。

「落ちる時は、落ちるんだよ。人の気持ちってやつはさ。好きなんて気持ちは、頭で考えてこねくり出すものじゃないだろ？」

「違う。私は、須藤君なんか」

「好きじゃない？」

「そうよ」

「ふーん。まあ、どうでもいいけどね」

「なによ。そんな投げやりな言い方をして」

「いや、そろそろ夏休みも終わるなあ、と」

「突然。何が言いたいんだか、意味がわからない」

「岬には、きつとわからないよなあ」

「港！」

港はそう言うのと、残りのビールを飲み干した。

「岬のところに来たのは、吉成のことだけじゃないんだ」

そう言うって、空になった缶をペコペコとへこまして音を出しだす。

「逃げたんだ、俺も。親から」

「港」

「ほら、うちのオヤジさんも教師やってるだろ？ だから、ぶつか
るんだ。俺と、さ」

父は私立の高校で教師をしている。

「なかなか、意見が合わなくてさ」

港が缶をへこます手を止めた。

「でも、吉成が。小学生の男の子でも、自分の親と向き合おうとし
ているのに、俺が逃げててどうするってね」

そう言うのと、港は立ち上がった。

「場所から逃げてても、人からは逃げられないんだなあ」

独り言のように、港は言った。

「つまり、そーいう訳で。俺は、明日帰るから」

そう言うのと、そのでっかい体をのそのそと動かしながら、港は缶
をゴミ箱に捨ててに行った。

帰るんだ。

港は、家に。

もう、自分で世話を出来なくなったカブトムシを私に預けていた
港じゃない。

なんでも、私に頼ろうとする港じゃない。

場所から逃げても、人からは逃げられない。

その言葉は、港自身への言葉でもあり、吉成君に対しての言葉でもあり。

そしてなによりも。

私に対する言葉でもあった。

24話・情けない

狐につままれる、というのはこんな感じだろうか。

会社に着いたら、机の上にFAXが置いてあつて、散々見積もり金額をごねていた業者からこっちの希望額での見積書が届いていた。

見積書だけ。

普通、送り状とか付けるだろうが、と啞然としたが、まあ送り状が付いていたって金額が高いよりは、なくても安いほうがいいに決まっている。

……しっかしなあ。

なんて思っていたら、今度は昼休み明けに、相澤が社内の男と付き合っているらしいなんてことを、小川さんが言ってきた。

「なんでも同級生とか。一緒にいるところを、誰だかがばったり会つて、で聞いたとか」

いいなあ、結構カツコイイ男の子らしいのよね、なんて小川さんが言っている。

「ん？ 社内の男？」

確か、以前社内恋愛のことで相澤とは話したことがあつた。

その時は、丁度俺とカモフラージュで付き合つかとかなんとかそんな話が出ていた時だったから、てつきり俺とのことかと思っただけ。

ふーん、そう。同級生。意外とやるなあ、相澤。

ともかくそんなんで、なんだかんだということが、あれよあれよと、つまり先週末までのごちゃごちゃが、一気に丸く収まりだしたのだ。

そんな中、林のことが気になった。

会社を休んでいたのだ。

「今朝、会社に電話があつて。体調が悪いらしくて」

林と同じ部署の女の子がそう教えてくれた。

家に帰る足取りが重い。

あの生物がいるかと思うと、理性では割り切れない、へこんでしまふ感情が湧いてくる。

水槽は、ベランダに運んだ。（布をかけて見えないようにして）餌も、箱から出して、勘で水槽に入れた。（餌のパッケージは見ないように）

遠巻きで、水槽の様子を見ると、なにかしらが蠢いていたので、多分あの生物はこの週末も変わりなく元気だったと思う。多分。

「あ。スドー君！」

マンシヨンのエントランスに入るなり、声を掛けられた。

「こんにちは」

佐倉 岬の弟だった。

やけにでっかい荷物を持っている。

「丁度よかった。スドー君の家の鍵、預かっててさ」

そう言つて、佐倉弟はポケットから俺の部屋の鍵と思われるものを出した。

「今さ、スドー君の彼女が鍵をポストに入れようと苦労してて、で、通りがかつたボクが成り行きで預かりました」

佐倉弟の日に焼けた手の中から俺の手に、その鍵は渡った。

「ありがとうございます」

林が持つて来たんだと思う。

でも、なんでわざわざ？

「あとさ、水槽を持ってたんだけど。あれは、なんか見覚えがあるような」

水槽？

「すみません、ちょっと急いでいるので。鍵、本当にありがとうございました」

佐倉弟に礼をして、俺は外階段を駆け上がった。

手の平にある鍵で、部屋の扉を開ける。

そしてそのまま、ベランダ側の窓のカーテンを開けた。

水槽は、無かった。

反射的に、机の上も見た。

メモも手紙も、何もなかった。

そのまま、脱力して俺は床に座り込んでしまった。

ひんやりとした床の冷たさが布越しに、足に伝わってきた。

ほっとしたような、でも、そんなことを感じてしまう自分が情けないような。

なんともいえない感情の中、俺はしばらくそこを動けなかった。

25話・私、苦しかった

港は家に帰った。

一瞬私も、いつそこから引越してしまおうか、なんて考えたりもした。

でも、そんな時。

港を思った。

吉成君を思った。

私も、話さなきゃいけないと思った。

須藤君と。

そうは思っても、いざ須藤君のところに行こうとすると、気持ち揺れてしまった。

自分からわざわざ須藤君の部屋に行くのも、考えれば考える程に自意識過剰な行為なんじゃないかって思ったり。

須藤君にとっては、「好き」だとかそんな言葉は、とても簡単な意味なのかもしれないって思ったり。

でも。

また何かの機会に須藤君から爆弾のような言葉を落とされるくらいなら、自分から出向いてこの話を終わりにしたほうがいいと思った。

玄関を出てそのままの勢いで、外階段を上がった。

上がったはいいいけど、また須藤君の部屋の前で、立ち止ってしまっただ。

須藤君に会うのを、躊躇してしまう。

そして、そんなことで迷っている自分に笑ってしまう。
自意識過剰な女だとか、突然来て非常識なヤツだとか、むしろそう思われて呆れられて嫌われたほうがいいのに、心のどこかで、そんな風に思われたくないって思う自分がいるのだから。

「佐倉です」

インターフォンに向って話す。

うちと同じ色をした須藤君の部屋の扉が開く。

Tシャツに、ジーンズ姿の須藤君が扉を開けた。

「こんばんは、あの。須藤君にお話しが」

膝の辺りが、がたがたと震えるのがわかる。

こら、しっかりしろ！ と自分に言う。

「話し、ねえ」

須藤君が دونالد 口 に意地悪な笑いを浮かべながら、「話してもいいけど。どこで話すの？」と訊いてきた。

……確かに。

『話す』なんてことだけを思っただけでここまで来たけれど、どこで話そうかなんてことは考えていなかった。

でも、須藤君の部屋に来たってことは。

というか、当然の様に須藤君の部屋で話す気でいたのだけ。

「まさか佐倉さんのことだから、無防備にも俺の部屋で話すなんて思っただけじゃないだろうね」

凶星。

凶星だけど、だからこそ。

「そんな、そんな意地悪な言い方をしなくてもいいでしょ！」

私は、須藤君に怒鳴ってしまった。

こんな状況で。

それを見て、須藤君が笑う。

「それでこそ、強気な佐倉 岬さんだね」

須藤君が、靴を履きだす。

「じゃあ、公園にでも行こうか。あのコンビニの側の」
ついでにビールでも買うかなあ、なんて須藤君が言った。

夜道を須藤君と歩く。

思えば須藤君とは、ここに越してきてからよく一緒に歩いたと思う。
う。

まだ、会ってそんなに時間は経っていないのに、彼の後ろ姿を私の瞳は既に覚えていた。

こうして歩くと、『懐かしいな』なんて気持ちも湧いてきた。
知り合ったばかりの人に対してこんな気持ちになるのは不思議な気がした。

そして、須藤君と一緒に歩くことが、ちつとも嫌じゃない自分にも気がついてしまった。

港の言う通り、私は須藤君が気になるんだと思う。
でも、気になったところで、なんだと言うのだろうか。

おまえを許さない。

仁の声が聞える。

そうだ。

私は、誰かに近づく資格はないのだ。

こんな、私みたいな自分勝手に我儘な人間は、人に好意を持つこと自体が許されないことなのだ。

なのに、よくもそんなことが思えたものだと思う。

公園の側に来ると、茂った木の青い匂いがしてきた。
公園の向い側には、いつものコンビニが見えた。

「なんか、飲む？」

須藤君が聞いてくる。

確か、須藤君はビールが飲みたいって言っていた。

「うん」

二人で、夜のコンビニに入っていた。

夜のコンビニに入るたびに、その灯の明るさに目がつぶれてしま
いそうだと思う。

「あ、須藤さん？」

すらりと背の高い綺麗な女の子が、ヘーゼルナッツの様なその瞳
を私たちに向けてきた。

彼女は、Ｔシャツに七分丈のパンツをすっきりと着こなしていた。

「あれ、相澤さん。何してんの？」

須藤君も驚いている。

「私は、何て言うか。……買い物ですが」

ももごと顔を赤くしてしゃべる相澤さんの後ろには、痩せた背
の高い男の子が立っていた。

「こんばんは」

その男の子が、須藤君と私の顔を見て挨拶をしてきた。

その礼儀正しい挨拶の仕方に、初対面にも関わらず思わずこちら
も「こんばんは」なんて答えてしまった。

「ええと。あれ？ 確か君は」

「今年入社しました、阿久津です」

男の子がそう答えた。

「ああ、なるほどね。ハイハイ」

須藤君が面白そうに笑った。

「君たちの家って、この側なの？」

須藤君が聞く。

「はい。この先の方で」

男の子の説明によると、どうやら彼らはこのコンビニを挟んで私たちは反対側の街に住んでいるようだった。

同じ会社の人なんだ。

須藤君から渡された名刺を思い出す。

ここにいる三人は、同じ名刺を持つのだろう。

それは、有名企業のもだった。

この場所にいる四人目は、私じゃないと思った。

「彼女は秘書なんだ。で、彼は新人くん。噂では、同級生だとかいうことだけだね」

コンビニから出て、公園に入りながら須藤君が言う。

有名企業の、絵に描いたようなカップル。

須藤君も、『そこ』にいればいいと思った。

「座る？」

木の細長いベンチを指して、須藤君が言う。

私が頷くと、須藤君が先に座った。

私もその隣りに、少し離れて座った。

ベンチに座ると、鬱蒼と茂った樹木の間から微かに星が見えた。

「ああ、星かあ。東京も、昔はもう少しよく見えたよな」

「……そうね」

昔ってことは、須藤君も東京で育ったのかなあ、と思った。

そんなことすら私は知らなかった。

須藤君にしたって、私のことなんて何も知らないんだと思う。

なのに、気持ち近づいてしまった。

落ちる時は、落ちる。

そうなのかもしれない。

理屈ではない。

そうなのかもしれない。

「で、話して？」

須藤君が、ビールの缶を開けながら聞いてきた。

「あ。うん。……私のことなんだけど」

そう言いながら、私はペットボトルのお茶を両手で握り締めた。
手が、その周りについている水滴で濡れる。

「佐倉さんのこと？」

不思議そうな顔で須藤君が私のことを見た。

「佐倉さんのことって。聞いてどうすんの」

須藤君が言う。

えっ？　と思う。

聞いてどうすんの、なんて。

「だから、聞いてどうするのか？　って聞いているんだけど」

まさか、そんな反応が返ってくとは思わなかったので、私はなんて答えていいのか分らず、口は開いているのに言葉が出なかった。

聞いてどうするのかって、そんなこと聞かれても。

「ただ、須藤君に聞いてもらいたい、というか」

やっと、それだけ私は言えた。

「ふーん。じゃあ、ただ聞けばいいんだ」

須藤君がビールをごくつと飲んだ。

ただ聞けばいい。

確かに、私もそう言ったけど。

なんか、変じゃない？

この会話って。

だから、ええと、つまり。

「あ、つまり、私の話を聞いてもらって、」

「それで？」

挑戦的な瞳で須藤君が私を見る。

それで、って。

『それで』、私はこんなだからもう近づかないで欲しいなんて言うのは、それを言葉に出すのって、やっぱり高飛車なのだろうか。

ああ、でもいいのよ。いいの、それでも。

高飛車でも、自意識過剰でも。

とにかく、話さないと。

「佐倉さんが何を言いたいのかわからないけどさ。聞く前にひとと言言っておくと。俺、別に佐倉さんのことで何を聞いても、この間言った気持ちは変わらないから」

そう言つと、須藤君は腕を組み足まで組んで、「さあ、どうぞ」なんて芝居がかった仕草をした。

全く、須藤君って。

本当に、嫌なやつ。

そう思つて、その彼の横顔を見た。

でもその須藤君の横顔は、その表情は、私が想像したものとは違い、とても硬かった。

それを見て、私が思うより彼は余裕がないのかも知れないと思つた。

私の視線を感じたような須藤君がこっちを見て、二重の綺麗な瞳で『なに？』と聞いてきた。

私はその須藤君の瞳を見ながら、口を開いた。

「私ね、離婚したばかりなの」

静かにはつきりと、その言葉を告げた。

「なるほどね」

須藤君も私を見つめたままそう言った。

なるほどね。

そんな須藤君の答えに、私はドキドキとした。

「話すことって、それでいい？」

須藤君がそう言う。

「そんな。それでいい、だなんて。なんで。なんでそんな簡単に、そんなことが言えるの？」

そんな簡単に。

『なるほどね』なんて言葉を。

『それでおしまい？』なんて言葉を。

何もかもわかったかのような、そんな言い方をして。

「そう聞こえた？ 別に、俺、簡単にそう言ったわけじゃないよ」
そう言うて、須藤君は空を見上げてビールの缶に口をつけた。

「『なるほどね』って言ったのは、俺の中にあつたあなたへの色んな疑問が解決されたからだよ」

そしてまたごくごくと須藤君はビールを飲んだ。

「佐倉 岬って人の無防備さとかいろいろ感じからしてさ、あなたの人生に男がいらないわけがないと思っていたから。なのに実際は男つ気はないし、合コンにも乗り気でもない。それに加え、あなたの従姉妹。合コンであなたが一番人気って聞いた時の従姉妹の嬉しそうな顔」

須藤君が、私の方を向きなおした。

「普通、同性の従姉妹が自分よりも人気があつたって知って、そこまで素直に喜べる人はいないでしょ。まあ、彼女のキャラっていうのもあるだろうけどさ。ともかく、彼女からはあなたを誰かとくっつけたような空気が出ていたわけ。だから、離婚したばかりと聞いて『ああ、なるほどね』って思ったわけ。おわかり？」

おわかり、と聞かれれば、そうだとしか答えられない。

こんな風に私の言ったことを受け取る須藤君に対し、この先私は自分のことをどう話せばいいんだろう。

彼は、須藤君は、私が思っているよりも、私のことを知っているのかもしれない。

須藤君は、私が今までどんな風に育って暮らしてきたかなんてことは知らなくても。

そんなことを、私の一切のそれを知らなくても、私の行動や言葉の中から今のそのままの私を見ていてくれたのかもしれない。

そう思いながら、「人が人を知る」という意味の中に、単なるデータ的な要素を「知る」だけで「知っている、知らない」と表現してしまうことがいかに多いかってことに気づいた。

何処で生まれて、学歴はどうだとか。

全くそれのないところで、彼は私を見ていてくれたのかもしれない。

「そんなことを須藤君に言われたら、この先何を話したらいいのかわからなくなったわ」

私は情けない声で、ぼつりと言った。

「ってことはさ、それほど重要なことじゃないんだよ。佐倉さんが話そうとしていることは」

須藤君は、からつとした声でそう言った。

「重要じゃない？ 離婚の原因は、私にあるというのに？」

須藤君のその言葉に、私はカチンときた。

「おつ。またまた佐倉 岬の強気が出てきたじゃない」

その言い方にも腹が立つて、私は須藤君に手を上げてしまった。

ペットボトルのお茶が、ベンチの上に転がる。

須藤君のビールが、地面に落ちる。

須藤君の手が私の両手首を掴んだ。

「どうして、須藤君はいつもいつもいつも」

涙声になってしまう。

そんな声が、自分の耳にはまるで他人の声のように響いた。

こんな声、自分でも聞いたことが無い。
そもそも、人前で泣いたりなんかしない。

須藤君の言葉は、私の心の中の、一番痛いところをついてくる。
そして、私の心の扉をノックする。

彼の言葉で、私は本気になってしまう。
なりふり構わず、そのままの自分でぶつかってしまう。
気持ちだが、かき乱されてしまう。

「離婚の原因は、佐倉さんのボーリヨクとか？」
意地悪な顔で、須藤君が私を見る。

「く、悔しい」
そんな冗談で会話を返されるのが悔しい。
こんなに簡単に泣いてしまうのが悔しい。
力で敵わないのが悔しい。

「手、痛いから離して」

私のその言葉に、須藤君は黙ったまま手首を握る力を緩めてくれた。

そして、彼の左手は私の右手を握りなおした。

須藤君と私は、手を繋いだ形になってしまった。

「なんで？」

繋がれた手を見て私は聞く。

「佐倉さんが逃げないように」

須藤君の静かな声が、夜の公園に響いた。

「俺もさ、いろいろと考えたんだ。珍しくもね。自分のこととか、
あなたのこととか。で、青くなったよ。今まで自分がいかにいい加減に生きてきたかって自覚してさ」

須藤君が話し出す。

「そんなの、自覚なんてしなくなかったし、したところで『だから

何？』って感じになると思ったんだけど」

須藤君のその声は、今まで聞いた彼の声のどの色とも違っていた。

須藤君が私に、私と同じ目線に立って自分の気持ちを話してきてくれるのがわかった。

「佐倉さんといると、そんな自分のささくれに気がつかされることになって、面倒だと思った。佐倉さんのこと、面倒な女だってさ」

で、佐倉さんに会った時についてい意地悪な話し方をしちゃったよなあ、なんて言った。

「だけど。それだけじゃなかったんだよなあ。あなたのこと、面倒な女だけじゃないって思って」

須藤君のかすれたような声が続く。

「なんというか、摩訶不思議な感情なんだけど」
ぴたんとした須藤君の手の冷たさを感じる。

「面倒だと思ったけど」

須藤君が、私の手を少しだけ強く握ってきた。

「佐倉さんとなら、そんな自分とも向き合って歩いていけるかなあと思ったんだ」

須藤君の、いつもは意地悪にしか笑わないその口が、とても優しく笑った。

「ああなたが、好きなんだ」

その笑顔に、私はとてつもない暗闇に突き落とされた気持ちになる。

沈黙が闇を覆う。

須藤君は、気持ちの全部で私に向ってきた。

彼には迷いがなかった。

そして、その言葉はストレートに私の心に刺さった。

まるで、鏡を見るように、私の心と須藤君の心は同じだった。

全く違う人生を歩いてきた私たちだけど、お互いの心の中に、自分と共鳴するものを見つけてしまったのだ。

でも、だからこそ。

そこに行つてはいけない。

「私は、もう誰とも一緒には歩かない」

それが私の答えだった。

「そうきたか」

須藤君が私の手をゆつくりと離す。

「まあ、でも。その答えは、俺のことが嫌いとかいうんじゃないんだろうしな」

「……嫌いよ」

「説得力なし」

そう言つて笑うと、須藤君はベンチから立ち上がった。

そして、地面に転がっている缶を拾った。

「まあ、今日のところは、帰りますか」

そう言つて歩き出した。

ゆつくりと立ち上がる私の目には、地面にビールが転がった時にできた、濡れた地面のシミが見えた。

私は結局ひと口も飲まなかったお茶を持った。

あんなに冷たかったのに、もう既にぬるんでいた。

須藤君が、缶をゴミ箱に入れた。

そのあとを私は、とぼとぼとついて歩いた。

二人して歩きだした。

あんな話をしたのに、一緒に同じところに帰る私たちが可笑しかった。

まるで、喧嘩をした小学生同士が、通学路が同じ為に仕方なく一緒に帰るような、そんな感じだった。

そして、一緒に歩くうちに、いつの間にか仲直りをして、途中からはまた騒いで歩き出すような。

なんと喧嘩しても、きつと同じようにして仲直りしていく友達のような。

歩きながら、怖いくらいに確信に満ちた答えが私を襲った。

そうだ。

この人は。

この人は、私の相手だと。

「佐倉さん？」

立ち止まった私に須藤君が振向き、声をかけた。

「どうして？ どうして私と一緒になんて帰れるの？」

流れる涙をこれ以上見せたくなくて、私は両手で顔を隠した。

「ちつとも、須藤君の望むような答えも、ちつとも出せないのに。

……どうして、私を拒否しないの？」

もつと、もつと。岬が努力しないと。

「どうして？ どうして？」

どうして、あなたと違う私を受け入れてくれるの？

「……同じ答えを持つ人なんて、いないんじゃないの？」

ぼつり、と須藤君が言った。

「佐倉さんは、自分がなりたい自分になればいいんじゃないのかな」

そんな言葉に驚いて、手を離して須藤君を見た。

「自分がなりたい自分？」

「うーん。それも、本当はかなり難しいけど」

そう言って、須藤君が舌を出す。

「俺の場合は、それを目指すというか。……うん、自由に生きたかった。面倒なことを避けて、楽に、楽しくって」

須藤君が私に近づき、私がつけていたペットボトルを持ってくれた。

そしてあいている方の手で、私の手を握った。

やっぱり冷たい、ひんやりとピタンした手だった。

でもその手の平には、うっすらと汗があった。

汗なんかかきそうに無い手の人だと思ったのに。

最初に会った時は、私はそう思っていた。須藤君のことを。

「でも、そうしているうちに。全てにおいていい加減になってきて。そのせいで、いろんなことが自由でなくなってきた」

手を繋いだまま私たちは歩き出した。

「難しいね、佐倉さん。自分を生きるって」

「自分を、生きる」

自分を。

自分の人生を。

「でも、私は。そんなことは、出来ない。ひどいことをしたから。彼に」

「……俺だって」

須藤君が言う。

「じゃあ、二人して死ぬ？」

歩きながら須藤君が言う。

「死んだら、許されるの？」

「そんな、選択肢があるの？」

「許されるも、許されないも。死んだら、自分から死を選んだのなら。ただ終るだけだよ。ただね」

「終るだけ」

「そう、ドラマが途中で打ち切りになるように。ただ、ぶつりと終るだけ。それだけ。……やっぱ、俺はそれは嫌だな」

「えっ？」

「ここまで、図太く生きてきたんだから。うーん、そうだなあ。須藤的に考えるのなら、俺がこれから自分の人生をまっとうすること、今までのことは総決算ってことで」

「そ、総決算？」

「うん。だから、佐倉さんも一緒に生きようよ。まあ、そうだなあ。初めて会った時に自転車の後に乗った時のような、佐倉さんのはったりと度胸と強気と俺の図太さがあつたら、たいていのことは乗り切れると思うけどな」

須藤君の瞳の中に私が映る。

生きていている私が。

そして戸惑っている私が。

須藤君、須藤君。

「私、苦しかった。誰にも言えないことがあつて」

もう、私は隠さなかった。

流れる涙も。

醜い本当の感情も。

だめな私も。

辛かった感情も。

ここにいるのは、いつも頼りされる「岬ちゃん」じゃなかった。

弟のことを心配したり、従姉妹の恋を応援したり、親にも心配を掛けたくないとおもって一人暮らしをしている、そんな「岬ちゃん」では。

そして、誰かの期待に答えようとする「岬」でもなかった。

愛されたいために自分の気持ちを押し殺して、仁の側で過ごした「岬」でも。

須藤君の前にいるのは、ただの「佐倉 岬」だった。

「佐倉さんの話を聞くよ。でもそれは、佐倉さんと離れるために聞くんじゃなくて、俺が佐倉さんと一緒にいたいから聞く話だからね」

その言葉を、私は須藤君の腕の中で聞いた。

Tシャツ越しに、須藤君の体温を感じた。

その体温を感じながら、私という人間を初めて受け止めてくれた人に会った不思議を感じた。

私はもう、泣くのを止めなかった。

夏の夜の風が私たちの髪を揺らした。

遠くで、風鈴の音がちりりと聞えた。

26話・彼女と会って、彼女と生きて

季節がゆつくりと変わっていく。

もう、涼やかな風に揺れていた風鈴の音も聞こえなくなっていた。

相澤と新人クンは、いつのまにか社内公認のカップルになっていた。

秘書室に行くたびに、そのことからかかってやろうとチャンスを伺っていたが、なんと俺のほうに逆に「須藤さんの彼女って素敵な人ですね」なんて言われてしまった。

あの、弱気だった相澤は今何処。

悔しいんで俺もそんな時はこう言ってる。

「いい女だろ？ やっぱいい男には、いい女がつくんだよね」って。

会社の側の街路樹の葉が黄金色に染まる頃、社内報に林の結婚の記事が出た。

「この二人って、前から噂があったのよね」

小川さんはそう言うのと、「ああ、うらやましい」と大きく溜息をつきながらそれを眺めていた。

前から噂？

その事実混乱するとともに、正直ほっとする気持ちもあり。

こんな風に考える俺は地獄行きだなと思いつつ、林については、これ以上考えるのは止めた。

坂田と有加ちゃんも、あのまま上手くいつているようだっただ。

有加ちゃんと上手くいくようになった影響か、坂田からの連絡もそしてヤツが俺の部屋に来ることも、めっきり減っていた。

「たまには来いよ」

そんなメールを打ってはみるけど、書いたまま送信できず、保留にになってしまうことが多かった。

便りの無いのはなんとかってことだろうしなあ、と。

そして保留のままのメールは、送られることなく、削除となった。

「ビールの季節も、そろそろおしまいだね」

髪を短く切った佐倉 岬が、俺の隣りでそう言った。

彼女の持論は、夏はビール、冬は日本酒らしい。

あの夏の日の夜から、ぽつりぽつりと彼女は自分のことを話した。

正直言つて、俺が受け止められることを越えている、彼女の夫からの精神的な虐待を俺は感じた。

でも、彼女は俺に話してくれた。

俺が、一緒に生きようと言ったからだ。

彼女の細い体を抱きながら、自分の腕の中に、自分の愛情の全てを傾ける相手がいるという幸せを感じた。

そして思った。

愛情は、あったのだろうと。

彼女と彼の間にも。

その形がどうであれ、きつとあつたのだらうと。

正しい形の愛情なんて、この世には存在しないのかもしれない。
愛情なんて、所詮は個人のエゴに過ぎないのかもしれない。

俺自身、彼女に対して、そんな気持ちの迷宮に入りこんでしまうことがある。

でも、やっぱり俺は、愛情にはそれだけじゃない何かがあると信じたと思った。

それは、彼女と会って、彼女と生きて。
初めて、自分の人生を歩き出せたような、心地のよい責任を感じることが出来たからだ。

こんな風に人の気持ちを变える力も、愛情にはあるんじゃないかって思えるようになってきたからだ。

「今度、銀座においしい日本酒でも買いに行こうか。岬」
俺のそんな言葉に、「そうだね」と佐倉 岬が、穏やかな顔で笑った。

26話・彼女と会って、彼女と生きて（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288p/>

Rebirth

2011年4月28日12時40分発行